第245表　ＳＫ112出土土器観察表

番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	型径	最大径	胎数	色調	残存状況	特徴・その他
1561	須恵器・甕	(14.6)	残8.0	—	—	—	—	灰白	口縁部1/4	
1562	須恵器・甕	(14.6)	残5.4	—	—	—	—	灰白	口縁部1/8	底部内面を回転ヘラナデ
1563	須恵器・甕	(12.5)	5.0	(4.8)	—	—	40	灰～灰白	口縁部1/8・底部1/8	底部糸切り
1564	須恵器・甕	(42.5)	4.6	(4.8)	—	—	34	灰白	口縁部1/4・底部僅か	3～6mm大の砂含む／底部糸切り
1565	土師器・小皿	(10.2)	1.8	(5.4)	—	—	17	灰褐	口縁部僅か・底部1/2	底部糸切り
1566	土師器・小皿	(10.1)	1.6	(5.8)	—	—	15	灰白	口縁部1/4・底部完存	底部糸切り
1567	土師器・小皿	10.1	1.2	6.9	—	—	11	灰白～褐灰	完存	底部糸切り
1568	土師器・小皿	9.8	1.7	6.9	—	—	17	にぶい橙	ほぼ完存	底部糸切り
1569	土師器・小皿	15.6	1.7	4.9	—	—	10	灰白	完存	底部ヘラ起こし
1570	土師器・小皿	(8.8)	1.2	(4.8)	—	—	13	にぶい橙	1/2	底部糸切り
1571	土師器・小皿	8.9	1.4	5.4	—	—	15	灰白	口縁部3/4	底部糸切り
1572	土師器・坏	(13.7)	残3.4	—	—	—	—	にぶい橙	口縁部1/4	
1573	土師器・椀	—	残2.1	(6.0)	—	—	—	灰褐～橙	底部1/4	底部糸切り
1574	黒色土器・椀	(16.0)	残4.2	—	—	—	—	褐灰～灰白	口縁部1/3	内外面ともナデ仕上げ
1575	黒色土器・椀	(14.3)	残4.3	—	—	—	—	褐灰～灰白	口縁部1/8	内面にヘラミガキの痕跡あり
1576	黒色土器・椀	(13.7)	残4.3	—	—	—	—	黄	口縁部1/4	内面をヘラミガキ
1577	黒色土器・椀	(12.9)	5.1	(6.7)	—	—	39	褐灰～灰白	1/4	内面をヘラミガキ
1578	黒色土器・椀	(15.8)	5.3	(6.6)	—	—	33	黄褐～浅黄橙	口縁部1/4・底部完存	内面にヘラミガキの痕跡あり
1579	黒色土器・椀	(15.1)	残5.0	—	—	—	—	灰褐	1/4	内面にヘラミガキの痕跡あり
1580	黒色土器・椀	—	残4.2	(6.8)	—	—	—	黒～灰白	底部1/2・体部僅か	
1581	黒色土器・椀	—	残5.9	6.4	—	—	—	黒～灰	底部完存・体部僅か	内外面ともナデ仕上げ
1582	黒色土器・椀	—	残2.4	(5.9)	—	—	—	黒～灰	底部完存	内面ヘラミガキ／高台内側に木圧痕
1583	黒色土器・椀	—	残2.9	(5.0)	—	—	—	黒褐～黄灰	底部1/4	内面をヘラミガキ／精良な粘土
1584	黒色土器・椀	—	残1.9	(6.3)	—	—	—	黒褐	底部1/2	内面をヘラミガキ
1585	黒色土器・椀	—	残1.6	6.0	—	—	—	黒～灰白	底部完存・体部僅か	底部ヘラ削りによる高台／内面に墨文

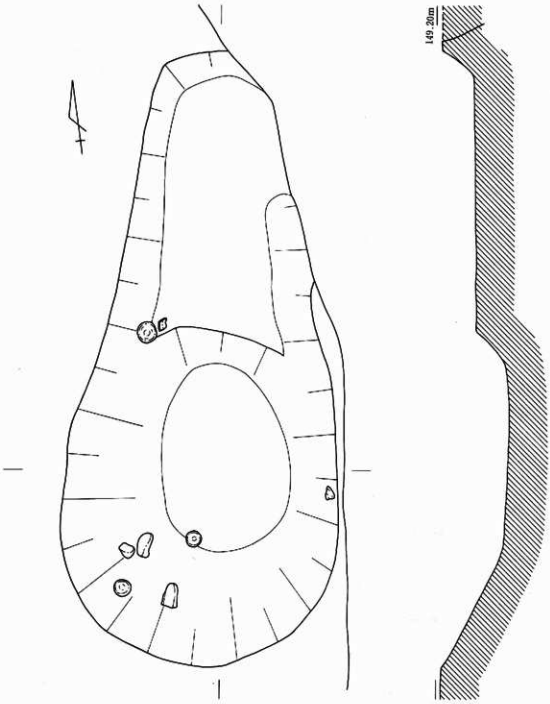
ＳＫ１１５（図版140・160・161）

検出状況　Ⅳ区中央部東側に位置する。古墳時代に掘削され、平安時代中期に埋没したＳＤ86の西側肩部と接している。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　本土壙は基本的に２段に掘り込まれている。上段の平面形は不整形な楕円形を呈する。検出面における規模は、長軸方向で6.44m、その直交方向で2.90mを測る。下段の平面形は楕円形を呈し、長軸方向で3.48mを測る。横断面は最深部で逆台形を呈し、土壙中央部における検出面からの深さは74cmを測る。また、上段部の検出面からの深さは33cmである。

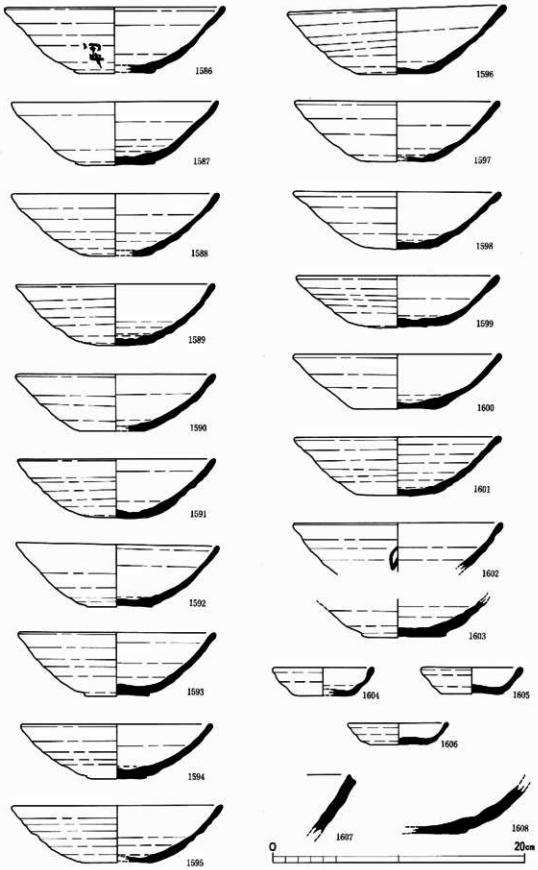
埋土　最下層を除いて、基本的に砂混じりシルト層が堆積しており、特に第４層においてはラミナが観察できるなど、自然堆積によって埋没したようである。

出土遺物　埋土中および土壙底から比較的多く出土している。埋土中においても、特に下層出土のものが大半を占めている。須恵器・土師器・瓦器が出土しているが、須恵器が圧倒的に多い。



1．暗褐灰色極砂混じりシルト
（中・粗砂混入）
2．暗灰色細砂混じりシルト
（小礫～粗砂混入）
3．灰色砂混じりシルト～
黄灰色シルト
4．淡黒灰色シルト（下層
に細砂集積）
5．暗青灰色シルト

第624図　ＳＫ115



第625図　ＳＫ115出土土器（１）

須恵器　椀・小皿・捏鉢が出土している。椀が量的に最も多く出土している。

椀　ほぼ同じ特徴を有するもので、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚する。底部は、平高台の痕跡を有し比較的明瞭な平底をなすものと、全くその痕跡をもたないものとがある。いずれも回転糸切りにより切り離されている。

なお1586と1602の体部外面に墨書が認められ、1586については「田中」と明瞭に読み取れるが、1602については欠損していることもあり、文字を判読できない。

小皿　出土量は多くはなく、図化できたのは３個体のみである。いずれも、底部から内湾気味に立ち上がり、口縁部が肥厚している。底部は回転ナデ調整により切り離されている。

捏鉢　小片のため図化できた２個体についても、断面のみである。1607は、口縁部であるが、口縁部に対して直交する方向にナデ調整を施し端面を設けている。1608は底部を中心とした破片であるが、底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がっている点が特徴的である。

土師器　小皿・大皿・甕の各器種が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

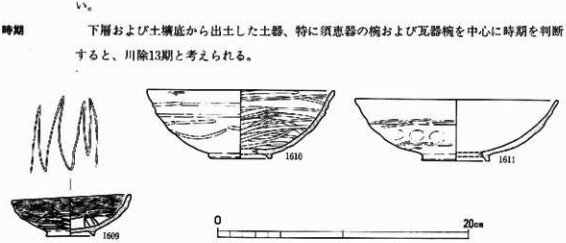
瓦器　椀が出土している。図化できたのは３個体のみであるが、法量的に小型と大型の２つに分けることができる。

小型椀　1609は小型に分類されるものである。口径に対して比較的浅い椀形を呈し、断面逆三角形の高台が貼り付けられている。口縁部は２段にわたるナデ調整により成形されている。内外面とも暗文が施されているが、外面と内面とでは内面の方が密にかつ丁寧に施されている。また外面の暗文は、上半に対して下半ほど粗雑な傾向が認められる。さらに、内面見込みにも体部に暗文を施した後ジグザグ状の暗文が施されている。暗文の単位は内外面とも同じと考えられ、その幅は1.5～2.0㎜である。

大型椀　1610・1611は大型に分類される椀である。形態的特徴は、小型の椀とほとんど変わりなく、口径に対して比較的浅い椀形をなしている。また、口縁部についても２段のナデ調整により成形されている。ただし、高台の形態は異なり、断面方形をなしている。また、高台高は５㎜とわずかである。

暗文は小型椀同様内外面に施されているが、1611については磨滅が著しく図化できなかった。内面と外面とでは内面の方が明らかに密にかつ丁寧に施されている。外面はわずかに数条施されている程度である。見込みについては、残存せず、暗文の有無は確認できない。

時期　下層および土壙底から出土した土器、特に須恵器の椀および瓦器椀を中心に時期を判断すると、川除13期と考えられる。



第626図　ＳＫ115出土土器（２）

第248表　ＳＫ115出土土器観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	頸径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他
1586	須恵器・鉢	17.2	5.2	(6.5)	―	―	30	灰白	底部1/2・口縁部1/8	体部下半に「田中」の墨書あり
1587	須恵器・鉢	(16.4)	5.0	(6.4)	―	―	30	灰白	1/2	
1588	須恵器・鉢	16.2	4.9	(5.6)	―	―	30	灰	1/2・底部摩か	
1589	須恵器・鉢	15.6	4.8	5.3	―	―	30	灰	ほぼ完存	3～5mm大の礫含む
1590	須恵器・鉢	16.0	4.6	(5.0)	―	―	28	灰	口縁部5/6	
1591	須恵器・鉢	15.6	4.6	5.5	―	―	29	灰白	1/2	3～6mm大の礫含む
1592	須恵器・鉢	16.0	5.1	5.0	―	―	31	明黄灰	底部完存・口縁部1/2	
1593	須恵器・鉢	(15.6)	5.0	(5.2)	―	―	32	灰白	1/4	
1594	須恵器・鉢	(15.0)	4.3	(4.8)	―	―	28	灰	底部完存・口縁部1/4	1mm以下の砂粒多く含む
1595	須恵器・鉢	(16.6)	4.5	(4.6)	―	―	27	灰	1/4	
1596	須恵器・鉢	16.9	5.4	6.5	―	―	31	灰	底部完存・口縁部4/5	口縁部が歪んでいる
1597	須恵器・鉢	(16.5)	4.8	(5.6)	―	―	30	灰白	1/3	
1598	須恵器・鉢	16.4	4.5	5.3	―	―	27	灰～灰白	ほぼ完存	3～6mm大の礫含む
1599	須恵器・鉢	15.8	4.1	4.8	―	―	25	灰～灰白	完存	
1600	須恵器・鉢	16.1	4.3	6.2	―	―	26	灰白	2/3	
1601	須恵器・鉢	16.2	4.6	6.4	―	―	28	灰白	完存	
1602	須恵器・鉢	16.4	残3.7	―	―	―	―	灰	口縁部1/8	体部に墨書(一部)あり
1603	須恵器・鉢	―	残3.9	6.4	―	―	―	灰白	底部完存・体部僅か	1～2mm大の礫多く含む
1604	須恵器・小皿	(7.8)	2.2	(4.8)	―	―	28	灰白	1/2	
1605	須恵器・小皿	7.8	2.1	4.8	―	―	26	灰	口縁部3/4・底部完存	
1606	須恵器・小皿	(8.0)	1.7	4.4	―	―	21	灰白	2/3	
1607	須恵器・徳利	―	残4.5	―	―	―	―	褐灰	小片	
1608	須恵器・徳利	―	残3.4	―	―	―	―	明黄灰	小片	
1609	瓦器・鍋	9.2	3.3	3.9	―	―	35	暗灰	口縁部3/4・底部完存	口縁部内外面・見込みに暗文/粕良な仕上
1610	瓦器・鍋	(14.8)	5.4	4.6	―	―	36	灰	1/3	口縁部内外面とも暗文を施すが内面の方が密
1611	瓦器・鍋	(16.1)	4.9	(4.9)	―	―	30	暗灰	1/2	全体的に摩滅が顕著/内外面に暗文を施す

ＳＫ１１９

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの南東部に位置する。ＳＤ126東側屈曲部の南約１mにあたる。他の遺構との切り合い関係はない。

形状・規模　本土壙は２段にわたって掘り込まれている。上段の平面形は不整形な楕円形を呈し、その規模は長軸で1.40m、その直交方向で1.07mを測る。また、下段の平面形は不整形な円形を呈し、その規模は長軸で95cmである。最深部における横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは44cmである。

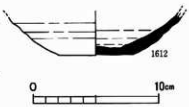
埋土　上から、灰色砂質シルト層、暗灰色砂混じりシルト層、茶褐色シルト混じり暗灰色シルト層の３層が堆積している。このなかで、最下層は地山土をブロック状に含む人為的に埋められた層である。他の２層は自然に堆積した層と考えられる。

出土遺物　埋土中より土器のみが出土している。器種としては須恵器と土師器が出土しているが、

土師器は小片のため器種も特定できない。

須恵器　椀が出土しているが、図化できたのは１個体のみである。底部は回転糸切りにより切り離されている。

時期　出土した須恵器の椀から時期を判断すると、川除13～14期と考えられる。



第627図　ＳＫ119出土土器

第247表　ＳＫ119出土土器観察表

番号	器種	法量（cm）						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	頸径	最大径	厚さ			
1612	須恵器・椀	—	3.9	5.6	—	—	—	灰白	高部ほぼ完存	

ＳＫ１２２

検出状況　Ⅳ区中央部西側で検出している。小微高地ｄの南側の縁辺から約30m北側に位置する。

形状・規模　形状は楕円形気味であるが、基本的には不整形を呈している。

検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に113cmで、短軸方向に74cmである。土壙底では長軸方向に97cm、短軸方向に60cmである。検出面からの深さは最も深いところで11cmで、断面形は皿形を呈している。

埋土　埋土は１層が堆積している。灰色シルト質極細砂の堆積が認められる。

出土遺物　埋土中より土器のみが出土している。須恵器の椀が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器が小片のため正確な時期は明らかではないが、川除13～14期と考えられる。

ＳＫ１２４

検出状況　Ⅳ区中央部西側で検出している。小微高地ｄの南側の縁辺から約22m北側に位置する。

形状・規模　形状は基本的には不整形を呈しているが、楕円形を指向しているようである。

検出した規模は以下のとおりとなる。検出された部分は、長軸方向に1.35mで、短軸方向に1.08mである。土壙底では長軸方向に85cm、短軸方向に63cmである。検出面からの深さは最も深いところで32cmで、断面形は皿形を呈している。

埋土　埋土は１層が堆積している。淡灰色シルト質極細砂の堆積が認められる。

出土遺物　埋土中より土器のみが出土している。須恵器の椀、土師器の鍋が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　出土土器が小片のため正確な時期は明らかではないが、川除14期と考えられる。

ＳＫ１３６（図版140・162）

検出状況　Ⅳ区のほぼ中央、小微高地ｄの中央やや南寄りで検出された。中世の掘立柱建物ＳＢ56に西接する。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　平面形は楕円形である。規模は、検出面での長径65cm、短径40cmであり、土壙底での長

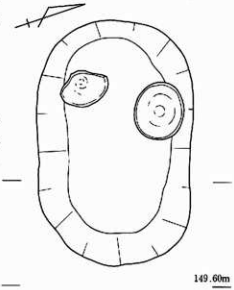
径52cm、短径28cmを測る。検出面から土壙底までの深さは15cmである。断面形は皿形を呈している。

埋土　灰褐色シルト質極細砂の堆積が認められた。

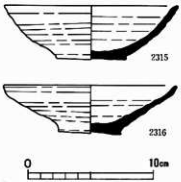
出土遺物　須恵器の椀が土壙底に接する形で出土した。

ともに最終仕上げはヨコナデであり、底部の切り離しは回転糸切り手法によっている。2316の体部は直線的に外方にのび、口縁部が内湾するものである。

時期　出土土器から川除13期と考えられる。



第628図　ＳＫ136



第629図　ＳＫ136出土土器

第248表　ＳＫ136出土土器観察表

番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	胴部	最大径	焼成	色調	残存状況	特徴・その他
2315	須恵器・椀	13.8	4.2	5.5	—	—	30	灰白	口縁完存	焼成不良／底部回転糸切り
2316	須恵器・椀	13.6	3.9	5.1	—	—	28	淡黄	完存	焼成不良／底部回転糸切り

その他の土壙

以上に掲載しなかったⅣ区の土壙のうち、平安時代～鎌倉時代に属することが判明したものの概略を一覧表にまとめることにする。

第249表　Ⅳ区　中世その他の土壙一覧表（単位：cm）

遺構名	規模（検出面） 長さ	幅	規模（土壙底） 長さ	幅	深さ	平面形	断面形	時期	出土遺物
SK108	120	105	95	67	15	楕円形	皿形		須恵器・土師器
SK111	104	100	90	78	10	不整形	皿形		須恵器・土師器
SK113	222	150	192	120	12	不整形	皿形		須恵器・土師器
SK114	117	66	84	50	12	楕円形	皿形		須恵器・土師器・瓦器
SK116	84	60	38	26	31	楕円形	U字形		須恵器・土師器・瓦器
SK117	68	60	30	30	23	不整形	U字形		須恵器・陶器・磁器

（４）溝

ＳＤ９３

検出状況　Ⅳ区の北西部、小微高地ｄの中央で検出されている。ＳＤ92を切っている。南北方向に走行し、北端は調査区外、南端はしだいに浅くなって消滅している。

形状・規模　長さは16.8mが確認された。幅は、検出面で0.27～0.30m、溝底で0.10～0.15mを測る。横断面はＵ字形を呈し、検出面からの深さは11～13cmである。溝底の標高は、北端で149.31m、南端で149.26mである。

埋土　灰白色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　須恵器の椀・甕・壺、土師器の小皿などが出土した。
いずれも細片のため図化および詳細な時期の決定は不可能であった。

時期　川除12～14期である。

ＳＤ９４

検出状況　Ⅳ区の北西部、小微高地ｄの中央で検出されている。ＳＤ93の東方に位置する南北方向の溝である。ＳＤ92を切っている。溝の北端は調査区外にあり、南端はしだいに浅くなって消滅している。

形状・規模　長さは21.0mが確認された。幅は、検出面で0.15～0.50m、溝底で0.05～0.30mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは６～９cmである。溝底の標高は、北端で149.33m、南端で149.31mと大きな高低差は認められない。

埋土　灰白色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　遺物が出土していないため、埋土の類似などから川除12～14期と考えられる。

ＳＤ９７

検出状況　Ⅳ区の北方、小微高地ｄのほぼ中央で検出された。ＳＤ96に東接する溝である。他の遺構との切り合い関係は認められない。

形状・規模　長さは12.0mが確認された。幅は、検出面で1.00～1.98m、溝底で0.45～1.65mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは10～15cmである。溝底の標高は、北端で149.21m、南端で149.25mと大きな高低差は認められない。

埋土　灰白色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　須恵器の椀・甕、土師器の器種不明の小片が出土しているが、図化および詳細な時期決定の資料にはならないものである。

時期　埋土の類似などから川除12～14期と考えられる。

ＳＤ９８

検出状況　Ⅳ区の北方、小微高地ｄのほぼ中央で検出された。中世の掘立柱建物ＳＢ52に北接する溝であるが、ＳＢ52を構成する柱穴を切っていることから時期を若干異にする。

形状・規模　西半でやや屈曲が認められるが、直線的にのびる。長さは12.4mが確認された。幅は、検

出面で0.28～0.43m、溝底で0.10～0.20mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは2～10cmとかなり浅いものである。溝底の標高は、東端で149.43m、西端で149.42mと大きな高低差は認められない。

埋土　灰白色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　遺物の出土は一切認められなかった。

時期　遺物が出土していないが、埋土の類似や溝の方向性から、川除12～14期と考えられる。

ＳＤ９９

検出状況　Ⅳ区の北方、小微高地ｄのほぼ中央で検出された。ＳＤ98の南に平行する東西方向の溝である。中世の掘立柱建物ＳＢ52・ＳＢ53と重なりが認められる。ＳＢ52の柱穴を切っている。また、古墳時代の溝ＳＤ96も切っている。

形状・規模　途中で途切れる部分を含めた長さは11.4mである。幅は、検出面で0.38～0.45m、溝底で0.15～0.22mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは8～11cmとかなり浅い溝である。溝底の標高は、東端で149.44m、西端で149.43mと高低差は認められない。

埋土　灰白色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　古墳時代とみられる須恵器の坏が出土しているが、本遺構と切り合うＳＤ96埋土内の遺物と考えられる。

時期　確実に遺構に伴う遺物が出土していないこと、埋土の類似や溝の方向性から考えれば、川除12～14期の所産であろう。

ＳＤ１００

検出状況　Ⅳ区の北方、小微高地ｄのほぼ中央で検出された。ＳＤ98・ＳＤ99の南に平行する東西方向の溝である。中世の掘立柱建物ＳＢ52・ＳＢ53と重なりが認められるが、切り合い関係は確認されないため先後関係は明らかにしがたい。その他の遺構との切り合い関係はみられない。

形状・規模　直線的な溝であり、長さは5.00mを検出した。幅は、検出面で0.30～0.35m、溝底で0.05～0.20mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは8～10cmとかなり浅い溝である。溝底の標高は、東端で149.43m、西端で149.45mと大きな高低差は認められない。

埋土　灰白色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　須恵器の椀、土師器の器種不明の小片、黒色土器の椀などが出土しているが、図化できる資料は存在しない。

時期　出土土器から川除11～12期と考えられる。

ＳＤ１０１

検出状況　Ⅳ区の北方、小微高地ｄのほぼ中央で検出された。ＳＤ98・ＳＤ99・ＳＤ100の南に平行する東西方向の溝である。中世の掘立柱建物ＳＢ52・ＳＢ53と重なりが認められるが、ＳＢ52を構成する柱穴を切っているため、これより新しいことが判明した。また、本遺構より南に存在するＳＢ56とも平行している。

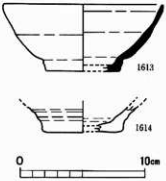
形状・規模　直線的な溝であり、長さは9.60mが確認された。幅は、検出面で0.35～0.75m、溝底で0.13～0.55mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは10～12cmである。溝底の標高は、東端で149.40m、西端で149.42mと大きな高低差は認められない。

埋土　灰白色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　須恵器の椀・甕、土師器の椀・甕・器種不明の小片、黒色土器の椀などが出土しているが、図化できたのは須恵器の椀（1613）と土師器の椀（1614）の２点のみである。

底部の切離しにはヘラ起こし手法を用いている。

時期　出土土器から川除11期と考えられる。



第630図　ＳＤ101出土土器

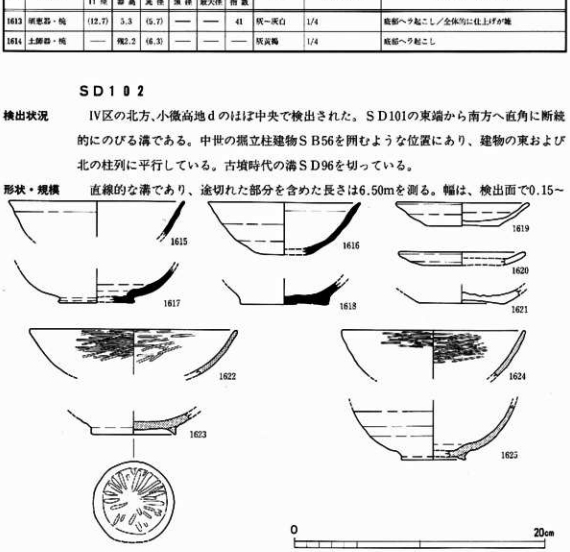
第250表　ＳＤ101出土土器観察表

番号	器種	法量（cm）						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	厚様	最大径	指数			
1613	須恵器・椀	(12.7)	5.3	(5.7)	―	―	41	灰～灰白	1/4	底部ヘラ起こし／全体的に仕上げが雑
1614	土師器・椀	―	残2.2	(6.3)	―	―	―	灰黄褐	1/4	底部ヘラ起こし

ＳＤ１０２

検出状況　Ⅳ区の北方、小微高地ｄのほぼ中央で検出された。ＳＤ101の東端から南方へ直角に断続的にのびる溝である。中世の掘立柱建物ＳＢ56を囲むような位置にあり、建物の東および北の柱列に平行している。古墳時代の溝ＳＤ96を切っている。

形状・規模　直線的な溝であり、途切れた部分を含めた長さは6.50mを測る。幅は、検出面で0.15～



第631図　ＳＤ102出土土器

0.40m、溝底で0.10～0.20mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは5～7cmである。溝底の標高は、北端で149.47m、南端で149.46mと大きな高低差はない。

埋土　灰色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　須恵器の椀・甕、土師器の椀・坏・甕・小皿、黒色土器の椀などがある。

須恵器の椀の底部の切離しには、ヘラ起こし手法を用いるもの（1618）と、回転糸切り手法を用いるもの（1617）の二者がある。

時期　出土土器から川除12期と考えられる。

第251表　ＳＤ102出土土器観察表

番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	類径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他
1615	須恵器・椀	(13.9)	残2.7		—	—	—	灰	口縁部1/4	
1616	須恵器・椀	(12.0)	4.1	(4.6)	—	—	34	灰白	1/8	
1617	須恵器・椀	—	残2.7	(6.6)	—	—	—	灰	底部・体部際か	底部回転糸切り
1618	須恵器・椀	—	残1.9	(7.0)	—	—	—	灰白	底部1/4	底部ヘラ起こし
1619	土師器・小皿	(10.5)	1.9	(5.8)	—	—	18	灰黄～浅黄橙	底部完存・口縁部僅か	1～3mm大の礫含む
1620	土師器・小皿	(10.0)	1.0	(6.6)	—	—	10	灰白	口縁部1/6	
1621	土師器・坏	—	残1.2	(7.1)	—	—	—	褐灰	底部1/4	底部糸切り
1622	黒色土器・椀	(16.2)	残3.5	—	—	—	—	黒～灰白	口縁部1/9	内外面ともヘラミガキ
1623	黒色土器・椀	—	残1.8	(6.6)	—	—	—	黒褐～浅黄橙	底部完存	見込みにヘラミガキ／底部外面放射状のヘラ先痕
1624	黒色土器・椀	(14.4)	残3.7	—	—	—	—	黒	口縁部1/3	内外面ともヘラミガキ
1625	黒色土器・椀	—	残4.3	(4.0)	—	—	—	黒～灰	底部・体部際か	内面をヘラミガキ

ＳＤ１０３

検出状況　Ⅳ区の北方、小微高地ｄのほぼ中央で検出された。ＳＤ102に直交し、ＳＤ101などの東西方向の溝に平行している。ＳＢ56・ＳＢ57との重なりがみられ、本遺構はＳＢ57を構成する柱穴に切られている。古墳時代の溝ＳＤ96を切っている。

形状・規模　若干向きを変えるものの、ほぼ直線的にのびる溝であり、長さは21.4mが確認された。幅は、検出面で0.35～0.45m、溝底で0.12～0.35mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは8～11cmである。溝底の標高は、東端で149.38m、西端で149.46mと大きな高低差は認められない。

埋土　灰色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　須恵器の椀・甕、土師器の小皿・器種不明の小片などが出土している。

図化および詳細な時期を決定できる資料は含まれていない。

時期　川除12～14期と考えられる。

ＳＤ１０４

検出状況　Ⅳ区の中央、小微高地ｄのほぼ中央で検出された。ＳＤ103などの東西方向の溝に平行している。ＳＢ57・ＳＢ58・ＳＢ59との重なりがみられるが、切り合い関係は認められない。

形状・規模　直線的にのびる溝であり、長さは14.7mが確認された。幅は、検出面で0.27～0.50m、溝底で0.20～0.35mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは７～10cmである。溝底の標高は、東端で149.41m、西端で149.42mと大きな高低差は認められない。

埋土　灰白色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。他の東西方向の溝と平行するため、これらの遺構と大きな時期の隔たりはなく、川除12～14期と考えるのが自然である。

ＳＤ１０５

検出状況　Ⅳ区の中央、小微高地ｄのほぼ中央やや南寄りで検出された。ＳＤ104などの東西方向の溝に平行している。ＳＢ56・ＳＢ58・ＳＢ60・ＳＢ61との重なりがみられるが、切り合い関係は認められない。

形状・規模　直線的にのびる溝であり、長さは21.4mが確認された。幅は、検出面で0.35～0.50m、溝底で0.15～0.35mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは８～13cmである。溝底の標高は、東端で149.43m、西端で149.41mと大きな高低差は認められない。

埋土　灰白色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　遺物が出土していないため、詳細な時期は不明である。他の東西方向の溝と平行するため、これらの遺構と大きな時期の隔たりはなく、川除12～14期と考えるのが自然である。

ＳＤ１０６

検出状況　Ⅳ区中央部に位置する。北西から南東方向にほぼ直線的にのびる溝で、ＳＤ111と直交しＳＤ111を切っている。また、南東端部では古墳時代の溝ＳＤ107も切っている。

形状・規模　検出した長さは14.8mである。両端とも自然に途切れている。検出面における幅は0.10～0.37mを測る。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは７cmである。また、溝底部のレベルは南東から北西にかけて若干傾斜しており、北西端での標高は149.39m、南東端では149.47mである。

埋土　黒灰色砂混じりシルト１層が堆積していた。

出土遺物　本溝にともなう遺物は全く出土していない。

時期　遺物が全く出土していないため時期を特定することは困難である。ただし、他の平安時代後期の遺構の埋土との類似および方向性の一致から川除12～14期と考えられる。

ＳＤ１０９

検出状況　Ⅳ区の中央東寄り、小微高地ｄのほぼ中央で検出された。ＳＤ105などの東西方向の溝に直交する南北方向の溝である。ＳＢ56～ＳＢ62などの中世の掘立柱建物群Ａと平行し、溝内に柵と思われる柱列が認められたことから、これら居住域の東端を画する溝と思われる。ＳＤ108を切っている。

形状・規模　直線的にのびる溝であり、長さは26.8mが確認された。幅は、検出面で0.50～0.60m、溝

底で0.30～0.40mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは5～7cmである。溝底の標高は、北端で149.26m、南端で149.28mと大きな高低差は認められない。

埋土　灰白色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　須恵器の壺・甕・椀などが出土しているが、図化および詳細な時期を検討できる資料は含まれていない。

時期　川除12～14期と考えられる。

ＳＤ１１０

検出状況　Ⅳ区の中央東寄り、小微高地dのほぼ中央で検出された南北方向の溝である。ＳＤ105などの東西方向の溝に直交し、ＳＤ109の東にこれと平行する形で検出された。他の遺構との切り合い関係は認められない。

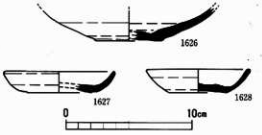
形状・規模　直線的にのびる溝であり、長さは14.4mが確認された。幅は、検出面で0.35～0.75m、溝底で0.24～0.60mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは6～10cmである。溝底の標高は、北端で149.18m、南端で149.30mと南側がやや低くなっている。

埋土　灰白色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　須恵器の椀・小皿などが出土している。

図化できたのは須恵器のみであり、椀・小皿とも、底部の切離しには回転糸切り手法を用いている。

時期　川除13～14期と考えられる。



第632図　ＳＤ110出土土器

第252表　ＳＤ110出土土器観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	黒斜	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他
1626	須恵器・椀	—	残2.4	(5.6)	—	—	—	灰白	1/4	1～3mm大の礫含む
1627	須恵器・小皿	(8.6)	1.7	(5.1)	—	—	19	灰白	1/8	
1628	須恵器・小皿	(8.0)	1.9	(4.5)	—	—	23	灰	1/4	

ＳＤ１１１

検出状況　Ⅳ区中央部に位置する。北東から南西方向にほぼ直線的にのびる溝で、ＳＤ106と中間部で直交し、切られている。北東端はＳＸ07に切られ、南西端は自然に途切れている。

形状・規模　検出した長さは約8mである。検出面における幅は50cmを測る。横断面は緩やかなU字形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは40cmである。

埋土　2層に分かれるが、2層とも褐灰色砂混じりシルト層とほぼ同質の層である。

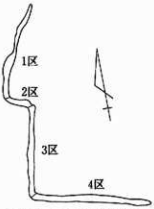
出土遺物　木遺構に伴う遺物は全く出土していない。

時期　遺物が全く出土していないため、時期を特定することは困難である。ただし、ＳＸ07およびＳＤ106に切られていること、および埋土の類似から川除11～13期と考えられる。

ＳＤ１１３（図版162・163・176）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ａ・Ｂ内をはしる溝である。本溝は基本的には直線的であるが、３ケ所で屈曲している。途中多くの溝を中心とした遺構と切り合っているが、その主な遺構は、ＳＤ114・ＳＤ121・ＳＤ126・ＳＤ136である。

形状・規模　検出した長さは74mである。検出面における幅は0.5～1.35mを測る。横断面は、皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは12cmである。溝底部のレベルは北から南かけて傾斜しており、その標高は１区北端で149.41m、４区東端で149.16mである。



第633図　ＳＤ113地区割り

埋土　黒灰色砂混じりシルト層１層が堆積していた。

出土遺物　比較的浅い溝であるが、土器の出土量は多い。ただし、そのほとんどは、３区・４区からの出土である。なお、本溝の遺物は、３区と４区にわけて取り上げているので、その取り上げを重視して、２つに分けて報告することにしたい。

４区　土器と鉄器が出土している。土器は須恵器・土師器・瓦器・白磁が出土しているが、須恵器が過半数を占める。

須恵器　椀・小皿・捏鉢・甕が出土しているが、甕については小片のため図化できなかった。

椀　図化したものはほとんど同じタイプと考えられる。つまり、底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、体部から口縁部にかけてはほぼ直線的にのびている。そして、口縁端部はわずかに肥厚している。底部は平高台の痕跡が若干残るものと残らないものがあるが、残らないものについても直線的な平底をなしている。ただし、1629の椀については、底部から口縁部にかけて大きく開きながら直線的にのび、口縁端部が捏鉢のようにナデ調整により明確な端面をもつなど、他の椀と形態を異にしている。

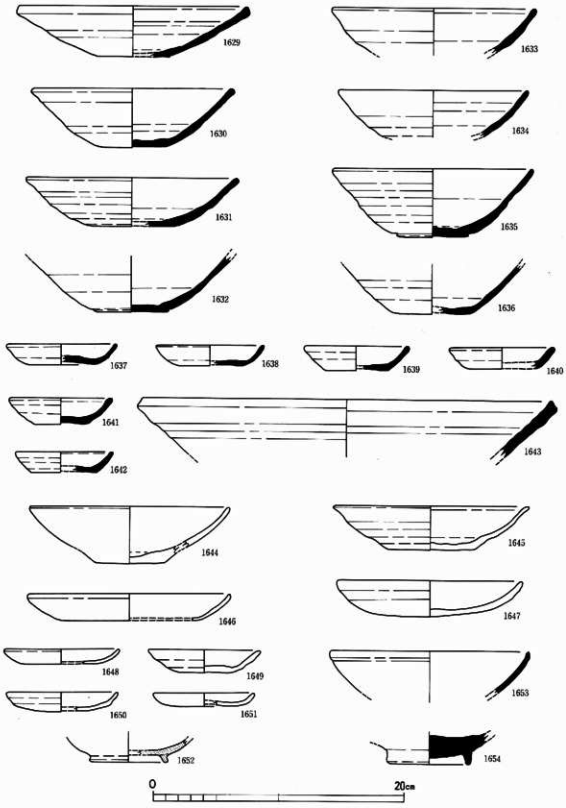
小皿　底部から体部・口縁部にかけての変換部が明瞭に屈曲するものと、その変換部が不明瞭なものとがある。前者は、器高に対して口径が小さく、口縁端部が肥厚している。これに対して後者は、器高に対して口径が大きく、口縁端部は肥厚していない。両者とも、底部は回転糸切りにより切り離されている。

捏鉢　図化できたのは１個体のみである。口縁部に対して直交するようにナデ調整を施し、明瞭な端面をなしている。

土師器　大皿・小皿・坏・椀・甕・羽釜の各器種が出土している。ただし、甕・羽釜については小片のため図化できなかった。

椀　図化できたのは１個体のみである。２つの破片からなり、完全に接合しないが、同一個体とみて間違いないものである。底部から口縁部にかけてゆるやかに内湾気味に立ち上がり、口縁端部は肥厚することなくおさめられている。全体的に磨滅が著しく詳細な調整方法は明らかにできないが、全体的に回転ナデ調整により仕上げられている。底部は回転糸切りにより切り離されている。

坏　本器種についても図化できたのは１個体のみである。体部から口縁部にかけては内湾気



第634図　ＳＤ113　４区出土土器

味に立ち上がるが、口縁部は強いヨコナデ調整により外反している。また見込みは、明瞭ではないが１段落ちる傾向が認められる。全体的に回転ナデ調整により仕上げられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。

大皿　図化できたのは2個体である。1646は、体部から口縁部にかけて横方向のナデ調整により仕上げている。底部については、わずかしか残存しないため、その整形・調整方法については明らかにしえない。1647は、口縁部を2段のナデ調整により仕上げ、以下については手捏ねにより成形している。

小皿　図化できたのは4個体であるが、底部の形態から大きく2つに分けることができる。一つは1648・1650・1651の3個体からなる一群である。口縁部を横方向のナデ調整により仕上げ、底部は手捏ねにより成形している。さらに1650・1651については、底部を手捏ねによる成形の後、不定方向のナデ調整により仕上げている。また、1650については、口縁部は2段のナデ調整によって仕上げられている。

もう一つの一群は、1649の1個体である。口縁部は2段の回転ナデ調整により仕上げられている。底部は、磨滅が著しく明確には観察できないのであるが、回転糸切りにより切り離されている。

瓦器　椀が出土しているが、図化できたのは1652の底部片に限られる。断面長方形の比較的しっかりした高台が貼り付けられている。全体的に磨滅が顕著で、暗文の有無については確認できなかった。

白磁　2個体出土している。1653は、口縁端部がわずかに玉縁状をなしⅣ類ないしⅡ類に分類されるものである。残存する範囲については、全面に釉薬がかけられている。1654も、Ⅳ類碗に分類される底部片である。

鉄器　2点出土している。M11については、断面方形の棒状のものである。残存長は7.8cm、最大幅は0.8cmである。具体的な器種については明らかにできない。

M12は、鋤先と考えられ、最大幅で5.4cmを測り、残存長は7cmである。

第635図　SD113　4区出土鉄器

3区　須恵器・土師器・瓦器・白磁が出土している。須恵器が過半数を占める。

須恵器　椀・小皿・捏鉢・壺・甕の各器種が出土している。

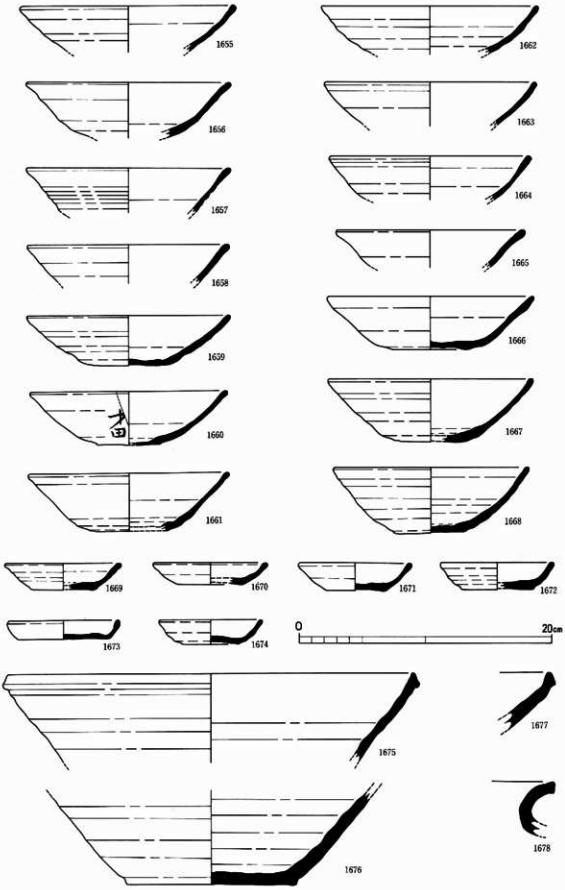
椀　最も量的に多く出土している。底部から体部にかけて内湾気味に立ち上がり、体部から口縁部にかけてはほぼ直線的にのび、口縁端部はわずかに肥厚する傾向にある。なお、1660の体部外面には「才田」と読み取れる墨書が認められる。

小皿　4区出土の小皿で認められたように、底部から体部への変換部の屈曲が明瞭なもの（1669～1672・1674）と不明瞭なもの（1673）とに分けることができる。後者については、口径に対して器高が低い点についても同様な傾向を示している。

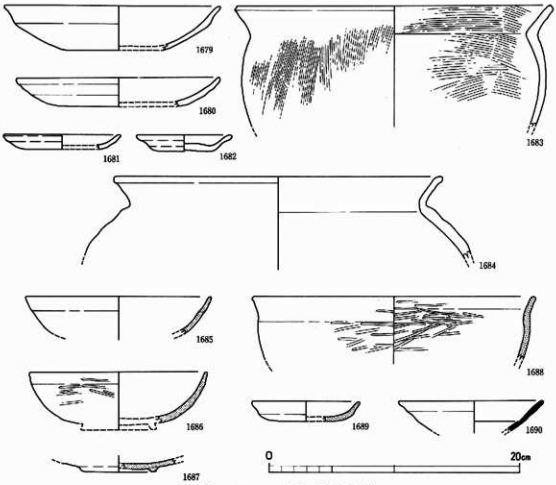
捏鉢　図化できたのは3個体である。口縁部については、端面が口縁部に対して直交せず斜行している点が、4区出土の捏鉢とは異なる。

甕　図化できたのは1個体のみで、しかも小片のため断面のみである。

土師器　大皿・小皿・坏・甕・鍋が出土している。坏と鍋については図化できなかった。



第636図　ＳＤ113　３区出土土器（１）



第637図　ＳＤ113　３区出土土器（２）

大皿　図化できたのは２個体であるが、２個体とも同じタイプに分類されるものである。口縁部は２段のナデ調整により仕上げられ、底部は手捏ねにより成形されている。

小皿　図化できたのは２個体であるが、それぞれ別のタイプに分類されるものである。1681は口縁部を２段のナデ調整により仕上げ、底部を手捏ねにより仕上げている。1682は口縁部を回転ナデ調整により仕上げ、底部は回転糸切りにより切り離されている。

甕　1683は、丸い体部に「く」字形に短く屈曲する口縁部がつくものである。体部と口縁部の変換部内面は明瞭な稜をなしている。体部は、外面を縦方向のハケ調整により、内面を横方向のハケ調整により仕上げられている。口縁部は、体部の調整の後、内外面を横方向のナデ調整を施した後内面を横方向のハケ調整により仕上げられている。1684は1683より肩の張る体部に同じく「く」字形の口縁部が付くものである。体部は内面をナデ調整により、外面をユビオサエと一部ヘラナデ調整により仕上げられている。口縁部は、内外面とも横方向のナデ調整により仕上げられている。

瓦器　椀・小皿・鉢が出土している。

椀　図化できたのは３個体である。1685は椀形の体部のみである。口縁部は弱い２段のナデ調整により仕上げられている。内面に暗文の痕跡が認められるが、図化することは困難である。外面については、磨滅が著しく明らかにできない。1686も、1685とほぼ同様の形態的特徴を有するものである。暗文は、内面については磨滅が著しく明らかにできないが、

外面についてはわずかにその痕跡が認められる。

鉢　口縁部が強いナデ調整によりわずかに外方に屈曲するものである。内外面とも暗文を観察することができるが、残存状況が良好とはいえず、その粗密などは明確にしえない。

小皿　口縁部を１段のナデ調整により、底部を手捏ねにより仕上げている。暗文については、磨滅が著しいため観察することはできなかった。

白磁　皿が１個体出土している。底部を欠くため、全体の器形を復元することは困難である。内面に段をもつ。内面は横ナデ調整により仕上げられているが、外面については、口縁部以外はヘラケズリ調整により仕上げられている。残存する範囲については、全面に釉がかかっている。

時期　多量の土器が出土しているが、４区と３区の土器とでは若干の時期幅が認められるようであるが、川除14期と考えたい。

第253表　ＳＤ113出土土器観察表（１）

番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	厚径	最大径	胎土	色調	残存状況	特徴・その他
1629	須恵器・鉢	(18.2)	4.0	(5.8)	—	—	21	灰～灰白	口縁部1/4・底部強か	口縁端部を強く横ナデし凹面をもつ
1630	須恵器・鉢	(15.6)	4.6	(5.8)	—	—	29	灰白	口縁部1/4・底部1/2	
1631	須恵器・鉢	(16.5)	3.8	(6.4)	—	—	23	灰白	1/8	
1632	須恵器・鉢	—	残4.4	(5.6)	—	—	—	灰白	底部1/4・体部残か	
1633	須恵器・甕	(16.0)	残3.5	—	—	—	—	灰白～明青灰	1/5	
1634	須恵器・甕	(15.8)	残4.2	—	—	—	—	灰白	口縁部1/5	内面に墨付着
1635	須恵器・甕	(15.6)	5.4	(5.7)	—	—	34	灰白	底部完存・口縁部欠か	見込みを強いヘラナデ
1636	須恵器・甕	—	残3.9	(6.0)	—	—	—	灰白	底部・体部欠か	5mm大の礫含む
1637	須恵器・小皿	(8.6)	1.6	(5.6)	—	—	18	灰白～灰	1/2	
1638	須恵器・小皿	(8.4)	1.7	(5.2)	—	—	20	灰	口縁部1/4・底部1/2	
1639	須恵器・小皿	(8.2)	2.0	(4.8)	—	—	24	灰～灰白	1/4	ほぼ精良な粘土
1640	須恵器・小皿	(8.2)	1.7	(5.7)	—	—	20	灰～灰白	口縁部1/4	
1641	須恵器・小皿	8.0	2.1	4.3	—	—	26	灰	口縁部3/4	全体的に砂粒を多く含んでいる
1642	須恵器・小皿	(7.6)	1.6	(5.3)	—	—	21	灰白	1/4	ほぼ精良な粘土
1643	須恵器・浄瓶	(32.4)	残4.4	—	—	—	—	青灰～明青灰	口縁部後か	
1644	土師器・坏	(13.7)	4.5	(5.7)	—	—	28	淡橙	口縁部1/8・底部完存	底部糸切り／内外面ヨコナデ
1645	土師器・大皿	(15.2)	3.5	(6.6)	—	—	23	橙	1/6	底部回転糸切り／内外面ヨコナデ
1646	土師器・大皿	(16.0)	2.1	(11.0)	—	—	13	明褐灰	口縁部1/8	
1647	土師器・大皿	14.4	2.9	—	—	—	20	灰白	口縁部3/4	口縁部２段のナデ／全体的に赤みが顕著
1648	土師器・小皿	(9.0)	1.2	(5.8)	—	—	13	淡黄	口縁部1/4	
1649	土師器・小皿	(8.8)	1.9	(4.0)	—	—	21	淡黄橙～橙	1/4	底部回転糸切り？
1650	土師器・小皿	(8.8)	1.5		—	—	17	橙	1/4	
1651	土師器・小皿	(8.0)	1.1		—	—	13	灰白	1/4	焼成やや不良
1652	瓦器・碗	—	残1.8	(6.2)	—	—	—	灰	底部1/2	
1653	白磁・碗	(15.6)	残3.3	—	—	—	—	灰白	口縁部1/7	全面に施釉
1654	白磁・碗	—	残2.5	6.6	—	—	—	明緑灰～灰白	底部完存	内面に沈線あり

第254表　ＳＤ113出土土器観察表（２）

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	頸径	最大径	胎厚	色調	残存状況	特徴・その他
1655	須恵器・椀	(16.7)	残3.6	—	—	—	—	灰白～灰	口縁部1/8	焼成不良
1656	須恵器・椀	16.0	残4.3	—	—	—	—	灰	口縁部1/3	他の須恵器と胎土が異なる
1657	須恵器・椀	16.0	残4.5	—	—	—	—	灰	口縁部1/4	
1658	須恵器・椀	(15.7)	残3.0	—	—	—	—	灰	口縁部1/8	
1659	須恵器・椀	(15.8)	3.9	(5.5)	—	—	24	灰	底部1/4・口縁部僅か	
1660	須恵器・椀	(15.5)	4.2	(5.0)	—	—	27	灰	底部1/4・口縁部僅か	体部外面に「才」の墨書あり
1661	須恵器・椀	(15.7)	4.6	(6.5)	—	—	20	灰白	1/6	
1662	須恵器・椀	(17.0)	残3.8	—	—	—	—	灰白～灰	1/8	精良に近い胎土
1663	須恵器・椀	(16.5)	残3.5	—	—	—	—	灰	口縁部1/4	
1664	須恵器・椀	(15.5)	残3.5	—	—	—	—	灰～灰白	口縁部1/4	
1665	須恵器・椀	(14.7)	残2.9	—	—	—	—	灰白	口縁部1/8	
1666	須恵器・椀	(16.2)	4.2	(6.0)	—	—	25	灰白	1/4	全体的に雑な仕上げ
1667	須恵器・椀	(16.0)	5.0	(4.4)	—	—	31	灰白～灰	1/4	焼成やや不良
1668	須恵器・椀	(15.3)	5.3	5.8	—	—	34	灰白	口縁部1/2・底部完存	
1669	須恵器・小皿	(9.9)	2.1	(5.3)	—	—	23	灰白	1/4	全体的に仕上げが雑
1670	須恵器・小皿	(8.7)	1.7	(5.2)	—	—	18	灰白～灰	1/4	
1671	須恵器・小皿	8.7	2.2	5.9	—	—	25	灰	ほぼ完存	
1672	須恵器・小皿	(8.8)	2.1	(5.7)	—	—	23	灰白	1/4	ほぼ精良な胎土
1673	須恵器・小皿	(8.6)	1.5	(7.2)	—	—	17	灰	口縁部1/3・底部3/4	他の須恵器と異なる胎土／底部糸切りの痕タタキ？
1674	須恵器・小皿	8.0	1.9	4.5	—	—	23	灰白	1/2	
1675	須恵器・擂鉢	(32.0)	残6.9	—	—	—	—	灰	口縁部1/6	1～7mm大の礫含む
1676	須恵器・擂鉢	—	残7.4	(13.2)	—	—	—	青灰	底部1/3・体部僅か	内面に使用痕
1677	須恵器・擂鉢	—	残4.6	—	—	—	—	灰白～灰	口縁部僅か	
1678	須恵器・壺	—	残4.3	—	—	—	—	灰	口縁部僅か	
1679	土師器・大皿	(16.0)	残3.5	(6.6)	—	—	—	灰白～橙	口縁部1/8	口縁部１段の板ナデ
1680	土師器・大皿	(16.0)	2.3	(9.2)	—	—	14	灰白～浅黄橙	口縁部1/8	口縁部２段の板ナデ
1681	土師器・小皿	(9.2)	1.2	(5.6)	—	—	13	淡橙	1/4	精良な胎土
1682	土師器・小皿	(7.4)	1.3	(4.4)	—	—	17	灰白	口縁部1/4・底部完存	底部糸切り？
1683	土師器・鍋	(25.0)	残9.5	—	(22.8)	(24.2)	—	浅黄橙	口縁部1/4・体部僅か	外面全体に煤付着
1684	土師器・壺	(26.0)	残6.5	—	(23.6)	—	—	灰褐～褐灰	口縁部1/8	
1685	瓦器・椀	(14.6)	残3.9	—	—	—	—	灰	口縁部1/7	内面にミガキの痕跡あり
1686	瓦器・椀	(14.0)	残4.9	—	—	—	—	灰白	口縁部1/9	外面にミガキの痕跡あり／内面は摩滅のため不明
1687	瓦器・椀	—	残1.2	(6.0)	—	—	—	灰	底部1/4	見込みにミガキあり
1688	瓦器・椀	(22.4)	残5.9	—	—	—	—	灰	口縁部1/8	内外面にミガキあり
1689	瓦器・小皿	(8.6)	1.6	—	—	—	18	灰	1/3	磨滅のため内外面ともミガキは不明
1690	白磁・皿	(11.0)	残2.4	—	—	—	—	灰白	口縁部1/8	外面はヘラ削り調整

ＳＤ１１４

検出状況　　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂに位置する。鍵形に屈曲する溝で、両端ともＳＤ113

と切り合っている。ＳＤ113の２・３区間の屈曲部と対応する位置関係にあり、両端ともＳＤ113に切られていることから、ＳＤ113は本溝を掘り直したものと考えられる。

形状・規模　検出した長さは南北方向で2.5m、東西方向で５mを測り、全長で7.5mである。検出面における幅は、ＳＤ113と切り合う所は幅が広く84cmを測るが、屈曲部は幅が狭くなっており60cmである。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは５cmと大変浅い溝である。溝底部のレベルは一定しており、屈曲部における標高は149.00mである。

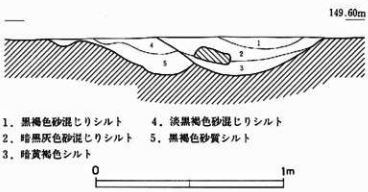
埋土　ＳＤ113とほとんど同じ埋土である。暗黒褐色砂混じりシルト層１層が堆積していた。

出土遺物　本溝にともなう遺物は小片ばかりで、その出土量もわずかである。したがって図化することはできなかった。

時期　出土遺物がわずかで、時期の特定は困難である。ただし、ＳＤ113に切られていること、および埋土の類似から、川除12～14期の範疇におさまる時期と考えられる。

ＳＤ１１５（図版163～166・176）

検出状況　Ⅳ区中央部南側に位置し、掘立柱建物群Ｂの北辺をなしている。西北西から東南東に直線的にのびる溝である。また、西側約1/3は中央部が浅く、２条に分かれている。西側はＳＤ113に切られ、東側は短く屈曲しＳＤ121に切られている。また、途中ＳＥ11・ＳＥ12・ＳＸ08に切られている。



第638図　ＳＤ115横断面

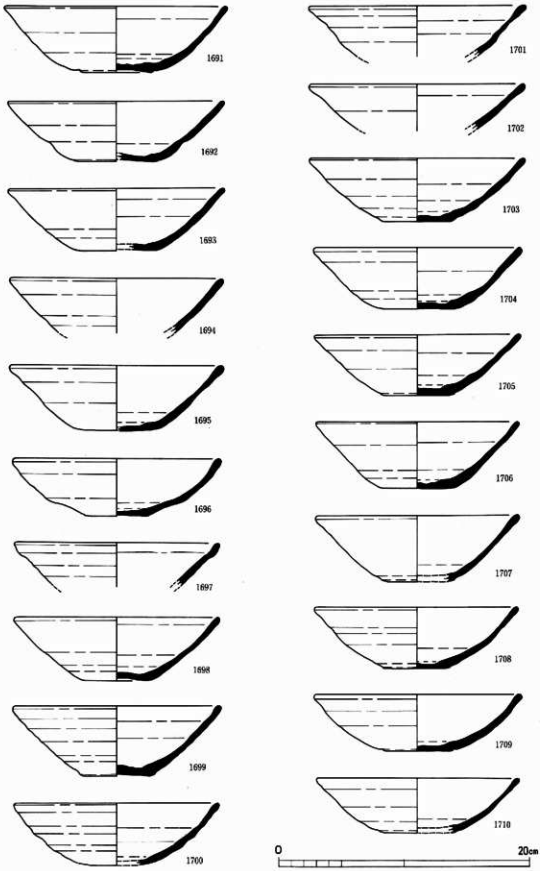
形状・規模　検出した長さは13.2mである。検出面における幅は、東側では1.50～1.65mを測り、西側の２条に分かれている部分は、北側が0.55～0.70m、南側が0.45～0.55mを測る。横断面はゆるやかなＵ字形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは、東側で25cm、西側で北側が15cm、南側が５cmと、西側ほど浅くなっている。逆に溝の底部のレベルは西側ほど高く、西側における標高は149.32m、東側における標高は149.22mを測る。

埋土　西側では１層であるが、東側では５層に堆積し、２条の溝が切り合っていることが観察された。このことから、本溝は本来西側で２条であったように２条の溝であったものが、東側では重複し平面的には１条となった可能性も考えられる。ただし、東側で上下に分かれる２層が西側のどちらに対応するかは調査においては明らかにできなかった。

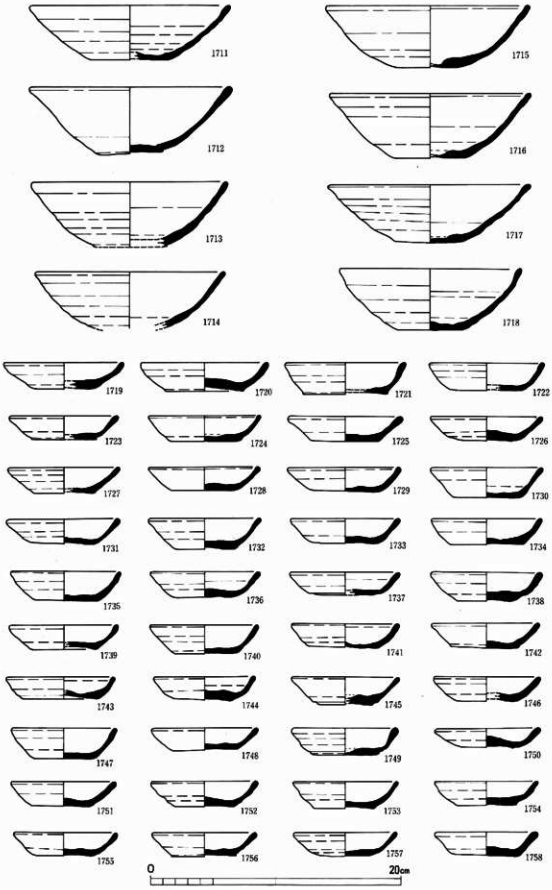
なお、東側の上層（１～３層）から多量の遺物が出土している。

出土遺物　本溝は、本遺跡の溝状遺構のなかで最も多量の遺物を出土した遺構である。特に、東側の１条となっている地点では一括投棄されたような状態で多量に出土している。土器と鉄器が出土している。

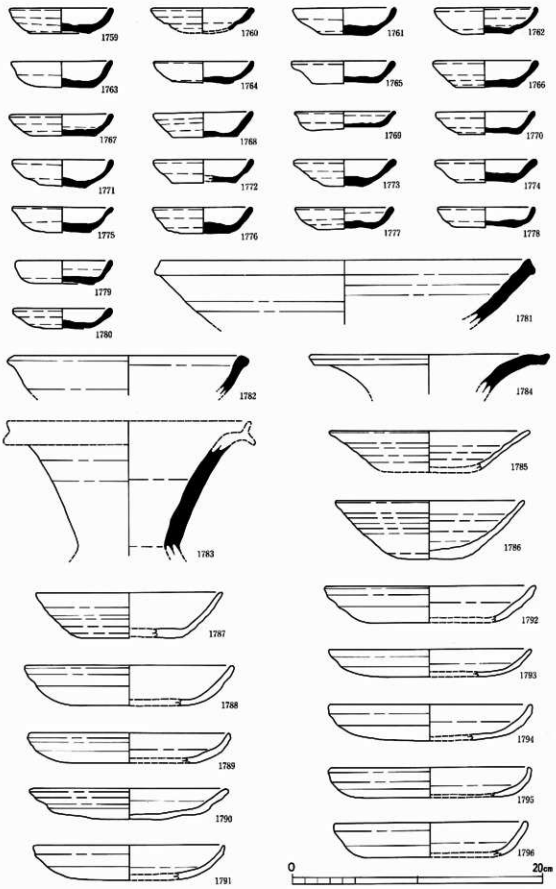
土器　須恵器・土師器・瓦器・白磁が出土している。須恵器・土師器で大半を占め、瓦器・白



第639図　ＳＤ115出土土器（１）



第640図　ＳＤ115出土土器（２）



第641図　ＳＤ115出土土器（３）

磁はわずかの出土である。

須恵器　椀・小皿・捏鉢・鉢・甕・壺の各器種が出土している。

椀　体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるものと、ほぼ直線的に立ち上がるものとに分けられるが、後者が多数を占める。いずれも口縁部は肥厚している。底部は、平高台の痕跡をとどめるものと、とどめないものとがあり、前者は体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるものと対応している。ただし、形態的にはバリエーションが認められるが、器高指数を見ると（第645図）30前後に集中しており、法量的には大差は認められない。

なお須恵器の椀のなかで、1709は胎土上の特徴が他の須恵器の椀と異なる。また1716も胎土上の特徴が異なるが、1709とも異なる。また仕上げも他のものと比べて丁寧である。

1691の体部下半に墨の付着が認められ、1713においても内面全面に墨が付着している。

小皿　量的に最も多く出土している器種である。形態的には、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部が肥厚するものである。量的には少ないが、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものも認められる。底部は、椀同様、平高台の痕跡をとどめるものと、とどめないものとがある。しかし、法量的には、器高指数の分布（第645図）をみると、23～25に集中している。

小皿のなかで、1727は他の小皿と胎土上の特徴が異なる。また形態的にも、体部から口縁部にかけて直線的で、口縁端部の肥厚がわずかである点は、他の小皿と若干異なる。

また、1769の内面には墨痕らしきもの付着が認められる。

捏鉢　図化できたのは1個体のみである。口縁端部は体部から口縁部の立ち上がり方向と直交するようにナデ調整をおこない、端面をもつものである。

鉢　当器種についても図化できたのは1個体のみである。体部上半から口縁部にかけて残存するもので、小型の捏鉢となる可能性も考えられる。内湾する体部から口縁部は肥厚しながら外反し、口縁端部は外下方につまみ出すようにナデ調整を加え、斜行する端面を持つ。この面は、体部の立ち上がり方向に対して直交している。

壺　図化できたのは2個体のみである。いずれも双耳壺ないしその系譜上にある壺である。

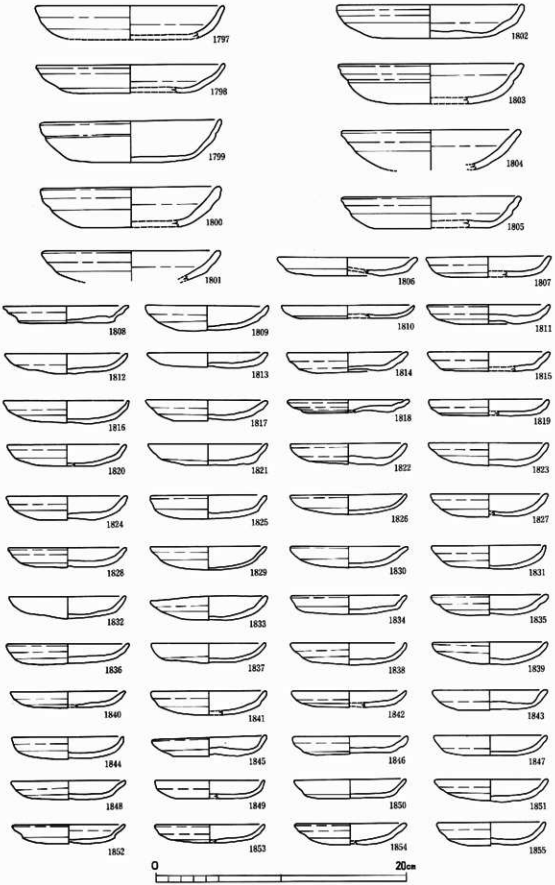
土師器　大皿・小皿・坏・托・椀・甕・鍋の各器種が出土している。

大皿　他の遺構に比べて比較的多く出土している。いずれも口縁部を強い横方向のナデ調整により仕上げ、底部は手捏ねにより成形するものである。ただし、口縁部のナデ調整において、大半は2段の横方向のナデ調整を施すが、他に若干異なるものも認められる。一つは、1794・1800のように口縁部を1段のナデ調整により仕上げるものと、1790・1796のように3段のナデ調整により仕上げるものである。いずれも、量的にはわずかである。

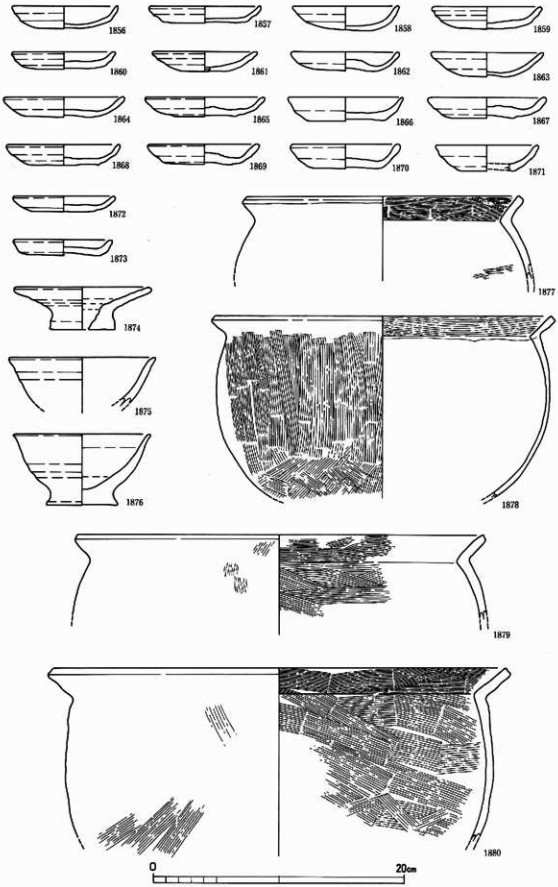
小皿　底部の切離し方法により大きく2つに分類できる。

一つは、底部を回転糸切りにより切り離すもの（1864～1873）である。体部から口縁部にかけても回転ナデ調整により仕上げている。体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部が肥厚するように、須恵器の小皿と共通する形態上の特徴をもつもの（1868～1870）も認められる。また、口縁部は、1段のナデ調整によるものと2段のナデ調整によるものとにわけることができる。

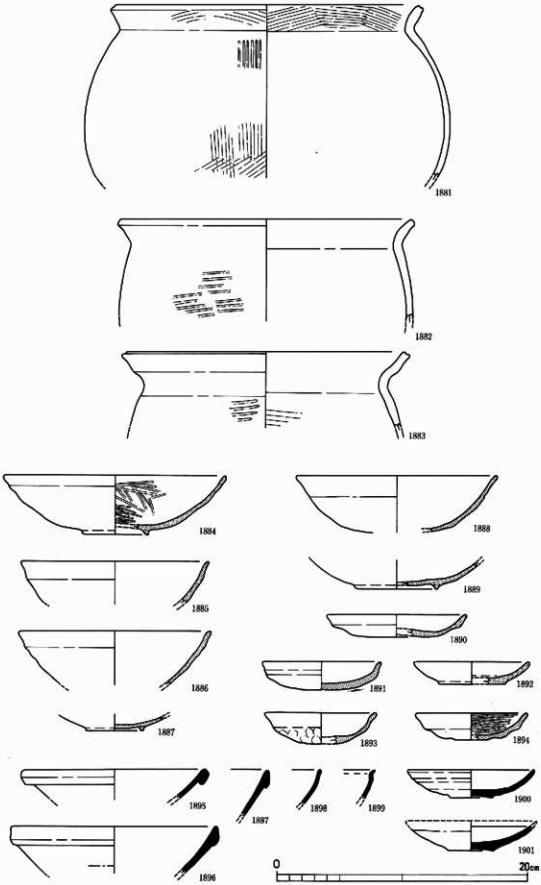
もう一つのタイプは、底部を手捏ねにより成形するものである。口縁部はいずれも、横



第642図　ＳＤ115出土土器（４）



第643図　ＳＤ115出土土器（５）



第644図　ＳＤ115出土土器（６）

方向のナデ調整により仕上げている。当タイプにおいても、横方向のナデ調整が1段のものと、2段のものとに分けることができる。

なお、1862と1863については、底部の切離しが回転糸切りによるものかどうかについては、磨滅が著しく明らかにできなかった。回転糸切りによる可能性の方が高い。

坏　図化できたのは3個体である。底部を欠く1785を除いて、いずれも底部は回転糸切りにより切り離されている。また、体部～口縁部にかけても回転ナデ調整により仕上げられている。また、3個体とも比較的精良な胎土である点も共通している。

托　図化できたのは1個体のみである。器高の高い平高台から、水平に近い立ち上がりで口縁部が直線的にのびている。ただし底部は中空となっている。また底部は回転糸切りにより切り離されている。また、高台部から口縁部にかけても回転ナデ調整により仕上げられている。また、わずかに砂粒を含むものの、比較的精良な胎土である。

椀　図化できたのは2個体である。1875は底部を欠くが、本来は1876のような形態であったものと推定される。重厚な平高台から内湾気味に立ち上がり、口縁部をわずかに外反させ端部を薄くおさめている。底部は回転糸切りにより切り離されている。また体部から口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。2個体とも、1㎜大の砂粒をわずかに含むが、比較的精良な胎土である。

鍋　丸い体部に短く「く」字形に屈曲する口縁部がつくもの（1877～1882）と、口縁部が受け口状をなすもの（1883）とに分けられる。特に前者は、頸部内面の稜が顕著である。

前者は、口縁部外面をユビオサエとナデ調整により仕上げ、内面は横方向のハケ調整により仕上げている。体部は、外面を縦方向のハケ調整で仕上げ、引き続き底部を斜め方向のハケ調整で仕上げている。内面は横方向を主体としたハケ調整を施し、その後ナデ調整により仕上げている。したがって、ハケ目が消滅しているものも多い。

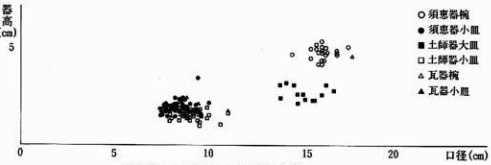
後者は、体部から口縁部にかけての移行が緩やかで、頸部内面に稜は認められない。口縁部は強い横方向のナデ調整により仕上げられ、頸部との間にシャープではないが稜が形成されている。また、口縁端部は、わずかではあるが外方へつまむようなナデ調整が認められ、わずかにつまみ出されている。口縁部から頸部にかけては、内外面とも横方向のナデ調整により仕上げられている。体部は、外面は水平方向のタタキ成形により仕上げられ、内面は横方向のハケ調整により仕上げられている。

瓦器　椀と小皿が出土している。

椀　6個体図化できたが、良好な状態で残存するものはない。6個体とも同じタイプに分類されるものと考えられる。口径に対して器高が低い椀形の体部に、断面逆三角形の高台が貼り付けられている。口縁部が残存するものについては、いずれも1段の横方向のナデ調整によって仕上げられている。高台高は4㎜前後と低いものである。

暗文は、1884については磨滅が著しく、外面に施されているのかどうか観察できなかったが、他については内外面とも暗文が施されている。ただし、各個体ともその痕跡が残存する程度で、図化することはできなかった。

小皿　図化できたのは5個体である。成形方法によって2つに分けることができる。ひとつは、口縁部を1段の強いナデ調整により仕上げ、以下は手捏ねにより成形するものである。こ



第645図　ＳＤ115出土土器法量分布

のため、底部は高台をもたず、かなり歪に造られている。もう一つは、口縁部から体部を回転ナデ調整により仕上げ、底部は回転糸切りないしヘラ起こしにより切り離されている。このため、平坦で明瞭な高台を有している。

暗文については、1890・1893・1894で観察することができ、いずれも内面のみに施され、外面には施されていない。特に1890においては良好に暗文が残存しており、細筋のミガキが密に丁寧に施されている。

白磁　椀と皿が出土している。

碗　Ⅳ類に分類される玉縁の口縁部をもつものと、端反りする口縁部である。いずれも小片であり、特に後者については断面のみしか図化できなかった。

皿　図化できたのは２個体である。２個体とも同じタイプに分類できるものである。平高台に、内湾気味にゆるやかに立ち上がる口縁部を有するもので、口縁端部は薄くおさめられている。底部はヘラケズリにより仕上げられている。なお、1900においては、内面にわずかな沈線が認められるが、1901においては認められない。

鉄器　１点出土しているが、破片のため用途を特定することは困難である。この鉄器は、残存長10.6cm、最大幅８cmと比較的大型の製品である。厚さは５mmである。上下２段にわたって２条の断面蒲鉾形の凸帯が付き、これと平行する方向に全体が湾曲している。凸帯の比高は２mmとわずかである。

このような鉄製品についてはあまり類例をみないものである。ただし、全体が内湾していること、凸帯が付くことなどから、鐘の可能性も考えられる。

第646図　ＳＤ115出土鉄器

時期　本溝からは、多量かつ豊富な土器が出土しており、これらの土器相互間には明確な時期差が認められない。したがって、これらの土器から川除13期と考えられる。

第255表　ＳＤ115出土土器観察表（１）

番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	頸径	最大径	胎土	色調	残存状況	特徴・その他
1691	須恵器・甕	(17.4)	5.2	5.4	―	―	29	灰白	口縁部1/10・底部完存	体部下半に平行叩き
1692	須恵器・甕	(16.8)	4.8	(8.6)	―	―	28	灰白	1/2	3㎜大の礫やや多く含む
1693	須恵器・甕	(16.8)	4.9	(8.5)	―	―	29	灰白	1/4	
1694	須恵器・甕	(16.6)	残4.3	―	―	―	―	灰	口縁部1/2	
1695	須恵器・甕	(16.2)	5.1	(8.8)	―	―	31	灰白～暗灰	1/2	
1696	須恵器・甕	(16.1)	4.5	(8.1)	―	―	27	灰	1/2	全体的に雑な横ナデ仕上げ
1697	須恵器・甕	(16.0)	残3.4	―	―	―	―	灰	口縁部1/4	
1698	須恵器・甕	(16.0)	5.9	(8.4)	―	―	31	灰	底部完存・口縁部欠か	内外面に黒色の斑点が多く目立つ
1699	須恵器・甕	(16.0)	5.5	(8.0)	―	―	34	灰～灰白	1/2	成形やや不良
1700	須恵器・甕	16.0	4.9	(8.2)	―	―	30	灰白	口縁部1/4・底部欠か	
1701	須恵器・甕	(17.0)	残4.0	―	―	―	―	灰	口縁部1/6	
1702	須恵器・甕	(16.7)	残3.6	―	―	―	―	灰白	口縁部1/4	1～4㎜大の礫含む
1703	須恵器・甕	(16.8)	5.9	(8.4)	―	―	29	灰白	口縁部1/4・底部1/2	成形不良
1704	須恵器・甕	(16.3)	4.9	(7.0)	―	―	30	灰	1/2	
1705	須恵器・甕	(16.2)	4.8	6.0	―	―	29	灰白	底部完存・底部欠か	1～5㎜大の礫含む
1706	須恵器・甕	(16.0)	5.2	(5.8)	―	―	32	明青灰	口縁部1/4・底部1/3	4～6㎜大の礫（チャート）が目立つ
1707	須恵器・甕	(16.0)	5.2	(5.8)			32	灰	口縁部～体部1/2	1～5㎜大の礫含む
1708	須恵器・甕	(16.0)	4.8	5.4	―	―	30	灰～灰白	口縁部1/4・底部完存	1～3㎜大の礫含む
1709	須恵器・甕	(16.0)	4.5	(5.6)	―	―	28	灰～灰白	1/4	他の須恵器と異なる粘土
1710	須恵器・甕	(16.0)	4.3	(6.0)	―	―	26	灰	口縁部1/4	体部上半から口縁部にかけて特に強いナデ
1711	須恵器・甕	(15.8)	4.3	(5.8)	―	―	27	灰白	口縁部～体部1/4	
1712	須恵器・甕	15.7	5.5	5.5	―	―	33	灰白～灰	口縁部3/4	1～5㎜大の礫含む
1713	須恵器・甕	(15.4)	5.1	(6.0)	―	―	33	灰	口縁部～体部1/4	内面全体に平行叩き
1714	須恵器・甕	(15.0)	残4.5	―	―	―	―	灰白	口縁部～体部1/6	
1715	須恵器・甕	(15.8)	4.9	(5.0)	―	―	31	灰白	1/4	
1716	須恵器・甕	(15.7)	5.1	(5.6)	―	―	32	灰白	1/4	他の須恵器と異なる粘土／丁寧なつくり
1717	須恵器・甕	15.4	4.6	5.4	―	―	29	青灰	底部～口縁部4/5	底部を軸ヘラけずりのような痕あり
1718	須恵器・甕	(14.4)	4.8	5.2	―	―	33	灰白	底部完存・口縁部1/4	1～3㎜大の礫含む
1719	須恵器・小皿	(9.3)	2.1	(4.8)	―	―	22	灰	1/4	
1720	須恵器・小皿	(10.0)	2.2	(6.2)	―	―	22	灰白	1/4	
1721	須恵器・小皿	9.4	3.5	(6.7)	―	―	37	灰白～灰	1/2	
1722	須恵器・小皿	(9.0)	2.2	(5.7)	―	―	24	灰白～灰	1/3	成形不良／6㎜大の礫含む
1723	須恵器・小皿	(8.9)	1.9	(5.2)	―	―	21	灰	1/4	1～3㎜大の礫含む
1724	須恵器・小皿	(8.8)	2.1	(5.5)	―	―	23	灰	1/4	全体に雑な横ナデ仕上げ
1725	須恵器・小皿	(8.8)	2.0	(5.7)	―	―	22	灰	1/4	1～5㎜大の礫含む
1726	須恵器・小皿	8.7	1.9	4.3	―	―	21	灰白	完存	
1727	須恵器・小皿	(8.7)	2.1	(5.0)	―	―	24	灰白～灰	1/4	他の須恵器の小皿と異なる粘土
1728	須恵器・小皿	8.7	1.9	5.0	―	―	21	灰白～青灰	ほぼ完存	
1729	須恵器・小皿	8.7	1.9	5.5	―	―	21	灰白	完存	1～5㎜大の礫含む
1730	須恵器・小皿	8.7	2.4	5.3	―	―	27	灰白～灰	完存	1～3㎜大の礫含む

第258表　ＳＤ115出土土器観察表（２）

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	厚径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他
1731	須恵器・小皿	8.6	2.1	4.9	―	―	24	灰	底部完存・口縁部1/2	1～3mm大の礫含む
1732	須恵器・小皿	(8.6)	2.5	(5.0)	―	―	29	灰白	口縁部1/2	
1733	須恵器・小皿	8.6	2.0	4.9	―	―	23	灰白	底部完存・口縁部1/2	焼成不良
1734	須恵器・小皿	8.6	2.1	6.9	―	―	24	暗青灰	完存	2～3mm大の礫含む
1735	須恵器・小皿	8.5	2.3	5.1	―	―	27	灰白～灰	完存	
1736	須恵器・小皿	8.5	2.0	4.7	―	―	23	灰白	口縁部1/2	
1737	須恵器・小皿	(8.5)	1.8	(5.5)	―	―	21	灰白～灰	1/4	
1738	須恵器・小皿	8.5	2.3	4.2	―	―	27	灰白～青灰	完存	焼成不良
1739	須恵器・小皿	(8.5)	1.9	(5.2)	―	―	22	灰～灰白	1/4	
1740	須恵器・小皿	8.5	2.3	4.9	―	―	27	灰～灰白	2/3	
1741	須恵器・小皿	8.4	2.4	5.6	―	―	28	灰白	ほぼ完存	4mm大の礫含む
1742	須恵器・小皿	8.4	2.0	5.4	―	―	23	オリーブ灰	ほぼ完存	
1743	須恵器・小皿	(8.4)	1.8	(6.2)	―	―	21	灰白～干灰	1/2	
1744	須恵器・小皿	8.3	1.9	4.7	―	―	22	灰	完存	
1745	須恵器・小皿	(8.3)	2.2	(4.4)	―	―	26	灰	1/4	底部から体部への変換部を回転ヘラケズ
1746	須恵器・小皿	(8.3)	2.0	(4.5)	―	―	24	オリーブ灰	1/4	焼成やや不良／2～7mm大の礫含む
1747	須恵器・小皿	(8.2)	2.5	(5.3)	―	―	30	灰白～灰	底部3/4～口縁部1/4	1～6mm大の礫含む
1748	須恵器・小皿	8.2	1.8	5.0	―	―	21	灰白～灰	完存	1～3mm大の礫含む
1749	須恵器・小皿	(8.2)	2.2	(5.5)	―	―	26	灰白	口縁部1/3	焼成やや不良
1750	須恵器・小皿	8.2	1.5	4.0	―	―	18	灰白～暗灰	口縁部1/2	全体的にあみが顕著
1751	須恵器・小皿	8.1	1.9	4.6	―	―	23	灰白	口縁部3/4	
1752	須恵器・小皿	(8.1)	2.1	(4.5)	―	―	25	灰	口縁部1/4	1～4mm大の礫含む
1753	須恵器・小皿	8.1	2.1	4.7	―	―	25	明青灰	口縁部1/4	6mm大の礫含む
1754	須恵器・小皿	8.0	1.9	4.9	―	―	23	灰白	1/2	焼成やや不良
1755	須恵器・小皿	8.0	2.0	4.9	―	―	25	灰	完存	
1756	須恵器・小皿	8.0	1.9	5.2	―	―	23	灰	完存	1～3mm大の礫含む
1757	須恵器・小皿	(8.0)	1.9	(4.1)	―	―	23	灰～灰白	1/2	1～3mm大の礫含む
1758	須恵器・小皿	8.0	1.9	5.3	―	―	23	灰白	口縁部3/4・底部完存	
1759	須恵器・小皿	8.0	2.0	5.0	―	―	25	灰白～灰	口縁部3/4・底部完存	1～6mm大の礫含む
1760	須恵器・小皿	8.0	残1.7	―	―	―	―	灰	口縁部1/2	
1761	須恵器・小皿	7.9	2.1	3.8	―	―	26	灰白～灰	口縁部3/4	
1762	須恵器・小皿	7.9	2.1	3.9	―	―	26	灰白～灰	3/4	1～5mm大の礫含む
1763	須恵器・小皿	7.9	2.1	4.8	―	―	26	灰	完存	黒色の斑点多くみられる／3mm大の礫含む
1764	須恵器・小皿	7.9	1.8	4.7	―	―	22	灰白	ほぼ完存	
1765	須恵器・小皿	7.9	1.8	5.3	―	―	22	灰	ほぼ完存	2～3mm大の礫含む
1766	須恵器・小皿	(7.9)	2.1	(4.6)	―	―	26	灰白～灰	口縁部1/2・底部完存	
1767	須恵器・小皿	7.9	1.7	5.6	―	―	21	灰	口縁部1/2・底部完存	
1768	須恵器・小皿	7.8	2.1	5.1	―	―	26	灰白	1/2	1～6mm大の礫含む
1769	須恵器・小皿	7.8	1.5	5.4	―	―	19	灰白	2/3	内面に墨痕？付着
1770	須恵器・小皿	7.8	1.8	4.8	―	―	23	灰白	ほぼ完存	4mm大の礫含む

第257表　ＳＤ115出土土器観察表（３）

番号	器種	法量（cm）						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	脚径	最大径	指数			
1771	須恵器・小皿	7.7	2.2	3.6	―	―	28	灰	ほぼ完存	
1772	須恵器・小皿	(7.7)	1.8	(5.6)	―	―	23	灰～灰白	1/2	
1773	須恵器・小皿	(7.7)	2.1	(3.7)	―	―	27	灰	口縁部1/3	
1774	須恵器・小皿	(7.7)	1.8	(4.3)	―	―	23	灰白	1/4	焼成やや不良
1775	須恵器・小皿	7.6	2.9	4.5	―	―	26	灰	ほぼ完存	
1776	須恵器・小皿	7.6	2.1	4.1	―	―	27	灰～灰白	口縁部1/2・底部完存	
1777	須恵器・小皿	7.5	1.7	4.5	―	―	22	灰白	口縁部3/4・底部完存	
1778	須恵器・小皿	7.5	1.6	4.3	―	―	21	灰白	口縁部3/4・底部完存	
1779	須恵器・小皿	7.4	1.9	5.1	―	―	25	灰～灰白	完存	1～3㎜大の礫含む
1780	須恵器・小皿	(7.4)	1.6	(3.5)	―	―	21	灰～灰白	口縁部1/4・底部完存	
1781	須恵器・提瓶	(29.2)	残5.9	―	―	―	―	灰白	口縁部1/8	1～3㎜大の礫含む
1782	須恵器・鉢	(17.8)	残3.1	―	―	―	―	灰～灰褐	口縁部1/16	内外面横ナデ仕上げ
1783	須恵器・壺	―	残8.6	―	(8.0)	―	―	灰白	口縁部1/3	1～3㎜大の礫含む／内外面横ナデ仕上げ
1784	須恵器・壺	(18.7)	残3.2	―	―	―	―	灰白～明灰	1/8	内外面横ナデ仕上げ
1785	土師器・坏	(15.6)	残3.1	―	―	―	―	灰白	口縁部1/4	胎土に近い胎土／内外面とも横ナデ仕上げ
1786	土師器・坏	(14.8)	4.6	(5.4)	―	―	31	浅黄橙～橙色	口縁部1/4・底部完存	胎土に近い胎土／内外面横ナデ仕上げ／底部糸切り
1787	土師器・坏	(14.6)	3.6	(7.8)	―	―	24	灰白	1/6	内外面横ナデ／底部糸切り
1788	土師器・大皿	(16.2)	3.2		―	―	19	灰白	口縁部1/4	口縁部2段のナデ
1789	土師器・大皿	(15.6)	2.4	(9.1)	―	―	15	灰白～褐灰	1/4	口縁部2段のナデ
1790	土師器・大皿	(15.1)	2.4		―	―	15	灰白	1/2	口縁部2段のナデ
1791	土師器・大皿	(15.0)	2.7		―	―	18	灰白	口縁部1/3	口縁部2段のナデ
1792	土師器・大皿	(16.6)	2.9		―	―	17	にぶい橙	口縁部1/4	口縁部2段のナデ／胎土に近い胎土
1793	土師器・大皿	(16.0)	2.7		―	―	16	灰白	1/6	
1794	土師器・大皿	(15.9)	2.8		―	―	17	灰白	1/8	口縁部2段のナデ
1795	土師器・大皿	(15.5)	2.4		―	―	15	灰白～浅黄橙	口縁部1/4	口縁部3段のナデ
1796	土師器・大皿	(15.0)	2.7		―	―	18	浅黄橙	口縁部1/4	口縁部2段のナデ
1797	土師器・大皿	(14.9)	残2.8	―	―	―	―	灰白	1/4	口縁部2段のナデ／胎土に近い胎土
1798	土師器・大皿	(14.7)	2.2		―	―	14	灰白～淡橙	1/4	胎土に近い胎土
1799	土師器・大皿	14.1	3.3		―	―	23	灰白	ほぼ完存	口縁部に1条の沈線
1800	土師器・大皿	(13.8)	3.2		―	―	23	灰白～淡橙	1/4	口縁部2段のナデ
1801	土師器・大皿	(13.7)	2.4		―	―	17	灰白	口縁部1/8	口縁部2段のナデ／胎土に近い胎土
1802	土師器・大皿	(14.7)	2.7		―	―	18	灰白～褐灰	口縁部1/8・底部完存	口縁部2段のナデ
1803	土師器・大皿	(14.5)	3.2		―	―	22	灰白～褐灰	1/2	口縁部2段のナデ
1804	土師器・大皿	(13.9)	残3.2					灰白	1/4	口縁部2段のナデ／胎土に近い胎土
1805	土師器・大皿	(13.8)	2.5	(9.0)	―	―	18	褐灰	1/8	口縁部2段のナデ／胎土に近い胎土
1806	土師器・小皿	(11.0)	1.7		―	―	15	にぶい橙	1/4	
1807	土師器・小皿	(10.0)	1.6	(8.8)	―	―	16	浅黄橙	1/3	口縁部2段のナデ
1808	土師器・小皿	(9.9)	1.4	(7.8)	―	―	14	灰白	1/4	口縁部2段のナデ／胎土に近い胎土
1809	土師器・小皿	9.9	2.0	4.5	―	―	20	淡橙～淡赤橙	口縁部3/4・底部完存	口縁部2段のナデ
1810	土師器・小皿	(10.6)	1.1	(7.6)	―	―	10	浅黄橙	1/4	

第258表　ＳＤ115出土土器観察表（４）

番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	胴径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他
1811	土師器・小皿	(9.4)	1.3		—	—	15	灰白	1/4	口縁部２段のナデ
1812	土師器・小皿	9.6	1.5		—	—	15	浅黄橙	完存	
1813	土師器・小皿	(9.5)	1.2		—	—	12	浅黄橙～灰白	口縁部1/4・底部1/2	口縁部の歪みが顕著
1814	土師器・小皿	9.5	1.8		—	—	18	浅黄橙～灰白	3/4完存	口縁部２段のナデ
1815	土師器・小皿	(9.5)	1.6		—	—	16	灰白	1/4	口縁部２段のナデ
1816	土師器・小皿	9.5	1.9		—	—	20	橙～浅黄橙	3/4完存	口縁部２段のナデ
1817	土師器・小皿	9.5	1.7		—	—	17	灰白～浅黄橙	口縁部3/4・底部完存	口縁部２段のナデ
1818	土師器・小皿	(9.5)	1.0		—	—	10	灰白	1/4	口縁部２段のナデ
1819	土師器・小皿	(9.4)	1.3		—	—	13	にぶい橙	1/2	
1820	土師器・小皿	(9.4)	1.7		—	—	18	浅黄橙	1/3	口縁部２段のナデ
1821	土師器・小皿	(9.4)	1.7		—	—	18	灰白	口縁部3/4・底部完存	口縁部は歪みがやや顕著
1822	土師器・小皿	9.4	1.7		—	—	18	橙	完存	口縁部２段のナデ
1823	土師器・小皿	9.4	1.9		—	—	20	浅黄橙	3/4完存	口縁部２段のナデ
1824	土師器・小皿	(9.3)	1.8		—	—	19	灰白	1/2	口縁部２段のナデ
1825	土師器・小皿	9.3	1.9		—	—	20	浅黄橙	完存	
1826	土師器・小皿	(9.2)	1.6		—	—	17	灰白	1/4	粘土に近い胎土
1827	土師器・小皿	(9.2)	1.8		—	—	19	橙～灰黄	1/3	
1828	土師器・小皿	(9.2)	1.6		—	—	17	灰白	1/2	口縁部２段のナデ
1829	土師器・小皿	(9.2)	1.8		—	—	19	灰白	1/2	口縁部２段のナデ
1830	土師器・小皿	9.2	1.8		—	—	19	黄灰～灰白	3/4完存	
1831	土師器・小皿	9.2	1.9		—	—	20	浅黄橙	3/4完存	口縁部２段のナデ
1832	土師器・小皿	9.2	1.7		—	—	18	灰白～浅黄橙	完存	
1833	土師器・小皿	9.2	1.9		—	—	20	褐灰～浅橙	4/5完存	口縁部のゆがみが顕著
1834	土師器・小皿	9.1	1.5		—	—	16	灰白～浅黄橙	3/4	
1835	土師器・小皿	(9.1)	1.6		—	—	17	灰白～浅黄橙	1/2	口縁部２段のナデ
1836	土師器・小皿	9.6	1.6		—	—	16	にぶい黄橙	1/2	口縁部２段のナデ
1837	土師器・小皿	9.1	1.6		—	—	17	橙	4/5完存	
1838	土師器・小皿	9.1	1.7		—	—	18	浅黄橙	4/5完存	口縁部２段のナデ
1839	土師器・小皿	9.1	1.8		—	—	19	灰白	4/5完存	
1840	土師器・小皿	(9.0)	1.3		—	—	14	灰白	1/3	口縁部２段のナデ
1841	土師器・小皿	(9.0)	1.9		—	—	21	灰白～橙赤橙	1/3	口縁部２段のナデ
1842	土師器・小皿	9.0	1.3		—	—	14	にぶい橙	口縁部完存・底部欠か	4/5は精良な粘土
1843	土師器・小皿	9.0	1.6		—	—	17	灰白	4/5完存	
1844	土師器・小皿	9.0	1.8		—	—	20	橙	完存	口縁部２段のナデ
1845	土師器・小皿	9.0	1.7		—	—	18	浅黄橙～灰白	完存	口縁部２段のナデ
1846	土師器・小皿	8.9	1.4		—	—	15	灰白	底部完存3/4	口縁部２段のナデ
1847	土師器・小皿	8.9	1.6		—	—	17	灰白	底部完存3/4	
1848	土師器・小皿	8.9	1.5		—	—	16	浅黄橙～灰白	完存	
1849	土師器・小皿	(8.8)	1.4		—	—	15	灰白	1/3	
1850	土師器・小皿	(8.8)	1.5		—	—	17	浅黄～浅黄橙	1/4	口縁部２段のナデ

第259表　ＳＤ115出土土器観察表（５）

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胴径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他
1851	土師器・小皿	(8.8)	1.8		—	—	20	淡橙～灰白	1/2	
1852	土師器・小皿	(8.6)	1.5		—	—	17	淡黄橙	1/2	
1853	土師器・小皿	(8.6)	1.5		—	—	17	灰白	1/2	精良に近い粘土
1854	土師器・小皿	(8.6)	1.7		—	—	19	灰白	1/2	口縁部２段のナデ
1855	土師器・小皿	(8.5)	1.8		—	—	21	灰白	口縁部3/4・底部完存	口縁部２段のナデ／口縁部が楕円状に歪んでいる
1856	土師器・小皿	8.5	1.8		—		21	灰白	完存	口縁部２段のナデ
1857	土師器・小皿	(8.4)	1.3		—	—	15	灰白～淡黄橙	1/4	口縁部２段のナデ
1858	土師器・小皿	8.4	2.0		—	—	23	淡黄橙	口縁部3/4・底部完存	全体的に歪んでいる／精良に近い粘土
1859	土師器・小皿	(8.3)	1.8		—	—	21	淡橙	口縁部1/4・底部完存	口縁部２段のナデ
1860	土師器・小皿	(8.0)	1.4		—	—	17	灰白	1/4	
1861	土師器・小皿	(7.9)	1.6		—	—	20	灰白	1/4	
1862	土師器・小皿	8.5	1.6	4.8	—	—	18	淡黄	底部完存・口縁部1/2	
1863	土師器・小皿	(8.7)	1.9	(3.9)	—	—	21	灰白	口縁部1/4・底部完存	底部の調整は不明
1864	土師器・小皿	9.4	1.6	5.2	—	—	17	橙～淡黄橙	口縁部3/4・底部完存	底部糸切り
1865	土師器・小皿	9.4	1.6	5.0	—	—	17	淡黄橙	1/2	底部糸切り
1866	土師器・小皿	(9.1)	1.9	(6.2)	—	—	20	にぶい黄橙	1/4	底部糸切り
1867	土師器・小皿	9.6	1.6	4.9	—	—	17	淡黄～灰白	完存	底部糸切り
1868	土師器・小皿	8.8	1.7	5.1	—	—	19	橙	完存	底部糸切り
1869	土師器・小皿	8.6	1.6	5.1	—	—	18	にぶい黄橙	口縁部3/4	底部糸切り
1870	土師器・小皿	8.4	1.9	5.5	—	—	22	灰白～淡黄橙	ほぼ完存	底部糸切り
1871	土師器・小皿	8.6	2.1	(4.4)	—		26	灰白～明褐灰	口縁部1/4	底部糸切り／焼成やや不良
1872	土師器・小皿	7.9	1.3	4.8	—	—	16	灰白～淡黄	完存	底部糸切り／口縁部２段のナデ
1873	土師器・小皿	7.6	1.3	6.0	—	—	17	灰白	1/2	底部糸切り
1874	土師器・坏	(10.5)	3.4	(5.2)	—	—	32	淡橙	底部1/4・上半部完存	底部糸切り／内外面とも横ナデ／精良な粘土
1875	土師器・坏	(11.4)	残3.8	—	—	—	—	淡黄橙	1/8	内外面とも横ナデ／精良な粘土
1876	土師器・椀	(10.6)	5.6	5.6	—	—	52	淡黄橙	底部1/2・口縁部強か	底部糸切り／内外面とも横ナデ／精良に近い粘土
1877	土師器・甕	(21.5)	残6.5	—	(20.3)	—	—	灰黄褐	1/4	口縁部内面：横方向のハケ／左記以外：ナデとハケ
1878	土師器・甕	(26.5)	残14.2	—	(24.9)	(26.4)	—	黄灰～暗灰黄	1/4	口縁部内面・体部外面：ハケ仕上げ／以外はナデ
1879	土師器・甕	(32.4)	残6.2	—	(30.2)	—	—	灰褐	口縁部1/6	内外面ともハケ仕上げ
1880	土師器・甕	(36.0)	残13.2	—	(32.8)	(34.0)	—	褐灰	口縁部1/4・体部強か	内外面ともハケ仕上げ／外面全体に煤付着
1881	土師器・甕	(24.2)	残13.5	—	(23.4)	(29.2)	—	褐灰	口縁部1/2	口縁部内外面-体部外面：ハケ仕上げ／体部内面：ナデ
1882	土師器・甕	(23.0)	残7.9	—	(21.6)	(23.4)	—	にぶい橙	1/4	体部外面タタキ仕上げ／口縁部内外面・体部内面ナデ
1883	土師器・甕	(22.0)	残5.9	—	(19.4)	—	—	淡黄橙	口縁部～体部強か	体部外面タタキ仕上げ／口縁部内外面ナデ仕上げ
1884	瓦器・椀	(17.6)	4.7	(5.0)	—	—	26	暗灰	口縁部1/10・底部欠か	内面に暗文あり／外面は不明
1885	瓦器・椀	(14.9)	残3.3	—	—	—	—	暗灰	口縁部1/4	焼成やや不良／内面に暗文あり
1886	瓦器・椀	(15.2)	残4.0	—	—	—	—	灰	口縁部1/7	内外面とも暗文あり
1887	瓦器・椀	—	残1.1	4.8	—	—	—	灰	底部完存	見込みに暗文あり
1888	瓦器・椀	(15.7)	残4.4	—	—	—	—	暗灰	口縁部1/4	内外面とも暗文あり
1889	瓦器・椀	—	残2.1	(6.6)	—	—	—	灰	底部1/4・体部僅か	見込みに暗文あり
1890	瓦器・小皿	(11.0)	1.8		—	—	16	灰白～灰	1/6	見込みに暗文あり

第260表　ＳＤ115出土土器観察表（８）

番号	器種	法量（cm）						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	頸径	最大径	個数			
1891	瓦器・小皿	9.4	2.2	3.7	―	―	23	暗灰	完存	焼成やや不良
1892	瓦器・小皿	9.0	1.8	5.4	―	―	20	灰	底部1/3・口縁部僅か	底部ヘラ起こしか糸切り
1893	瓦器・小皿	(8.0)	2.5	―	―	―	28	灰	1/3	足高ふに暗文あり／底部外面はユビオサエの跡が顕著
1894	瓦器・小皿	(8.6)	2.1	―	―	―	24	灰	1/2	内面は丁寧なヘラミガキ／底部外面ユビオサエの跡が顕著
1895	白磁・碗	(14.2)	残2.4	―	―	―	―	灰白	口縁部1/8	全面に施釉
1896	白磁・碗	(16.0)	残3.7	―	―	―	―	灰白	口縁部1/8	全面に施釉
1897	白磁・碗	―	残3.7	―	―	―	―	灰白	口縁部僅か	全面に施釉
1898	白磁・碗	―	残2.7	―	―	―	―	灰白	口縁部僅か	全面に施釉
1899	白磁・碗	―	残2.3	―	―	―	―	灰白	口縁部僅か	全面に施釉
1900	白磁・皿	(10.0)	2.2	(3.4)	―	―	22	灰白	口縁部1/10・底部2/3	底部ヘラ削り／釉の色：灰白
1901	白磁・皿	―	残1.8	(3.6)	―	―	―	灰白	底部1/6・体部僅か	底部ヘラ削り／釉の色：灰オリーブ

ＳＤ１１６

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの西部に位置する。西北西から東南東方向に直線的にのびる溝である。ＳＢ71の南側桁行と方向を同じくし、距離が80cmと近接していることから、ＳＢ71に伴う雨落溝あるいは区画溝と考えられる。ＳＤ117と直交するように切り合っているが、調査においてはその前後関係を明らかにすることはできなかった。

形状・規模　検出した長さは2.40mである。検出面における幅は0.15～0.25mを測る。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは３cmないし４cmと浅い溝である。溝底部のレベルは一定しており、その標高は149.26mである。

埋土　暗黒褐色砂混じりシルト１層が堆積していた。

出土遺物　土器のみが出土している。須恵器・土師器・瓦器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

須恵器は椀が、土師器は小皿と鍋が、瓦器は椀が出土している。

時期　出土遺物がわずかで、小片ばかりであるため、土器のみからは時期を特定することは困難である。しかし、本溝がＳＢ71に伴うものであると考えられることから、川除13期と判断できる。

ＳＤ１１７

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの東部に位置する。北北東から南南西方向に直線的にのびる溝で、ＳＤ116と直交して切り合う溝である。ただし両者の前後関係は調査では明らかにすることはできなかった。ＳＢ70の東側桁行と平行しており、その距離が25cmと近接していることから、ＳＤ70に伴う雨落溝あるいは区画溝と考えられる。

形状・規模　検出した長さは6.50mである。検出面における幅は0.30m～0.55mを測る。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは３cmないし４cmと浅い溝である。溝底部のレベルは、北側から南側へ若干傾斜しており、その標高は北側で149.27m、南側で149.22m

である。

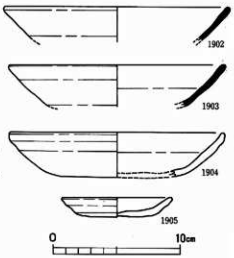
埋土　暗黒褐色砂混じりシルト1層が堆積していた。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　椀の口縁部片が出土している。

土師器　大皿と小皿が出土している。大皿は口縁を2段の横方向のナデ調整により仕上げている。また小皿は底部を手捏ねにより成形している。

時期　出土遺物から川除13～14期と考えられる。



第647図　ＳＤ117出土土器

第261表　ＳＤ117出土土器観察表

番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	幅径	最大径	個数	色調	残存状況	特徴・その他
1902	須恵器・椀	(17.4)	椀2.7	—	—	—	—	灰白	口縁部1/8	
1903	須恵器・椀[2]	(16.8)	椀3.3	—	—	—	—	灰白～灰	口縁部1/8	
1904	土師器・大皿	(16.8)	3.5	—	—	—	29	灰白	口縁部1/4	
1905	土師器・小皿	(8.4)	1.5		—	—	17	淡黄褐	口縁部～底部1/8	

ＳＤ１１８

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの中央部に位置する。北北東から南南西方向に直線的にのびる溝である。ＳＤ119が中央部で途切れる位置に、ＳＤ119の西側へ接するように掘られ、一部はＳＤ119を切っている。また、ＳＤ119とともに、ＳＢ67・ＳＢ68・ＳＢ69のいずれかに伴う溝と考えられる。

形状・規模　検出した長さは4.20mである。検出面における幅は0.20～0.25mを測る。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは２～５cmである。溝底部のレベルは北側から南側へ若干傾斜しており、その標高は北側で149.27m、南側で149.23mである。

埋土　暗黒褐色砂混じりシルト1層が堆積していた。

出土遺物　土器のみが出土している。須恵器・土師器・瓦器が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

須恵器は椀と甕が、土師器は大皿と小皿が、瓦器は椀が出土している。

時期　土器の出土量がわずかで、しかも小片であることから、土器のみから時期を特定することは困難である。ただし、本溝はＳＤ119を切っており、ＳＢ67・ＳＢ68・ＳＢ69のいずれかに対応するものと考えられることから、川除13～14期と考えられる。

ＳＤ１１９

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの中央部に位置する。北北東から南南西方向にほぼ直

線的にのびる溝である。ただし、中央部でＳＤ118に切られるとともに、途切れている。

形状・規模　検出した長さは、北側で4.30m、南側で5.00mを測り、途切れた部分も含めると全体で13.00mとなる。検出面における幅は、0.25～0.40mを測る。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは３～５cmと浅い溝である。したがって、中央部で途切れているのも、検出面からの深さが浅いためで、本来は１本の溝であったものと考えられる。溝底部のレベルはわずかに北側から南側へ傾斜しており、その標高は北側で149.28m、南側で149.25mである。

埋土　暗黒褐色砂混じりシルト層１層が堆積していた。

出土遺物　量的には少ないが土器のみが出土している。須恵器・土師器・瓦器が出土している。

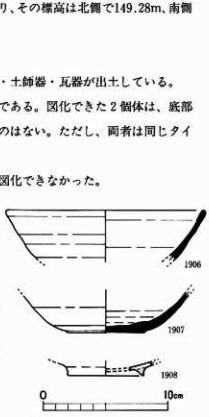
須恵器　椀のみが出土しているが、図化できた個体は２個体である。図化できた２個体は、底部を欠くものと、口縁部を欠くもので、全体がわかるものはない。ただし、両者は同じタイプのものと考えられる。

土師器　大皿と小皿が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

瓦器　椀の底部が出土している。図化できたのは高台部分が残存するのみである。断面逆三角形をなし、高台高は５mmである。磨滅が著しく内外面とも暗文の有無を確認することはできなかった。

時期　出土遺物はわずかであるが、図化できた土器から判断すると川除13～14期と考えられる。

遺構の性格　本溝はＳＤ121とともに、屋敷地を長方形に取り囲む区画溝となるものと考えられる。



第648図　ＳＤ119出土土器

第262表　ＳＤ119出土土器観察表

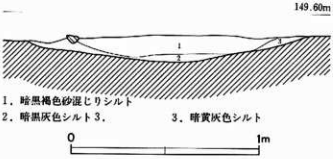
番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胴径	最大径	厚さ	色調	残存状況	特徴・その他
1906	須恵器・椀	(15.8)	残4.0	—	—	—	—	灰白	口縁部1/8	成形やや不良
1907	須恵器・椀	—	残3.2	(6.0)	—	—	—	灰白	底部1/4・体部僅か	
1908	瓦器・椀	—	残1.2	(6.0)		—	—	暗灰～黒	底部1/4・体部僅か	内外面とも調整不明

ＳＤ１２１（図版166・167）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの中央部に位置する。「コ」の字形にめぐる溝で、ＳＤ119あるいはＳＤ139とセットとなって、掘立柱建物群を取り囲んでいる。これと切り合うおもな遺構としては、ＳＤ113があるが、調査においてはその前後関係を明らかにすることはできなかった。

形状・規模　検出した長さは、北辺で17m、西辺で12m、南辺で18mを測り、全長47mである。検出面における幅は0.40～0.55mを測る。横断面は緩やかなＵ字形ないし皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは８～11cmである。溝底部のレベルは、北辺に比べて南辺ほど低

く、その標高は北辺で149.33m、南辺で148.83mである。



第649図　ＳＤ121横断面

埋土　北辺は、上から暗黒褐色砂混じりシルト層、暗黒灰色砂混じりシルト層、暗黄灰色シルト層の3層からなる。しかし、西辺においては淡黄褐色砂混じりシルト層、南辺においては黒褐色砂混じりシルト層の1層のみの堆積であった。

出土遺物　各辺から比較的多く出土しているが、特に北辺と西辺から多く出土している。本溝は調査時には、北辺・西辺・南辺とそれぞれ別の溝として調査をおこなったため、遺物も別々に取り上げている。そこで、本溝については、各辺を遺物の出土単位とみて、別々に報告していくことにする。

北辺　須恵器・土師器・瓦器・白磁が出土している。特に、須恵器と土師器が多く出土しており、両者で過半数を占める。

須恵器　椀・小皿・壺・甕が出土している。

椀　完形のものは1個体のみであるが、図化できたものは全て同じタイプに分類されるものである。体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに肥厚している。ただし1911・1913のように、口縁部を強い横ナデ調整により外反させるものもある。

小皿　基本的には底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部が肥厚するものである。ただし、底部の形態において、平高台の痕跡をとどめるもの（1915～1918）と、とどめないもの（1914・1919・1920）とに分けることができる。

壺　底部が1個体のみ出土している。双耳壺ないしそれに類する壺の底部と考えられる。底部は回転糸切りにより切り離されている。底部内面および体部内外面は、ともに回転ナデ調整により仕上げられている。

甕　図化できたのは1個体のみである。短く「く」字形に屈曲する口縁部を有するものである。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

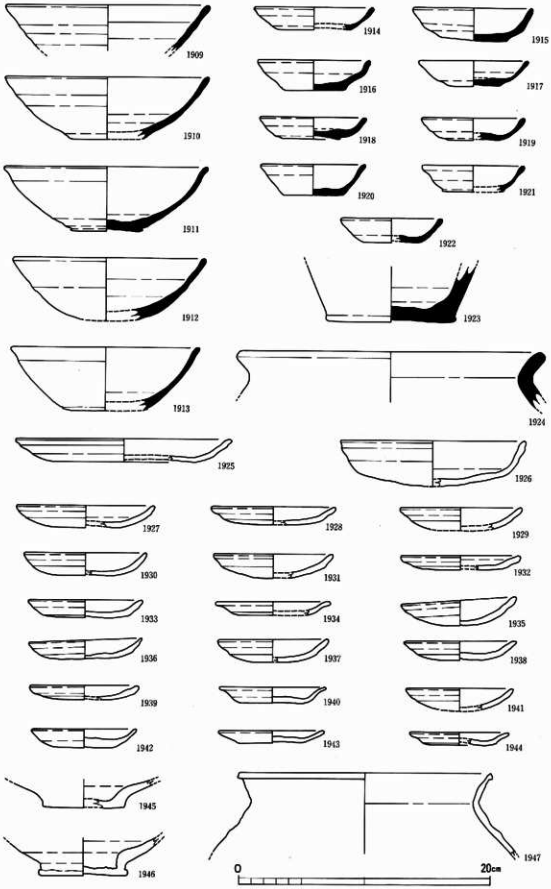
土師器　大皿・小皿・椀・鍋・甕の各器種が出土している。

大皿　図化できたのは2個体のみである。2個体とも成形方法は同じで、口縁部は2段の横方向のナデ調整、底部は手捏ねにより仕上げられている。

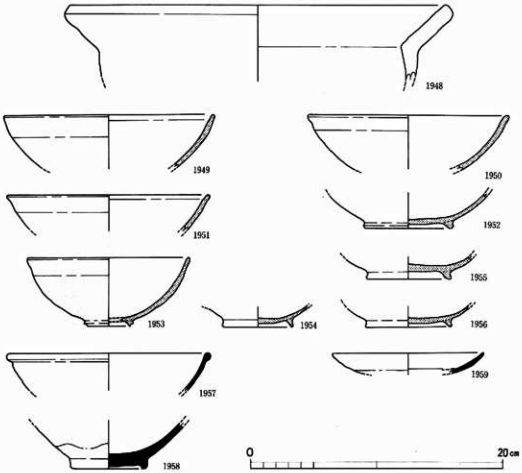
小皿　土師器のなかで最も多く出土した器種である。底部の形態によって大きく2つに分けることができる。まず、底部を回転糸切りにより切り離すものである。（1940・1942・1943）口縁部は、1段の回転ナデ調整により仕上げられている。

もうひとつは、底部を手捏ねにより仕上げるものである。口縁部は2段の横方向のナデ調整により仕上げるもの（1927～1933・1935～1939）と、1段のナデ調整により仕上げるもの（1934）とに分けることができる。

椀　図化できたのは2個体のみで、いずれも口縁部を欠いている。2個体とも同じ調整方法



第650図　ＳＤ121北辺出土土器（１）



第651図　ＳＤ121北辺出土土器（２）

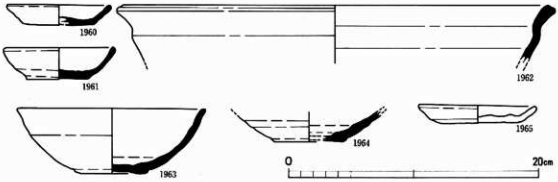
により仕上げられている。底部は回転糸切りにより切り離されている。体部は内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。また1946においては、底部内面にヘラ先状のものによる回転ナデが施され、ヘラ先のあたりによってできた沈線が螺旋状に巡っている。

鍋　図化できたのは１個体のみである。「く」字形に立ち上がる口縁部を有し、端部は外下方向へのつまみ出すようなナデ調整により仕上げられている。口縁部は内外面とも横方向のナデ調整により、体部外面はやや左上がり方向のタタキ整形により仕上げられている。体部内面については、磨滅が著しく不明である。

甕　本器種についても図化できたのは１個体のみである。体部から明瞭に屈曲し、短くのびる口縁部を有するものである。口縁部は、頸部から同じ幅に仕上げられ、端部はナデ調整により端面をもつ。体部内面は横方向のヘラナデ調整により仕上げられている。外面については、磨滅のため観察することができなかった。

瓦器　椀のみが出土している。口縁部から体部まで残存するのは1953の１個体のみであるが、全体的に比較的深い椀形を呈している。各個体とも残存状況がよくなく、細かな調整方法および暗文の有無を確認することは困難な状況である。このなかで、1954においては内面に、1955においては内外面に、1956では内面にわずかに暗文の痕跡を確認することができたが、図化することはできなかった。

白磁　碗と皿が出土している。



第652図　ＳＤ121南辺出土土器

碗　２個体出土しているが、いずれもⅣ類に分類されるものである。

皿　底部を欠くが、平高台をなすものと推定される。口縁部は内外面とも回転ナデ調整により仕上げられ、全面に釉がかけられている。

西辺　須恵器・土師器・瓦器・白磁の各器種が出土している。

須恵器　椀・小皿・甕が出土している。

椀　基本的には同じタイプに分類されるものであるが、細部においてバリエーションが認められる。まず、体部から口縁部にかけては、内湾気味に立ち上がるものと、直線的に立ち上がるものとがある。また底部の形態において、平高台の痕跡をとどめるものととどめないものとがある。特に、1974については、内面に明確な段をもち、図化した椀のなかでは少し古い様相を示している。

小皿　北辺で認められたように、平高台の痕跡をとどめるものと、とどめないものとに分けることができる。口縁部は、基本的には内湾気味に立ち上がり、端部が肥厚している。

甕　図化できたのは２個体であるが、1992は断面のみしか図化できなかった。２個体とも北辺で出土している甕と同じタイプのものである。

土師器　大皿・小皿・椀・托・甕の各器種が出土している。

大皿　図化できたのは１個体のみである。口縁部は１段の横方向のナデ調整により仕上げられ、底部は手捏ねにより成形されている。

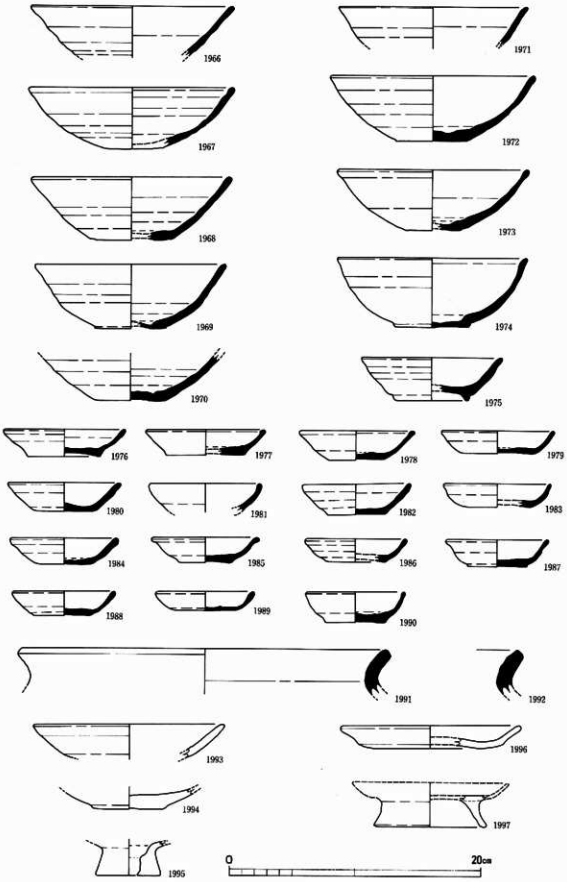
小皿　土師器のなかで最も多く出土している器種である。北辺出土の小皿同様、底部の形態において２つに分けられる。

一つは、底部を回転糸切りにより切り離すものである。(2003～2005)口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。

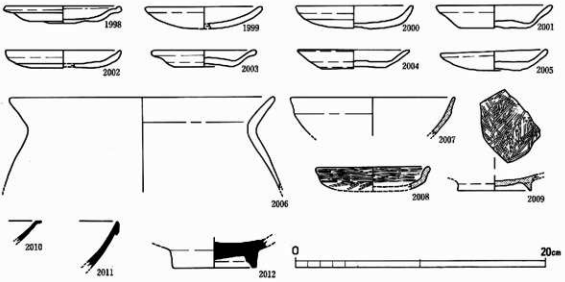
もう一つは、底部を手捏ねにより仕上げるものである。(1998～2002)このタイプは、口縁部の形態でさらに分けることができる。ひとつは1998のように、「て」の字状口縁部の形態をとどめるもので、他の小皿より古い傾向を示すものである。もうひとつは２段の横方向のナデ調整により仕上げるものである。

椀　図化できたのは２個体であるが、全体のわかるものはない。1993は口縁部片であるが、内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。1994は底部片であるが、回転糸切りにより切り離されている。体部は内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

托　図化できたのは２個体である。1995は底部のみの残存である。底部は中空で、ナデ調整



第653図　ＳＤ121西辺出土土器（１）



第654図　ＳＤ121西辺出土土器（２）

により仕上げられている。他は横方向のナデ調整により仕上げられている。

1997は高台付皿に分類されるものである。高台高が2.20cmと高い。内外面とも横方向のナデ調整により仕上げられている。

甕　直線的な肩部に「く」字形に屈曲する口縁部が付くものである。口縁部は横方向のナデ調整により仕上げられている。体部は、外面は粗いタタキ成形の後ナデ調整により仕上げられているが、内面については磨滅が著しく不明である。

瓦器　椀と小皿が出土している。

椀　図化できたのは２個体に限られ、しかも全体のわかるものはない。2007は体部から口縁部にかけて残存する椀である。口縁部は１段の横方向のナデ調整が施されている。内外面に暗文の痕跡が認められるが、残存状況が悪いため図化できなかった。2009は底部片である。断面逆三角形の高台が貼り付けられている。見込みには比較的密で丁寧な暗文が施されている。

小皿　図化できたのは１個体のみである。口縁部は１段の横方向の強いナデ調整により仕上げられ、底部は手捏ねにより成形されている。内外面とも比較的密な横方向の暗文が施されている。

白磁　図化できたのはいずれも碗である。2011・2012はⅣ類に分類されるものである。2010は、断面しか図化できなかったが、碗の口縁部片と考えられる。

南辺　須恵器・土師器・瓦器が出土している。

須恵器　椀・小皿・鉢が出土している。

椀　図化できたのは２個体のみである。1963は、底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部を強いナデ調整により外反させ、端部を薄くおさめている。底部は平高台の痕跡をとどめ、内面はわずかに段をもつ。1964の底部も、1963とほぼ同じ特徴をもつものである。

小皿　図化できたのは２個体である。底部の形態において平高台の痕跡をとどめるもの(1961)と、とどめないもの（1960）が出土している。

鉢　内湾気味に立ち上がる体部に、短く外反しかつ肥厚する口縁部が付くものである。内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

土師器　小皿が出土している。底部は回転糸切りにより切り離され、口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。

瓦器　椀の底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　3辺から多くの土器が出土しているため、これらの土器から時期を判断することができる。これらの土器は、ほとんどはほぼ同時期とみて間違いない資料であるが、一部1963・1974・1998のように古い様相をもつものもある。しかし、これらの土器は少数であり、またさほど時期差がないことから、本溝の時期は川除13期と考えられる。

遺構の性格　本溝は、ＳＤ119あるいはＳＤ139とセットとなって、いくつかの掘立柱建物群を取り囲むものである。したがって、本溝については、これら掘立柱建物群から構成される屋敷地を区画するための溝であったものと考えられる。

第263表　ＳＤ121出土土器観察表（１）

番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	厚径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他
1909	須恵器・椀	(16.6)	残3.6	—	—	—	—	灰白	口縁部1/6	6㎜大の礫含む
1910	須恵器・椀	(16.6)	残4.9	—	—	—	—	灰	口縁部1/6	
1911	須恵器・椀	(16.6)	5.1	5.2	—	—	31	灰白～灰	底部完存・体部欠か	
1912	須恵器・椀	(14.8)	4.9		—	—	32	灰白～灰	口縁部1/8強	1～5㎜大の礫含む
1913	須恵器・椀	(14.5)	5.0	(6.8)	—	—	34	灰白	口縁部1/8・底部欠か	
1914	須恵器・小皿	(9.3)	1.8	5.8	—	—	19	灰白	口縁部1/6	
1915	須恵器・小皿	9.3	2.6	5.3	—	—	27	灰白	ほぼ完存	
1916	須恵器・小皿	8.8	2.4	4.9	—	—	27	灰白	完存	
1917	須恵器・小皿	(8.5)	2.0	(4.2)	—	—	23	灰	口縁部1/4・底部完存	
1918	須恵器・小皿	8.2	1.8	4.6	—	—	21	灰白	口縁部3/4	
1919	須恵器・小皿	(8.0)	1.8	(4.6)	—	—	22	灰白	口縁部1/4	
1920	須恵器・小皿	(8.0)	2.5	(4.6)	—	—	31	灰白	口縁部1/4・底部完存	胎土の粒子が細かい
1921	須恵器・小皿	(8.0)	2.1	(4.8)	—	—	26	灰白	口縁部1/4	
1922	須恵器・小皿	(7.8)	1.9	(4.6)	—	—	24	灰	口縁部～底部1/8	
1923	須恵器・蓋	—	残4.4	(19.2)	—	—	—	灰	底部1/2・体部欠か	焼成不良・底部糸切り
1924	須恵器・壺	(23.6)	残4.5	—	22.6	—	—	灰白	口縁部僅か	
1925	土師器・大皿	(16.6)	1.9		—	—	11	浅黄橙～淡橙	口縁部1/8弱	精良に近い粘土
1926	土師器・大皿	(14.7)	3.6		—	—	24	にぶい黄橙	口縁部～底部1/4	
1927	土師器・小皿	(10.7)	1.8		—	—	16	灰白	口縁部1/4	精良に近い粘土
1928	土師器・小皿	(9.7)	1.5		—	—	15	灰白	口縁部～底部1/4	
1929	土師器・小皿	(9.4)	1.7		—	—	18	灰白	口縁部1/4	
1930	土師器・小皿	(9.3)	1.8		—	—	18	にぶい橙	口縁部1/8	精良な粘土
1931	土師器・小皿	(9.4)	1.9		—	—	20	浅黄橙	口縁部～底部1/4	
1932	土師器・小皿	(9.2)	1.2		—	—	13	淡赤橙	口縁部1/4弱	
1933	土師器・小皿	(8.9)	1.4		—	—	15	淡黄橙	口縁部1/4・底部3/4	精良に近い粘土
1934	土師器・小皿	(8.9)	1.1		—	—	12	淡橙	口縁部1/4	

第264表　ＳＤ121出土土器観察表（２）

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	頂径	最大径	胎土	色調	残存状況	特徴・その他
1935	土師器・小皿	8.9	2.3		—	—	25	淡黄橙	ほぼ完存	全体的に歪んでいる
1936	土師器・小皿	8.8	1.7		—	—	19	淡黄橙～橙	口縁部3/4	全体的に歪んでいる
1937	土師器・小皿	(8.6)	1.9		—	—	22	にぶい黄橙	口縁部～底部1/2	全体的に歪んでいる
1938	土師器・小皿	(8.4)	1.5		—	—	17	にぶい赤橙	口縁部欠か・底部1/4	ほぼ精良な胎土
1939	土師器・小皿	(8.4)	1.1		—	—	13	にぶい橙	口縁部1/4	
1940	土師器・小皿	8.4	1.3		—	—	15	橙～淡赤橙	底部完存・口縁部1/2	底部回転糸切り
1941	土師器・小皿	(8.3)	残1.4			—	—	灰白	口縁部1/4	
1942	土師器・小皿	8.2	1.0		—	—	12	灰白	底部完存・口縁部1/4	底部回転糸切り
1943	土師器・小皿	8.3	1.0		—	—	12	灰白	底部完存・口縁部1/4	底部回転糸切り
1944	土師器・小皿	(7.5)	1.1		—	—	14	灰白	口縁部～底部1/4	ほぼ精良な胎土
1945	土師器・椀	—	残2.3	(6.5)		—	—	褐灰	底部1/2・体部欠か	底部回転糸切り
1946	土師器・椀	—	残3.0	(6.6)	—	—	—	灰白～褐灰	底部2/3	底部回転糸切り
1947	土師器・鉢	(20.0)	残6.4	—	(18.4)	—	—	灰白	口縁部1/10	
1948	土師器・甕	(30.0)	残6.0	—	25.2	—	—	にぶい黄橙	口縁部1/6	1～2mm大の礫多く含む
1949	瓦器・椀	(16.6)	残4.3	—	—	—	—	暗灰	口縁部1/8	
1950	瓦器・椀	(15.8)	残4.4	—	—	—	—	暗灰～灰白	口縁部1/8	炭素の吸着不十分(内面)
1951	瓦器・椀	(15.8)	残2.7	—	—	—	—	暗灰	口縁部1/8	
1952	瓦器・椀	—	残2.7	6.8	—	—	—	暗灰	底部完存	
1953	瓦器・椀	(13.0)	5.4	(3.4)	—	—	41	灰白		
1954	瓦器・椀	—	残1.1	(5.4)	—	—	—	暗灰	底部3/4	
1955	瓦器・椀	—	残1.8	6.6	—	—	—	暗灰	底部3/4	
1956	瓦器・椀	—	残1.6	6.8	—	—	—	灰白～暗灰	底部ほぼ完存	
1957	白磁・碗	(16.0)	残2.9	—	—	—	—	灰白	口縁部1/12	精良な胎土
1958	白磁・碗	—	残3.7	(6.0)	—	—	—	灰白	底部1/2・体部欠か	
1959	白磁・皿	(12.0)	残1.6	—	—	—	—	明オリーブ灰	口縁部1/8以下	
1960	瓦器野・小皿	(7.8)	1.6	(5.6)	—	—	20	灰	口縁部～底部1/2	
1961	瓦器野・小皿	8.5	2.5	5.0	—	—	29	灰	ほぼ完存	
1962	瓦器野・鉢	(33.6)	残4.5	—	—	—	—	灰白	口縁部欠か	精良に近い胎土／内外面横ナデ仕上げ
1963	瓦器野・椀	(14.7)	5.2	(5.8)	—	—	35	灰白	口縁部～底部1/2	
1964	瓦器野・椀	—	残2.9	(5.6)	—	—	—	灰白	底部1/3	
1965	土師器・小皿	9.2	1.5		—	—	16	淡黄橙	ほぼ完存	底部回転糸切り
1966	瓦器野・椀	16.0	残3.9	—	—	—	—	灰白	口縁部1/6	1～4mm大の礫含む
1967	瓦器野・椀	(16.0)	残4.6	—	—	—	—	灰白	1/2	
1968	瓦器野・椀	(15.5)	5.0	(5.7)	—	—	32	灰白～灰	1/4	1～2mm大の礫多く含む
1969	瓦器野・椀	(16.0)	5.1	(5.6)	—	—	34	灰白	1/4	焼成やや不良
1970	瓦器野・椀	—	残3.6	(5.4)	—	—	—	灰白	底部1/2・体部欠か	
1971	瓦器野・椀	(14.7)	残3.9	—	—	—	—	灰白	口縁部1/8	
1972	瓦器野・椀	(16.0)	5.2	(5.6)	—	—	32	灰	口縁部1/4・底部完存	1～5mm大の礫含む
1973	瓦器野・椀	(14.8)	4.8	(4.4)	—	—	32	灰白	1/8	
1974	瓦器野・椀	(14.8)	5.5	(5.8)	—	—	37	灰白～灰	口縁部1/2・底部完存	口縁端部内面に沈線あり／全体的に雑な仕上げ

第265表　ＳＤ121出土土器観察表（３）

番号	器種	法量（cm）						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	頸径	最大径	指数			
1975	須恵器・小型壺	(11.6)	3.4	5.4	―	―	30	灰白	口縁部1/5	焼成やや不良／１～６mm大の礫含む
1976	須恵器・小皿	9.5	2.2	5.7	―	―	23	灰白	口縁部1/2・底部完存	
1977	須恵器・小皿	(9.4)	2.0	(6.3)	―	―	21	灰白	1/2	１～３mm大の礫含む／口縁端部押さえつけるナデ
1978	須恵器・小皿	8.8	2.3	4.4	―	―	25	灰白～灰	ほぼ完存	
1979	須恵器・小皿	(8.6)	1.8	(5.6)	―	―	20	灰白	3/4	
1980	須恵器・小皿	(8.7)	2.3	(5.0)	―	―	26	灰白	口縁部1/4・底部完存	焼成やや不良
1981	須恵器・小皿	(8.7)	残2.3	―	―	―	―	灰白	口縁部1/4	
1982	須恵器・小皿	8.4	2.4	4.5	―	―	28	灰白	ほぼ完存	１～４mm大の礫大変多く含む
1983	須恵器・小皿	(8.4)	1.8	(5.3)	―	―	21	灰白～灰	1/4	
1984	須恵器・小皿	8.3	2.1	4.0	―	―	25	灰白	口縁部1/2	焼成やや不良
1985	須恵器・小皿	(8.3)	2.1	(4.3)	―	―	25	灰白～灰	口縁部1/8・底部1/2	
1986	須恵器・小皿	(7.8)	1.8	(4.6)	―	―	23	灰白～灰	1/4	
1987	須恵器・小皿	(8.0)	2.1	(4.7)	―	―	26	灰白	口縁部1/4・底部1/2	他の須恵器と異なる粘土
1988	須恵器・小皿	7.8	1.9	4.5	―	―	24	灰	3/4	
1989	須恵器・小皿	(7.7)	1.5	(4.9)	―	―	19	灰	底部1/2	
1990	須恵器・小皿	(7.6)	2.4	4.8	―	―	31	灰白	ほぼ完存	
1991	須恵器・壺	(28.7)	残3.6	―	(27.5)	―	―	灰白	口縁部1/8	焼成やや不良
1992	須恵器・壺	―	残3.5	―	―	―	―	オリーブ灰	口縁部微か	内外調整ナデ
1993	土師器・坏	(14.9)	残2.3	―	―	―	―	灰白	口縁部1/8	精良な粘土
1994	土師器・坏	―	残1.7	(5.9)	―	―	―	灰白	底部ほぼ完存	底部糸切り
1995	土師器・托	―	残2.7	(5.0)	―	―	―	淡黄橙	底部完存	底部穴の径1.5cm
1996	土師器・大皿	(13.9)	1.8	―	―	―	12	灰白	1/4	精良に近い粘土
1997	土師器・台付皿	―	残5.5	(8.5)	―	―	―	にぶい黄橙	高台1/4	高台高2.3cm
1998	土師器・小皿	9.2	1.4	―	―	―	15	灰白	口縁部3/4	全体的に歪みが激しいでいる
1999	土師器・小皿	(9.0)	1.8	―	―	―	20	灰白	1/4	精良に近い粘土／口縁部２段のヨコナデ
2000	土師器・小皿	9.2	1.8	―	―	―	19	灰白	口縁部1/2・底部完存	口縁部２段のヨコナデ
2001	土師器・小皿	(9.1)	1.8	(5.8)	―	―	19	灰白～淡黄橙	口縁部1/2・底部完存	底部糸切り
2002	土師器・小皿	(9.1)	1.4	―	―	―	15	淡黄橙～灰白	1/4	
2003	土師器・小皿	(7.9)	1.3	(4.8)	―	―	16	灰白	3/4	底部糸切り
2004	土師器・小皿	8.8	1.5	5.2	―	―	17	淡黄橙	口縁部3/4	底部糸切り
2005	土師器・小皿	8.4	1.7	―	―	―	20	淡黄橙	完存	全体的に歪んでいる
2006	土師器・壺	(20.9)	残7.4	―	(18.1)	―	―	灰白	口縁部1/8	
2007	瓦器・椀	(13.0)	残3.0	―	―	―	―	灰	口縁部1/8	口縁部内外面・体部内面をヘラミガキ
2008	瓦器・小皿	(9.0)	1.8	―	―	―	20	灰	口縁部1/8	内外面ともヘラミガキ
2009	瓦器・椀	―	残1.3	(5.9)	―	―	―	灰	底部1/2	ほぼ精良な粘土／見込みをヘラミガキ
2010	白磁・椀	―	残1.7	―	―	―	―	灰白	口縁部微か	全面に施釉(明緑灰)
2011	白磁・椀	―	残4.1	―	―	―	―	灰白	口縁部微か	全面に施釉
2012	白磁・椀	―	残2.3	(6.5)	―	―	―	灰白	底部完存	内面に施釉／外面ヘラ削り

ＳＤ１２２

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの中央部に位置する。ＳＤ113とＴ字形に切り合い、直線的にのびる溝である。溝の方向は西北西から東南東方向である。ＳＤ113との前後関係は、調査においては明らかにすることはできなかった。

形状・規模　検出した長さは4.60mである。検出面における幅は0.57～0.65mを測る。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは２～６cmと浅い溝である。溝底部のレベルはほぼ一定しており、その標高は西側で149.34mである。

埋土　暗黒褐色砂混じりシルト層１層が堆積していた。

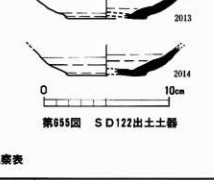
出土遺物　溝の規模が小さいこともあり、遺物の出土もわずかである。器種としては、須恵器と土師器が出土している。

須恵器　椀と小皿が出土しているが、図化できたのは椀のみである。底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部がわずかに肥厚するものである。底部はわずかに平高台の痕跡をとどめ、内面はわずかに段が認められる。

土師器　甕か鍋と考えられる破片が出土しているが、小片のため器種の特定は困難である。

時期　遺物の出土量はわずかであるが、図化できた須恵器の椀で判断することができる。そしてこの須恵器の椀を根拠に、本溝の時期は川除13期と考えられる。

遺構の性格　本溝は、ＳＤ113の一部とＳＤ127とがセットとなり「コ」字形をなし、ＳＢ75を取り囲むあるいは区画する機能をもっていたものと考えられる。



第655図　ＳＤ122出土土器

第266表　ＳＤ122出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胴径	最大径	指数	色調	焼成状況	特徴・その他
2013	須恵器・椀	(16.0)	5.0	(6.0)	―	―	31	灰白	1/8	1－3mm大の礫含む
2014	須恵器・椀	―	残2.3	(6.0)	―	―	―	明青灰	底部1/3	

ＳＤ１２３

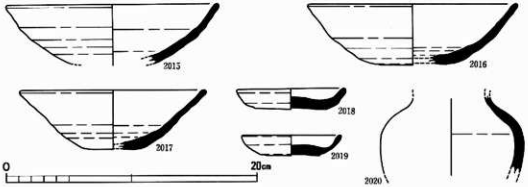
検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの中央部に位置する。西北西から東南東方向にほぼ直線的にはしる溝である。ＳＤ113とは直交するが、両者の前後関係については、調査時においては明らかにできなかった。

形状・規模　検出した長さは12mである。検出面における幅は0.40～0.75mを測る。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは６～12cmである。溝底部のレベルは、西側から東側へ傾斜しており、その標高は西側で149.34m、東側で149.16mである。

埋土　暗黒褐色砂混じりシルト層１層が堆積していた。

出土遺物　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　椀・小皿・小壺・甕が出土しているが、甕については小片のため図化できなかった。



第656図　ＳＤ123出土土器

椀　図化できたのは３個体である。底部から体部にかけては内湾気味で、体部から口縁部はほぼ直線的にたちあがっている。底部の残存するものは、平高台の痕跡をとどめない。

小皿　図化できたのは２個体である。２個体とも口縁部が短く内湾気味に立ち上がるものである。ただ、2018に対して2019は平高台の痕跡を明瞭に残すものである。

小壺　１個体出土している。頸部から体部中位までの残存である。頸部内外面および体部外面は回転ナデ調整により、体部内面は回転ヘラナデ調整により仕上げられている。

土師器　小皿と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

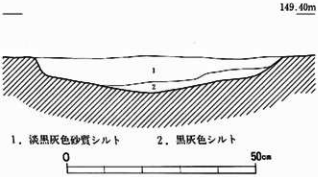
時期　本溝内出土の土器から時期を判断すると、川除14期と考えられる。

第267表　ＳＤ123出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胴径	最大径	厚さ	色調	残存状況	特徴・その他
2015	須恵器・椀	(16.6)	残4.6	—	—		—	灰白	口縁部1/8	
2016	須恵器・椀	(16.4)	4.8	(5.5)	—	—	29	灰白～灰	口縁部・底部欠か	1～12mm大の礫含む
2017	須恵器・椀	(14.6)	4.7	(5.1)	—	—	32	灰	口縁部1/4	
2018	須恵器・小皿	8.6	1.7	5.7	—	—	19	灰白	口縁部2/3	底部の切離し方法不明
2019	須恵器・小皿	7.8	1.6	4.3	—	—	20	灰白	完存	底部糸切り
2020	須恵器・小壺	—	残6.0	—	(6.2)	(11.4)	—	灰白	体部か	体部下半のみヘラナデ／以外は横ナデ

ＳＤ１２４

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの南部に位置する。ほぼ南北方向にはしるＳＤ113とＳＤ139の間には、東西方向にＳＤ123が位置する。本溝は、この南側約２mに平行している。本溝の東側は南側へわずかに屈曲してＳＤ139と合流している。なお、ＳＤ113およびＳＤ139との切り合い関係



第657図　ＳＤ124横断面

は、調査においては明らかすることはできなかった。

形状・規模　検出した長さは9.80mである。検出面における幅は0.15～0.80mを測る。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは10～12cmである。溝底部のレベルは一定しており、その標高は中央部で149.24mである。

埋土　上から淡黒灰色砂質シルト層、黒灰色シルト層の２層が堆積していた。下層の黒灰色シルト層は薄い堆積層である。

出土遺物　土器と石器が出土している。土器は、須恵器・土師器・瓦器が出土している。

須恵器　椀・小皿・甕が出土しているが、甕については小片のため図化できなかった。

椀　口縁部から底部まで残存するものは１個体のみであるが、ほとんどは同じタイプに分類されるものと考えられる。体部から口縁部にかけての立ち上がりは、全体的に直線的である。また、底部の形態において、2025のように平高台の痕跡をとどめるものもある。

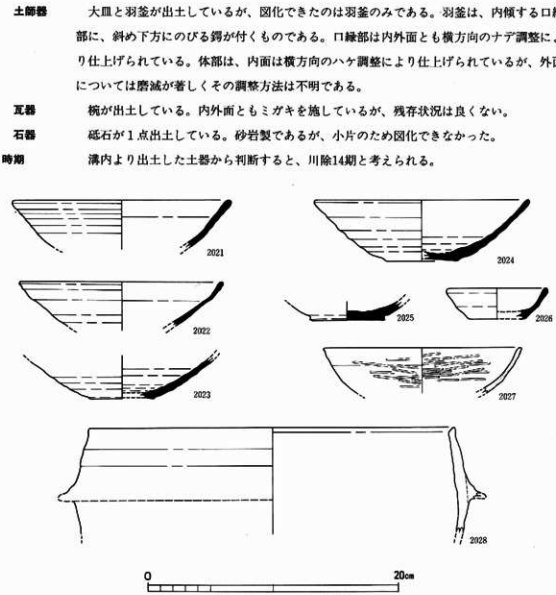
小皿　図化できたのは１個体のみである。底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、端部は肥厚している。

土師器　大皿と羽釜が出土しているが、図化できたのは羽釜のみである。羽釜は、内傾する口縁部に、斜め下方にのびる鍔が付くものである。口縁部は内外面とも横方向のナデ調整により仕上げられている。体部は、内面は横方向のハケ調整により仕上げられているが、外面については磨滅が著しくその調整方法は不明である。

瓦器　椀が出土している。内外面ともミガキを施しているが、残存状況は良くない。

石器　砥石が１点出土している。砂岩製であるが、小片のため図化できなかった。

時期　溝内より出土した土器から判断すると、川除14期と考えられる。



第658図　ＳＤ124出土土器

遺構の性格　本溝についても、掘立柱建物と方向が一致し、特にＳＢ66およびＳＢ67と近接していることから、これらの建物にともなう区画溝であったものと考えられる。

第268表　ＳＤ124出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	脚径	最大径	厚さ			
2021	須恵器・椀	(17.0)	残3.8	—	—	—	—	灰白～灰	口縁部1/8	
2022	須恵器・椀	16.0	残3.5	—	—	—	—	灰白	口縁部1/6	
2023	須恵器・椀	—	残3.2	(4.6)	—	—	—	灰白	底部僅か	
2024	須恵器・椀	17.9	4.8	(5.6)	—	—	28	灰	1/4	
2025	須恵器・椀	—	残1.5	(6.0)	—	—	—	灰白～灰	底部1/4	1mm大の砂粒を多く含む
2026	須恵器・小椀	(7.7)	2.4	(4.3)	—	—	31	灰白～灰	1/4	
2027	瓦器・鍋	(15.6)	残3.6	—	—	—	—	灰白～灰	口縁部1/4	焼成やや不良／内外面ともヘラミガキあり
2028	土師器・羽釜	(29.0)	残8.4	—	—	—	—	淡黄～橙色	口縁部1/9・体部僅か	

ＳＤ１２５

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの中央部に位置する。ＳＤ121南辺中央部やや東よりから直交するように北へ直線的にのびる溝である。ＳＤ121との切り合い関係は認められず、同時期に機能していたことも考えられる溝である。

形状・規模　検出した長さは1.50mである。検出面における幅は0.40～0.55mを測る。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは３～５cmと大変浅い溝である。溝底部のレベルは一定しており、その標高は149.30mである。

埋土　ＳＤ121南辺と同じで、黒褐色砂混じりシルト層１層が堆積していた。

出土遺物　須恵器・土師器が出土しているが、小片のため図化できるものはなかった。

時期　図化できる土器が出土していないため、出土遺物から時期を特定することは困難である。しかし、埋土がＳＤ121と同じであることなどから、川除13期と考えられる。

遺構の性格　本溝についても、1.50mと大変短い溝であるが、ＳＤ121と対応することや、ＳＢ69の南西部の柱穴を欠いている箇所と対応することなどから、建物の区画溝あるいはそれに準ずる性格の溝と考えられる。

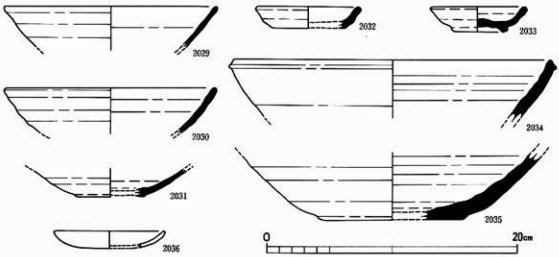
ＳＤ１２６

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの南端に位置する。西北西から東南東方向にのびる溝で、東側はほぼ直角に屈曲してＳＤ121につながっている。西端はＳＤ129につながっている。ただし両端とも、その前後関係を調査においては明らかにできなかった。

形状・規模　検出した長さは11mである。検出面における幅は0.55～0.75mを測る。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは10～13cmである。溝底部のレベルは一定しており、その標高は中央部で149.20mである。

埋土　上から暗灰色シルト層、暗褐灰色砂混じりシルト層の２層が堆積していたが、ＳＤ121の埋土とほとんど同じ埋土である。

出土遺物　土器が出土している。器種としては、須恵器と土師器が出土している。



第659図　ＳＤ126出土土器

須恵器　椀・小皿・高台付皿・揺鉢が出土している。

椀　口縁部から底部まで残存するものはないが、図化できた３個体については基本的には同じタイプに分類できるものと考えられる。

小皿　図化できたのは１個体のみである。他の須恵器の小皿と比べて、口縁部が外反している点が異なり、特徴的である。また、全体的に器壁が厚い傾向にある。

高台付皿　本遺跡で一般的な須恵器小皿に、輪高台が付くものである。他の遺跡においてもあまり類例がないものである。高台は断面方形を呈し、端面は外傾している。

揺鉢　口縁部片と底部片を図化することができた。口縁部片（2034）は、わずかに内湾気味に立ち上がる体部に対して、口縁端部がその方向に直角になるようにナデ調整を施し、端面をもつものである。底部片（2035）は、底部から体部が内湾気味に立ち上がるものである。体部は内外面とも回転ナデ調整により仕上げられているが、底部はヘラ起こしにより切り離されており、この切離し方法もあまり例を見ないものである。

土師器　小皿と鍋が出土しているが、図化できたのは小皿のみである。

小皿　図化できたのは１個体のみである。口縁部のみが残存するもので底部の形態は不明である。ただ、口縁部が横方向のナデ調整により仕上げられていることから、手捏ねによるものと推定される。

時期　出土遺物から判断すると、川除13期と考えられる。

遺構の性格　本溝に直接隣接する建物は認められない。ただし、ＳＤ121などとほぼ同じ方向性をもつことなどから、他の溝同様区画溝などの機能を有していたものと考えられる。

第269表　ＳＤ126出土土器観察表（１）

番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	要径	最大径	胎土	色調	残存状況	特徴・その他
2029	須恵器・椀	(16.8)	残3.2	—	—	—	—	灰白	口縁部1/6	
2030	須恵器・椀	(16.3)	残3.5	—	—	—	—	灰白	口縁部1/8	1～5㎜大の噛含む
2031	須恵器・椀	—	残2.2	(5.6)	—	—	—	灰白	底部・体部強か	精良に近い胎土
2032	須恵器・小皿	(7.8)	1.7	(5.4)	—	—	21	灰白	口縁部1/8	

第270表　ＳＤ126出土土器観察表（２）

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胴径	最大径	稜数	色調	残存状況	特徴・その他
2033	須恵器・小皿	7.4	2.0	3.8	——	——	27	灰白	完存	
2034	須恵器・椀	(25.1)	残4.6	——	——	——	——	灰白	口縁部1/8	
2035	須恵器・甕	——	残5.3	11.2	——	——	——	灰	底部・体部落か	底部へラ削こし／1～5mm大の礫含む
2036	土師器・小皿	(8.6)	残1.3	——	——	——	——	浅黄橙	口縁部1/8	

ＳＤ１２７

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの南西部に位置する。本掘立柱建物群のなかで最も南西部にある溝である。西北西から東南東へはしる溝で、東側は北側へ短く屈曲しＳＤ113の南西コーナーと切り合っている。しかし、ＳＤ113との切り合い関係は調査においては明確にはできなかった。西端は自然に消滅している。

形状・規模　検出した長さは９ｍである。検出面における幅は0.30～0.55mを測る。横断面は皿形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは３～７cmと浅い溝である。底部のレベルは一定しており、その標高は149.23mである。

埋土　灰色砂混じりシルト層１層が堆積していた。

出土遺物　遺物の出土量はわずかである。須恵器・土師器と白磁が出土している。

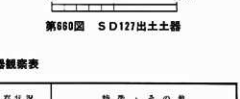
須恵器　椀・小皿・甕が出土しているが、図化できたのは椀のみである。椀は底部から体部にかけて残存するのみである。底部は平高台の痕跡をとどめ、内面は段が認められる。また、体部は内湾気味に立ち上がっている。

土師器　小片のため、図化どころか器種の特定もできない。

白磁　小片のため、図化できたのは断面に限られる。口縁部は、つまみあげるようなナデ調整により外端面をもつ。残存する範囲においては全面に釉がかけられている。

時期　土器の出土量がわずかであるが、須恵器の椀を根拠に川除13期と考えられる。

遺構の性格　本溝は、ＳＤ122とＳＤ121の一部とセットなり、ＳＢ75の東側渠行を「コ」の字形に囲んでいる。また建物の方向とこれらの溝の方向性も一致するものである。したがって、本溝は、ＳＢ75に伴う区画溝ないし雨落溝としての機能をもっていたものと考えられる。



第660図　ＳＤ127出土土器

第271表　ＳＤ127出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胴径	最大径	稜数	色調	残存状況	特徴・その他
2037	須恵器・椀	——	残2.3	(5.4)	——	——	——	灰白	底部1/3・体部欠か	1～6mm大の礫含む
2038	白磁・椀	——	残2.3	——	——	——	——	灰白	口縁部欠か	全面施釉

ＳＤ１３４

検出状況　Ⅳ区の南西部で検出している。小微高地の単位でいえば、小微高地ｄの南西部にあたり、この小微高地の南側の落ち際から約２m北側に位置している。溝の方向は小微高地の方向に直交して検出され、全体として北から南の方向を指している。溝は北側と南側で明瞭に検出されたが、中央部分では不明確で検出されなかった。

規模・形状　長さは検出された部分で8.0mを測る。

幅は検出面で0.33～0.35m、溝底で0.05～0.10mを測る。断面形はＵ字形を呈する。

検出面からの深さは９～14cmであり、溝底の標高は北東側で149.19m、南西側で149.19mで両者に差は認められない。

出土遺物　土器のみが出土している。須恵器の椀・小皿、土師器の大皿・小皿が出土しているが、いずれのものも小片のため図化できなかった。

時期　出土している土器から川除14期と考えられる。

ＳＤ１３６

検出状況　Ⅳ区南西部に位置する、北北東から南南西方向に直線的にのびる溝である。Ⅳ区中央部南側掘立柱建物群Ｂの南東側にあたる。本溝の南側は調査区外までのび、北側は中世以降の撹乱で切られ、途切れている。また、本溝の北側約1/3の地点で、ＳＤ113の東端に切られている。この他、本溝の南端部で古墳時代の溝ＳＤ135を切っている。

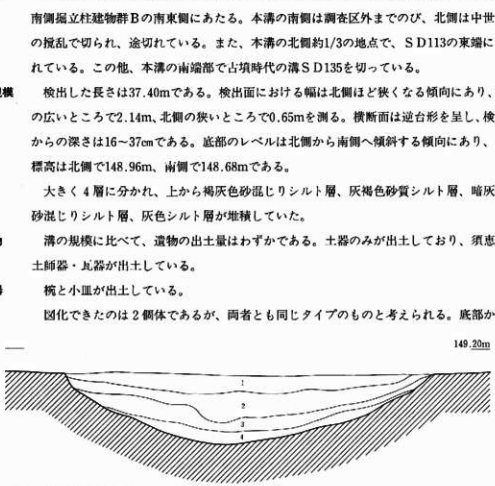
形状・規模　検出した長さは37.40mである。検出面における幅は北側ほど狭くなる傾向にあり、南側の広いところで2.14m、北側の狭いところで0.65mを測る。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは16～37cmである。底部のレベルは北側から南側へ傾斜する傾向にあり、その標高は北側で148.96m、南側で148.68mである。

埋土　大きく４層に分かれ、上から褐灰色砂混じりシルト層、灰褐色砂質シルト層、暗灰色細砂混じりシルト層、灰色シルト層が堆積していた。

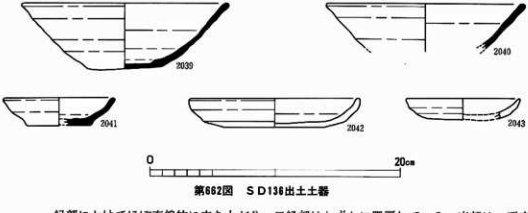
出土遺物　溝の規模に比べて、遺物の出土量はわずかである。土器のみが出土しており、須恵器・土師器・瓦器が出土している。

須恵器

椀　図化できたのは２個体であるが、両者とも同じタイプのものと考えられる。底部から口



第661図　ＳＤ136横断面



第662図　ＳＤ136出土土器

縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに肥厚している。底部は、平高台の痕跡をとどめていない。

小皿　図化できたのは１個体のみである。底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるが、口縁部は強いナデ調整により外反傾向にある。底部は比較的しっかりしており、平高台の痕跡をとどめる。

土師器　大皿と小皿が出土している。

大皿　図化できたのは１個体のみである。口縁部は２段の横方向のナデ調整により仕上げられている。底部は手捏ねにより仕上げられている。

小皿　本器種も図化できたのは１個体のみである。大皿同様、口縁部は２段の横方向のナデ調整により仕上げられ、底部は手捏ねにより成形されている。

瓦器　椀が出土しているが、小片のため図化できなかった。

時期　遺物の出土量は多くはないが、図化できた土器およびＳＤ113に切られていることなどから判断すると、川除13期と考えられる。

第272表　ＳＤ136出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	製径	最大径	残数	色調	残存状況	特徴・その他
2039	須恵器・椀	16.2	5.2	6.0	—	—	32	灰白	口縁部3/4	1mm以下の砂粒を多く含む
2040	須恵器・椀	(15.5)	残3.6	—	—	—	—	灰白～灰	口縁部1/2	1mm以下の砂粒を多く含む
2041	土師器・小皿	(8.7)	2.2	(5.0)	—	—	25	灰白	1/8	口縁部を２段の強い横ナデ
2042	土師器・大皿	(13.4)	2.3	(8.2)	—	—	17	にぶい黄橙	1/8	口縁部を２段の横ナデ
2043	土師器・小皿	(8.9)	1.7	(5.2)	—	—	19	にぶい黄橙	口縁部1/4	口縁部を２段の横ナデ

ＳＤ１３８（図版170）

検出状況　Ⅳ区の中央部、小微高地ｄのほぼ中央やや南寄りで検出された。ＳＤ113の北端部で、これに切られる形で検出された。ＳＢ56と重なるが、先後関係は不明である。

形状・規模　中程で屈曲する溝であり、長さは3.00mが確認された。幅は、検出面で1.26～1.85m、溝底で0.50～0.70mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは５～８cmと非常に浅いものである。溝底の標高は、北端で149.46m、南端で149.40mと大きな高低差は認められない。

埋土　灰白色シルト質極細砂の堆積が認められた。

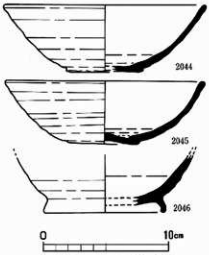
出土遺物　須恵器と土師器が出土している。

須恵器　椀・壺・甕が出土している。

2044・2045は須恵器の椀であり、ともに底部は回転糸切りにより切り離されている。2046は高台をもつ須恵器の椀である。

土師器　椀と器種の特定できない小片が出土している。

時期　出土土器から川除13期と考えられる。



第663図　ＳＤ138出土土器

第273表　ＳＤ138出土土器観察表

番号	器種	法量（cm）						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	縁形	最大径	胎数			
2044	須恵器・椀	(16.0)	5.3	(6.2)	—	—	33	灰	1/3	
2045	須恵器・椀	15.5	5.0	5.8	—		32	灰	完存	外面に墨付着
2046	須恵器・椀	—	残4.5	(9.4)	—	—	—	灰白	底部1/4・体部残か	

ＳＤ１３９（図版167～169）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂの中央部に位置する。北北東から南南西方向にほぼ直線的にのびる溝で、ＳＤ119とほぼ平行している。ＳＤ119との距離は約２ｍである。また、本溝の南側約1/3の地点で、本溝とほぼ直交するＳＤ123の東端に切られている。

形状・規模　検出した長さは10.5ｍを測る。本溝は、中央部を中心に西側肩部が不明瞭で、幅は一定していない。検出面において、1.60～2.90ｍを測る。横断面は皿形ないし逆台形を呈し、溝中央部における検出面からの深さは10～15cmである。溝底部のレベルは南側に傾斜しており、その標高は北側で149.29ｍ、南側で149.16ｍである。

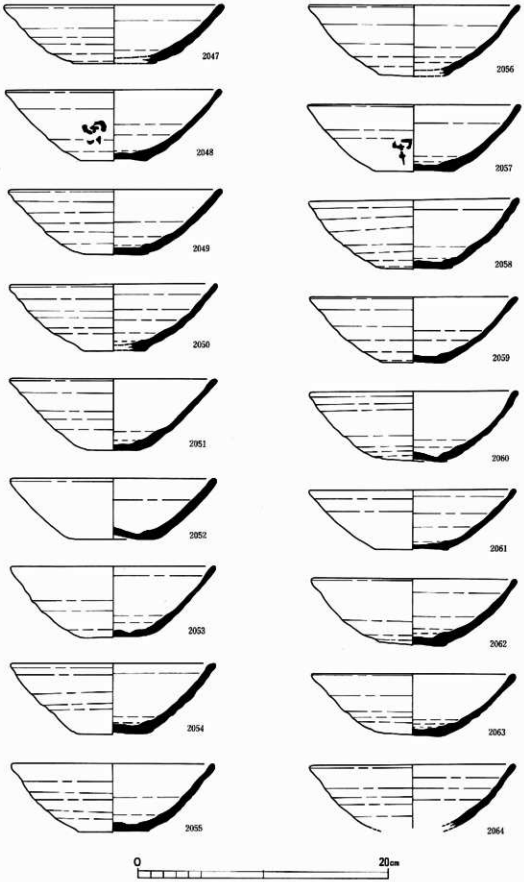
埋土　２層からなり、上から黒褐色砂混じりシルト層、黒色シルト層が堆積していた。

出土遺物　多量の遺物が出土している。特に本溝の中間部で一括して投棄されたように集中して出土している。出土遺物は土器のみで、須恵器・土師器・瓦器・白磁が出土している。

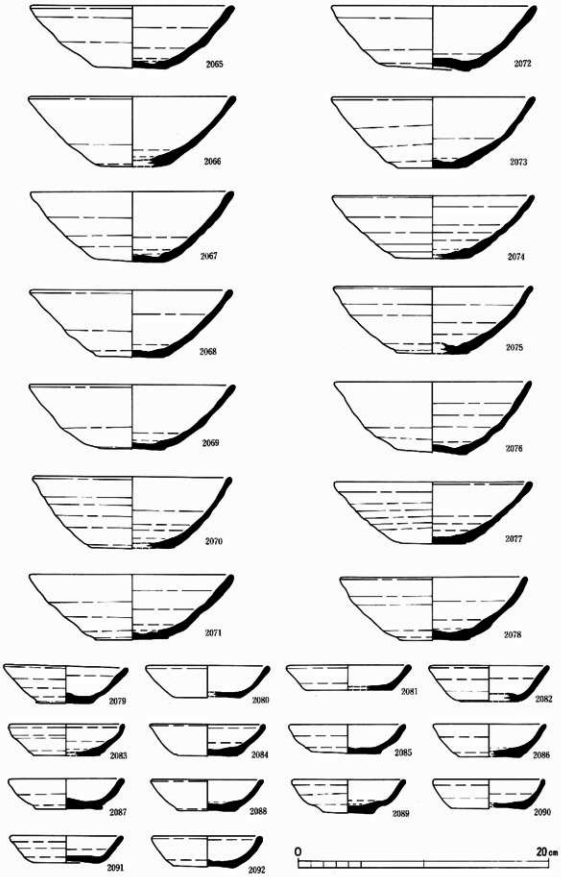
須恵器　椀・小皿・捏鉢が出土している。

椀　基本的には同じタイプに分類できるものである。底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに肥厚している。ただし、このたちあがりの内湾のしかたに個体差が認められ、直線に近いものも認められる。また、底部の形態においても、平高台の痕跡をとどめるもの(2055・2058・2062・2071・2073・2075・2078)ととどめないものとが存在する。底部は、いずれも回転糸切りにより切り離されている。

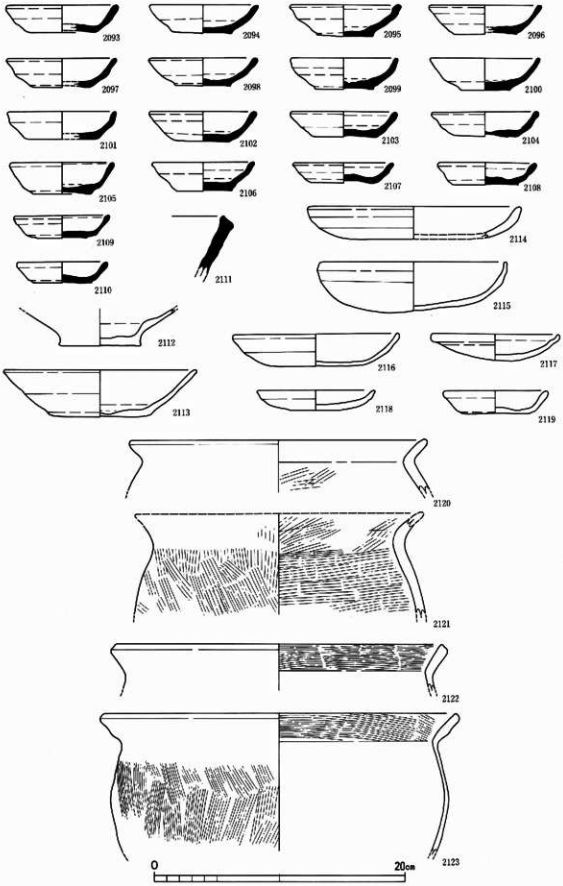
これらの土器のなかで、2061・2075は他の土器と比べて胎土上の特徴を異にしている。2061と2075も互いに異にしている。



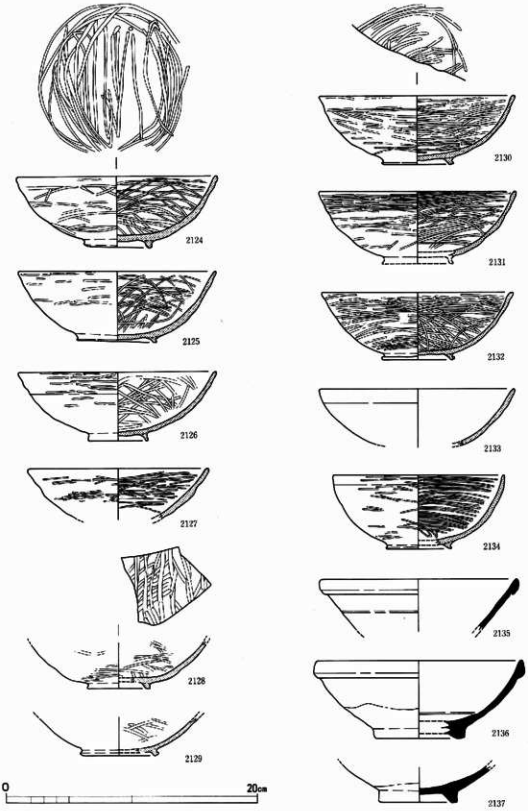
第664図　ＳＤ139出土土器（１）



第665図　ＳＤ138出土土器（２）



第666図　ＳＤ139出土土器（３）



第667図　ＳＤ139出土土器（４）

墨書　なお、2048と2057の体部下半部に、「田中」と書かれた墨書が認められる。

小皿　須恵器のなかで最も多く出土した器種である。体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部が肥厚する形態が一般的である。ただし、口縁部の形態および底部の形態

においていくつかのバリエーションが認められる。まず口縁部では、あまり肥厚せず外反傾向にあるものが認められる。また、底部では平高台の痕跡をとどめるものが認められる。底部はいずれも回転糸切りにより切り離されている。

墨書　なお、2091の外面に墨書が認められるが、残存状況がよくなく判読できなかった。

埦鉢　図化できたのは1個体のみで、しかも口縁部の断面のみである。ほぼ直線的に立ち上がる口縁端部を斜上方にわずかにつまみあげるようなナデ調整を施している。

土師器　大皿・小皿・坏・椀・甕が出土している。

大皿　図化できたのは3個体のみである。3個体とも口縁部は2段の横方向のナデ調整により、底部は手捏ねによる成形の後ナデ調整により仕上げている。

小皿　当器種も図化できたのは3個体であるが、いずれも特徴を異にするものである。2117はいわゆる「て」の字状口縁部を有するものである。口縁部は横方向のナデ調整により、底部外面は手捏ねにより、底部内面はナデ調整により仕上げられている。2118は、口縁部は2段の横方向のナデ調整により、底部外面は手捏ねにより、底部内面はナデ調整により仕上げられている。2119は、底部を回転糸切りにより切り離されている。口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。

坏　図化できたのは1個体のみである。(2113)底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がり、口縁端部は薄くおさめられている。口縁端部は、強いナデ調整によりわずかに外反する傾向にある。底部は回転糸切りにより切り離されている。体部から口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。

椀　当器種も図化できたのは1個体のみで、口縁部を欠いている。須恵器の椀を模倣したものと考えられ、見込みに明瞭な段をもつ。底部は回転糸切りにより切り離され、体部は内外面とも回転ナデ調整により仕上げられている。

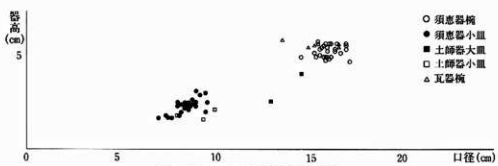
甕　図化できたのは4個体である。口縁部の形態において2つに分けることができる。

ひとつは、体部から口縁部にかけて「く」字形に屈曲するが、その屈曲がゆるやかで内面に稜をもたないものである。口頸部外面は横方向のナデ調整により、口縁部内面は斜め方向のハケ調整により仕上げられている。体部内面は横方向の、外面は縦ないし斜め方向のハケ調整により仕上げられている。

もう一つは、口縁部が「く」字形に明確に屈曲し、内面に明瞭な稜をもつものである。(2112・2123) 口縁部の器壁は比較的厚く、端面をもつものである。口縁部内面は横方向のハケ調整により、外面はユビオサエにより仕上げられている。体部内面は横方向のナデ調整により、外面は縦方向のハケ調整により仕上げられている。より鍋に近い形態のものと考えられる。

瓦器　椀のみが出土しているが、全て同じ特徴を有するものである。比較的浅い椀形を呈する体部に、断面逆三角形ないし逆台形を呈する高台が付く。高台高は4mm前後と低いものである。口縁部は、2段の横方向のナデ調整により仕上げられている。体部は、ユビオサエにより成形されており、指頭圧痕が顕著である。

暗文は、基本的に内外面に施されている。ただし、内面においては比較的密に施されているのに対して、外面はわずかで、暗文が施されていない場所の方が多い状態である。見



第668図　ＳＤ139出土土器法量分布

込みにおいても、残存するものについては暗文が施されており、ジグザグ状あるいは一定方向の暗文が施されている。

白磁　図化できたのは３個体であるが、いずれも碗で、しかもⅣ類に分類されるものである。

時期　本溝からは多量の遺物が出土している。したがって、これらの土器から時期を判断すると川除14期と考えられる。

遺構の性格　本溝は、ＳＤ121とセットとなって、複数の掘立柱建物を取り囲むことから、ひとつの屋敷地を区画する機能をもっていたものと考えられる。

第274表　ＳＤ139出土土器観察表（１）

番号	器種	法量（cm）						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	糸切	最大径	指数			
2047	須恵器・椀	(12.3)	4.6	(6.7)	—	—	26	灰	口縁部1/2・底部僅か	
2048	須恵器・椀	(17.0)	5.6	(5.2)	—	—	32	灰	口縁部1/4・底部3/4	外面に墨書「田中」？あり
2049	須恵器・椀	16.7	5.1	5.0	—	—	30	灰白	ほぼ完存	1～4㎜大の礫含む
2050	須恵器・椀	(16.4)	5.3	(4.6)	—	—	32	青灰	口縁部1/4・底部1/3	口縁補修がシャープに仕上げられている
2051	須恵器・椀	(16.2)	5.6	(4.8)	—	—	34	灰白	口縁部1/4	1～3㎜大の礫含む
2052	須恵器・椀	(16.2)	4.9	(7.0)	—	—	30	灰	口縁部1/4	1～5㎜大の礫含む／他の椀より器壁が厚い
2053	須恵器・椀	16.1	5.6	5.7	—	—	34	灰	口縁部2/3	
2054	須恵器・椀	16.0	5.6	6.3	—	—	35	灰	3/4	1～6㎜大の礫含む
2055	須恵器・椀	16.0	5.4	5.4		—	33	灰白	ほぼ完存	
2056	須恵器・椀	(17.0)	5.5	(5.4)	—	—	32	灰白	口縁部1/2・底部僅か	1～4㎜大の礫含む
2057	須恵器・椀	(17.0)	5.3	(6.0)	—	—	31	灰	口縁部1/4・底部完存	外面下半に墨書「田中」あり
2058	須恵器・椀	16.5	5.6	6.2	—	—	33	灰	口縁部1/2・底部完存	1～5㎜大の礫含む
2059	須恵器・椀	(16.4)	5.2	(5.4)	—	—	31	灰白	1/4	1～5㎜大の礫含む
2060	須恵器・椀	16.2	5.6	5.2	—		34	灰	完存	1～5㎜大の礫含む
2061	須恵器・椀	16.1	4.8	5.7	—	—	29	灰白	口縁部1/2・底部完存	他上の特徴が他の須恵器と異なる
2062	須恵器・椀	16.0	5.2	5.8	—	—	32	灰白	ほぼ完存	2～8㎜大の礫含む
2063	須恵器・椀	16.0	4.9	5.6	—	—	30	灰	口縁部4/5	1～4㎜大の礫含む
2064	須恵器・椀	(16.0)	残5.0	—	—	—	—	灰白	口縁部1/3	1～4㎜大の礫含む
2065	須恵器・椀	15.9	4.9	5.3	—	—	30	灰白	口縁部3/5・底部完存	1～5㎜大の礫含む
2066	須恵器・椀	(15.9)	5.6	(5.9)	—	—	35	灰白	口縁部1/2	
2067	須恵器・椀	15.8	5.5	5.5	—	—	34	明黄灰	口縁部1/2	
2068	須恵器・椀	15.7	5.4	5.3	—	—	34	褐灰	ほぼ完存	1～7㎜大の礫含む
2069	須恵器・椀	15.6	5.0	5.2	—	—	32	灰白	口縁部3/4	

第275表　ＳＤ139出土土器観察表（２）

番号	器種	法量 (mm) 口径	器高	底径	縁径	最大径	個数	色調	残存状況	特徴・その他
2670	須恵器・甕	15.5	5.7	(6.0)	—	—	36	灰白	口縁部1/6	1～4mm大の礫含む
2671	須恵器・甕	15.3	5.1	5.7	—	—	33	灰白	口縁部1/2	1～5mm大の礫含む
2672	須恵器・甕	15.9	4.7	6.5			29	灰白	ほぼ完存	1～6mm大の礫含む
2673	須恵器・甕	15.9	5.6	5.6	—	—	35	灰白	口縁部1/4・底部完存	1～7mm大の礫含む
2674	須恵器・甕	(15.8)	4.9	(5.6)	—	—	31	青灰	1/2	1～4mm大の礫含む
2675	須恵器・甕	(15.6)	5.3	(5.6)	—	—	33	灰	1/5	胎土が他の須恵器と異なる
2676	須恵器・甕	15.5	5.6	5.5	—	—	36	青灰	1/2	1～6mm大の礫含む
2677	須恵器・甕	15.4	4.9	5.2	—	—	31	灰	口縁部2/3・底部完存	
2678	須恵器・甕	14.6	4.9	5.5	—	—	33	明青灰	口縁部1/2	
2679	須恵器・小皿	9.5	3.0	4.5	—	—	31	灰白	口縁部3/4	1～7mm大の礫含む
2680	須恵器・小皿	(9.6)	2.5	(5.4)			26	灰	1/4	
2681	須恵器・小皿	(9.5)	2.0	(6.8)	—	—	21	灰	口縁部1/8	
2682	須恵器・小皿	(9.2)	2.9	(4.7)	—	—	31	灰	1/4	
2683	須恵器・小皿	(9.0)	2.5	(5.2)	—	—	27	灰白	1/2	
2684	須恵器・小皿	9.0	2.5	7.0	—	—	27	灰白	口縁部2/3・底部完存	焼成やや不良／1～4mm大の礫含む
2685	須恵器・小皿	9.0	2.3	5.5	—		25	灰白～灰	口縁部3/4	
2686	須恵器・小皿	(9.0)	3.1	(4.7)	—	—	34	明青灰	1/2	
2687	須恵器・小皿	8.8	2.4	5.7	—	—	27	灰	口縁部2/3	焼成やや不良
2688	須恵器・小皿	8.8	2.4	(5.9)	—	—	27	灰白	口縁部1/3・底部完存	焼成やや不良
2689	須恵器・小皿	8.8	2.6	4.2	—	—	29	灰白	完存	焼成やや不良
2690	須恵器・小皿	(8.7)	2.3	(6.0)			26	灰～灰白	1/2	
2691	須恵器・小皿	(8.6)	2.1	(5.3)	—	—	24	灰～灰白	口縁部1/4・底部完存	1～4mm大の礫含む
2692	須恵器・小皿	8.6	2.5	4.7	—	—	29	青灰	ほぼ完存	
2693	須恵器・小皿	(8.5)	2.2	(5.4)	—	—	25	灰～灰白	1/4	
2694	須恵器・小皿	8.5	2.2	4.7	—	—	25	明青灰	完存	
2695	須恵器・小皿	8.5	2.5	4.5	—	—	29	明青灰	ほぼ完存	
2696	須恵器・小皿	(8.5)	2.3	(5.0)	—	—	27	灰～灰白	1/2	1～5mm大の礫含む
2697	須恵器・小皿	(8.4)	2.3	(4.3)	—	—	27	灰白	1/2	
2698	須恵器・小皿	8.4	2.2	4.4	—	—	26	灰白	完存	
2699	須恵器・小皿	(8.4)	2.5	(4.6)	—	—	29	灰白	1/4	体部外面に汚れあり
2700	須恵器・小皿	(8.4)	2.5	3.8	—	—	29	灰～灰白	口縁部1/4・底部完存	焼成やや不良／1～6mm大の礫含む
2701	須恵器・小皿	(8.4)	2.2	(5.8)	—	—	26	灰白	口縁部3/4	
2702	須恵器・小皿	8.2	2.4	4.6	—	—	28	灰白～灰	口縁部1/2・底部完存	焼成不良
2703	須恵器・小皿	8.2	2.0	5.6		—	24	明黄灰	完存	1～4mm大の礫含む
2704	須恵器・小皿	8.1	1.8	4.8	—	—	22	明青灰	ほぼ完存	1～8mm大の礫含む
2705	須恵器・小皿	8.0	2.5	4.5	—	—	31	灰白	ほぼ完存	1～6mm大の礫含む／焼成やや不良
2706	須恵器・小皿	8.0	2.3	4.6	—	—	28	灰	完存	
2707	須恵器・小皿	7.7	1.6	5.0	—	—	20	灰白	完存	1～5mm大の礫含む
2708	須恵器・小皿	7.5	1.7	5.7	—	—	22	灰白	口縁部3/4	
2709	須恵器・小皿	7.4	1.8	4.0	—	—	24	灰白	ほぼ完存	

第276表　ＳＤ139出土土器観察表（３）

番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	頸径	最大径	指数	色調	残存状況	特徴・その他
2110	須恵器・小甕	(7.0)	1.7	5.0	—	—	24	灰白	口縁部1/3・底部完存	
2111	須恵器・提瓶	—	残4.7	—	—	—	—	灰白	口縁部微か	１～４mm大の礫含む
2112	土師器・椀	—	残2.9	(6.5)	—	—	—	橙～淡黄橙	底部完存	底部糸切り／内外面とも横ナデ仕上げ
2113	土師器・坏	(15.2)	3.7	8.0	—	—	24	灰白	口縁部1/8・底部完存	底部糸切り／内外面とも横ナデ仕上げ
2114	土師器・大皿	(16.4)	2.5		—	—	15	灰白～淡黄橙	口縁部1/4	
2115	土師器・大皿	14.6	4.0		—	—	27	灰白～淡黄橙	ほぼ完存	口縁部２段の横方向のナデ／全体的に歪んでいる
2116	土師器・大皿	(13.0)	2.5		—	—	19	灰白	1/4	口縁部２段の横方向のナデ
2117	土師器・小皿	10.0	2.1		—	—	21	淡黄	口縁部3/4・底部完存	
2118	土師器・小皿	(9.4)	1.6		—	—	17	橙	2/3	ほぼ精良な粘土
2119	土師器・小皿	8.0	1.5	5.4	—	—	22	淡黄	ほぼ完存	底部糸切り？
2120	土師器・甕	(23.3)	残4.9	—	(21.6)	—	—	淡黄橙	口縁部1/8	
2121	土師器・甕	—	残7.4	—	(20.0)	—	—	灰白	1/4	内外面ともハケ仕上げ
2122	土師器・甕	(25.7)	残3.5	—	(24.4)	—	—	にぶい橙	口縁部1/4	
2123	土師器・甕	(28.6)	残11.4	—	(25.2)	(27.0)	—	灰褐～褐灰	口縁部1/6	口縁部外面・体部外面下半に煤付着
2124	瓦器・椀	15.6	5.6	5.4	—	—	35	灰白	ほぼ完存	内外面に暗文あり
2125	瓦器・椀	15.6	5.6	6.2	—	—	35	灰	3/4	内外面に暗文あり／見込みはジグザグ状暗文
2126	瓦器・椀	(15.6)	5.4	(4.8)	—	—	34	灰	口縁部1/2・底部欠	内外面に暗文あり／炭素の吸着がやや不十分
2127	瓦器・椀	(14.2)	残4.1	—	—	—	—	灰	口縁部1/8	内外面に暗文あり
2128	瓦器・椀	—	残3.7	5.9	—	—	—	暗灰	底部1/3・体部微か	内外面に暗文あり
2129	瓦器・椀	—	残2.9	(6.2)	—	—	—	灰	底部1/4・体部微か	内面に暗文あり／外面は磨滅のため観察できない
2130	瓦器・椀	(15.3)	5.5	(5.7)	—	—	35	暗灰	1/2	内外面に暗文あり／粘良な粘土／黄白の形状一定でない
2131	瓦器・椀	(15.5)	残5.3	—	—	—	—	灰	1/4	内外面に暗文あり
2132	瓦器・椀	(15.0)	5.4	(5.8)	—	—	36	灰	口縁部1/2・底部完存	内外面に暗文あり／精良な粘土／黄白の形状一定でない
2133	瓦器・椀	15.4	残4.6	—	—		—	暗灰	口縁部3/4	磨滅が顕著なため暗文の有無観察できない
2134	瓦器・椀	(13.6)	5.8	(5.0)	—	—	42	灰白	口縁部1/7・底部欠か	内外面に暗文あり／見込みはジグザグ状の暗文
2135	白磁・碗	(15.4)	残4.0	—	—	—	—	灰白	口縁部1/3	外面に一条の沈線あり／内外面とも施釉
2136	白磁・碗	(16.4)	6.1	(7.2)	—	—	37	灰白	1/3	
2137	白磁・碗	—	残2.9	(6.3)	—	—	—	灰白	底部3/4	

ＳＤ１４０

検出状況　Ⅳ区の中央部、小微高地ｄのほぼ中央やや南寄りで検出された。ＳＤ105の南西部で、これに接する形で検出された。ＳＢ56・ＳＢ61と重なるが、先後関係は不明である。

形状・規模　長さは4.35mが確認された。幅は、検出面で0.30～0.55m、溝底で0.07～0.35mを測る。横断面は皿形を呈し、検出面からの深さは５～８cmと非常に浅いものである。溝底の標高は、東端で149.44m、西端で149.41mと大きな高低差は認められない。

埋土　灰白色シルト質極細砂の堆積が認められた。

出土遺物　遺物は出土していない。

時期　遺物は出土していないが、埋土の類似などから川除12～14期と考えたい。

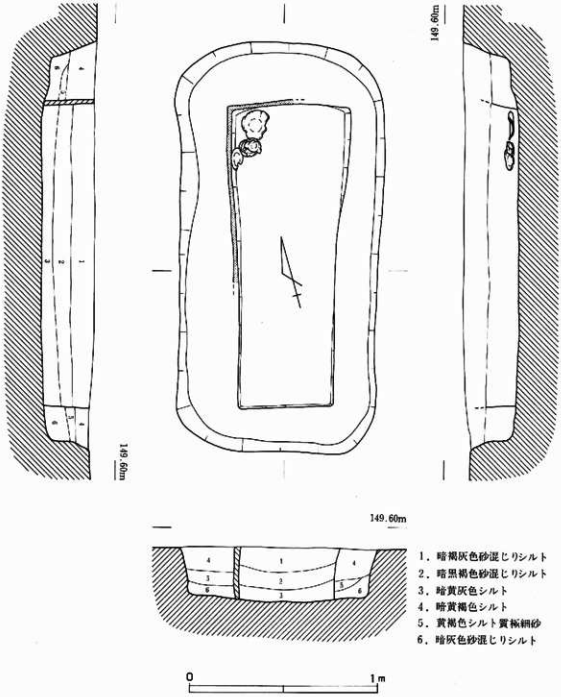
（５）墓

ＳＸ０７（図版１４０・１７０）

検出状況　Ⅳ区中央部、掘立柱建物群Ａ内に位置する木棺墓である。平面的には、ＳＢ61の中央部にあたる。他に本遺構が位置する掘立柱建物群とほぼ同時期と考えられる柱穴と接している以外は、明確な切り合い関係は認められない。

掘り方　平面形は隅円長方形を呈する。主軸方向は、Ｎ－15°－Ｅを指向する。

規模　検出面における規模は、主軸方向で2.15m、その直交方向で1.05mを測る。横断面は箱形を呈し、底部は平坦となっている。検出面からの深さは30cmである。底部における規模は、



第669図　ＳＸ07

主軸方向で2.05m、その直交方向で0.95mを測る。

埋土　掘り方内の埋土は大きく3層に分かれ、上から暗黄褐色シルト層、黄褐灰色シルト質極細砂層、暗灰色砂混じりシルト層が堆積していた。

棺　掘り方内を約10～15cm掘り下げた段階で、棺のプランを確認することができた。特に、棺の北辺から西辺にかけて、幅約3mm程の棺そのものの痕跡を確認することができた。ただし、掘り方内の横断面の観察によると、掘り方を確認したレベル（遺構検出面）までその痕跡が上がることが明らかとなった。

規模　棺の規模は、主軸方向で1.60m、その直交方向で0.50mを測る。また、棺底は掘り方の底部とほぼ同じで、棺を検出した面から底部までの深さは20cmである。

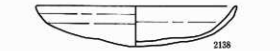
埋土　棺内には3層からなる埋土が堆積していた。（第669図）

出土遺物　棺内北西隅、棺底より土師器が出土している。埋葬当初に棺内に副葬されたものと考えられる。出土した土師器は、大皿1枚と小皿4枚の計5個体である。

大皿　口縁部は2段の横方向のナデ調整により仕上げ、底部は手捏ねにより仕上げられている

小皿　形態上・調整技法の特徴から大きく2つに分けることができる。

一つは、いわゆる「て」の字形口縁部を有するものである。「て」の字形を呈する口縁部は、横方向のナデ調整により仕上げられている。底部は、手捏ねの後ナデ調整により仕上げられている。もう一つは、底部を回転糸切りにより切離すものである。体部から口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。



第670図　ＳＸ07出土土器

時期　副葬されたと考えられる土師器から判断すると、川除12期と考えられる。

遺構の性格　本遺構の方向性をみると、本遺構が位置する掘立柱建物群Ａの棟軸方向とほぼ一致するものである。さらに、時期もほぼ同じ時期に位置付けられるものである。したがって、本遺構は、これらの掘立柱建物からなる屋敷地に伴う屋敷墓と考えられる。

第277表　ＳＸ07出土土器観察表

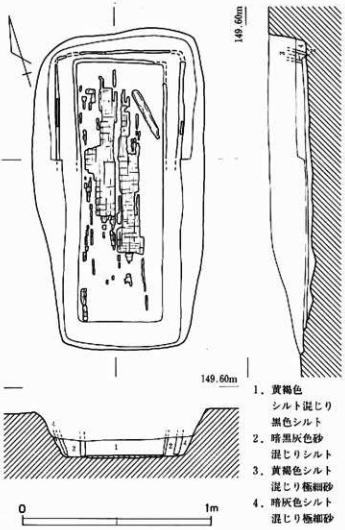
番号	器種	法量（cm） 口径	器高	底径	厚径	最大径	出数	色調	残存状況	特徴・その他
2138	土師器・大皿	(16.0)	3.2		—	—	20	にぶい黄橙	口縁部3/4	口縁部2段のナデ／粘土に近い胎土
2139	土師器・小皿	(9.0)	1.5		—	—	16	灰白	1/2	口縁部2段のナデ
2140	土師器・小皿	9.0	1.9		—	—	21	にぶい黄橙	ほぼ完存	口縁部2段のナデ
2141	土師器・小皿	(8.9)	1.8		—	—	11	灰白	底部1/2・口縁部1/8	口縁部2段のナデ
2142	土師器・小皿	8.9	1.5	4.7	—	—	16	灰白	ほぼ完存	底部糸切り

ＳＸ08（図版140・176）

検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ａ北部に位置する。ＳＥ12の北側にあたり、掘り方を検

している。また、本遺構は、ＳＤ115を検出した段階で、そのプランを確認できたため、南側約1/3は棺の立ち上がりをほとんど検出することができなかった。ただし、ＳＤ115との明確な切り合い関係は、調査時においては明らかにすることはできなかった。

掘り方規模　平面形は隅円長方形を呈する。主軸方向は、Ｎ－14°－Ｅを指向する。検出面における規模は、主軸方向で1.65m、その直交方向で0.92mを測る。同じ木棺墓であるＳＸ07より若干小型のようであるが、ＳＤ115を検出した際に南側掘り方の大半が削平されたためで、本来はもっと大きかったものと推定される。したがって、ＳＸ07とＳＸ08はほぼ同規模であったものと考えられる。　また、横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは最もよく残存する北側で20cmである。そして、底部における規模は、主軸方向で1.62m、その直交方向で0.65mを測る。



第671図　ＳＸ08

埋土　掘り方内は１層からなり、暗黒灰色砂混じりシルト層が堆積していた。

棺　掘り方内を約15cm掘り方下げた段階で、棺の痕跡（木質）を確認することができた。特に北側においては、棺材そのものが遺存しており、そのプランを明瞭に把握することができた。また底部においても棺材が遺存していた。ただし、南側の側面および小口についてはＳＤ115との関係もあって十分確認することはできなかった。

そしてこの木棺は、墓壙底の断ち割り調査の結果、小口板の外側まで底板がのびていることが確認でき、組合せ式の木棺であることが明らかとなった。

二重構造　ところが、本遺構においては、ＳＸ07と異なり、木質部分が側板および小口板ともに二重に認められ、断面においても確認することができた。つまり、本遺構は、棺が二重構造となっていたものと考えられ、外側については槨の機能をなしていたのではないかと考えられる。ただし、本遺構の調査後の断ち割り調査の結果、棺底の板材は外側の側板まで広がることは確認することはできなかった。したがって、外側については、側板および小口

板のみで、底板は存在しなかったものと推定される。

規模　側板および小口板は北半分のみしか検出することができなかったため、最もよく遺存する底板からその規模を測ると、主軸方向で1.35m、その直交方向で0.43mを測る。また、最もよく遺存している北側で、棺のプランを検出した面からの深さはわずか５cmである。遺存する棺材の厚さは、側板と小口板は約２cm、底板は約１cmである。

また、外側と内側の間隔は、側板側で10cm、小口側で５cmを測る。そして、外側の棺の規模は、遺存する北半分から推定すると、主軸方向で1.50m、その直交方向で0.65mである。

出土遺物　土器と鉄器が出土している。土器は、棺内埋土中からの出土で、本遺構が埋没した段階に伴うものと考えられ、本遺構の下限を示す資料と考えられる。これに対して鉄器は、棺底からの出土で、当初から副葬されていたものと考えられる。

土器　須恵器・土師器・瓦器が出土している。土師器と瓦器については小片のため図化できなかった。

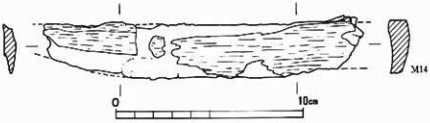
須恵器　椀・小皿・甕が出土しているが、甕については小片のため図化できなかった。椀は、３個体確認できたが、完形のものはない。ただし３個体とも同じタイプのものと考えられる。底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部がわずかに肥厚するものである。小皿は１個体確認することができた。口縁部は内湾気味に立ち上がるが、口径に比べて立ち上がりはわずかである。

鉄器　小刀が１点出土している。刃部のみの残存で、しかも刃先および関部付近を欠いている。刃部断面は鋭角な三角形をなし、明確な棟部をもつ。全体的に木質が付着しており、鞘に納められて副葬されたようである。残存長は17cmで、刃部の最大幅は2.85cmを測る。また棟幅は関部付近で0.80cm、刃先部分で0.50cmである。

なお、この小刀の出土状態は、棺内の北東隅で出土しているが、棺の主軸方向とは異なるものである。したがって、当初はどの方向に納められていたのかは復元できない。被葬者の上に副葬されていたものが腐敗後棺底に落ち込んだことも考えられる。

時期　ＳＸ07と異なり、埋葬当初に副葬された土器が出土していない。したがって、埋葬時の時期を判断することは困難であり、埋土内から出土した土器からその埋没時期がおさえられるのみである。ただし、当遺構の所在する掘立柱建物群に伴うものと考えられ、これらの建物の時期から川除13～14期と考えられる。

遺構の性格　先述したように、本遺構は掘立柱建物群と時期を同じくするものである。したがって、ＳＸ07と同様、これらの掘立柱建物群から構成される屋敷地に伴う屋敷墓と考えられる。

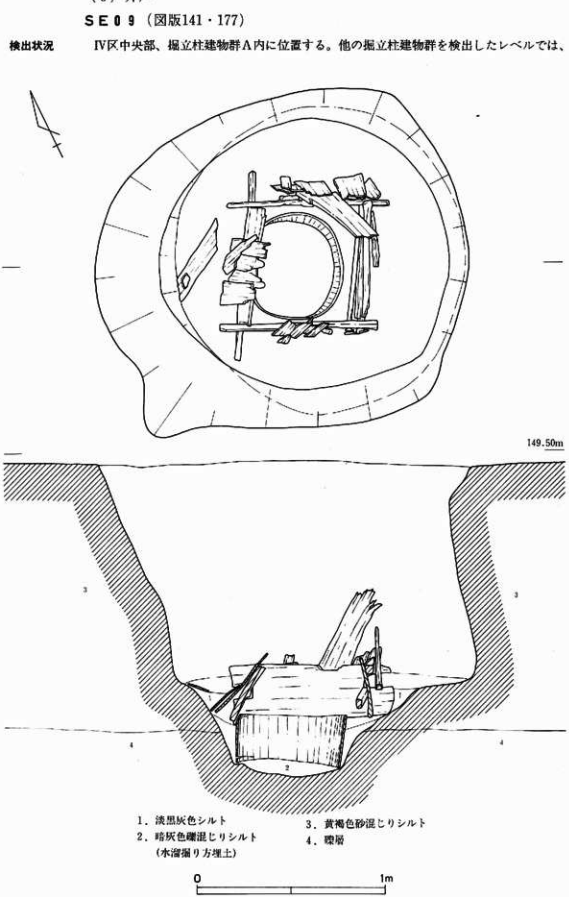


第672図　ＳＸ08出土鉄器

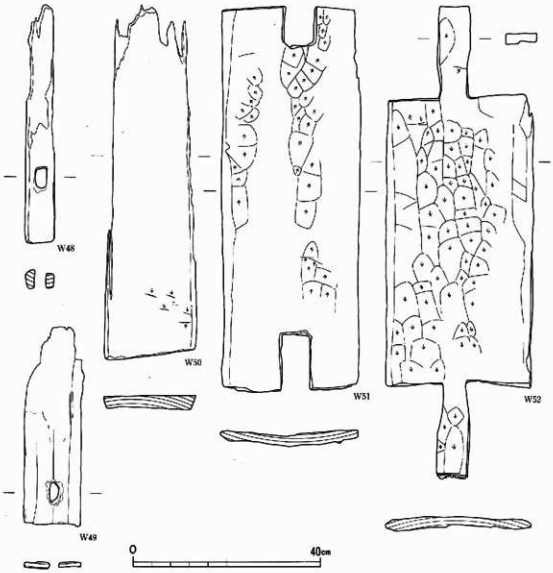
（6）井戸

ＳＥ０９（図版141・177）

検出状況　Ⅳ区中央部、掘立柱建物群Ａ内に位置する。他の掘立柱建物群を検出したレベルでは、

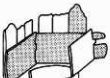


第673図　ＳＥ09



第674図　ＳＥ08井戸材

当初確認することができず、このあたりを約15cmほど掘り下げた段階で確認することができた遺構である。他の遺構との明確な切り合い関係は認められない。



掘り方　平面形は、不整形な円形を呈する。検出面におけるその規模は、2.00×1.75mである。掘り方は、井戸枠を据える深さまで一端掘り下げた後、水溜用にさらに掘り下げており、２段掘りとなっている。そして水溜用の掘り方は、本遺構の立地する淡黄褐色シルト混じり極細砂層の下層にある礫層を約20cm掘り下げている。断面形は、上段部が不整形な方形、下段部が逆台形を呈する。そして、検出面からの深さは、水溜掘り方上面までで1.15m、最下層までで1.60mである。

井戸側　本井戸は木組の井戸で、一見したところＢⅥ類横板井籠組井戸に分類されるものと考えられる。しかし、後述するように井籠組する板材を観察すると、板材自体が極めて良好に遺存しているにもかかわらず、積みあげていく際の面になる板材上側側面が面をなしていない。加えて、縦板としてふさわしい板材（W50）が出土しており、隅柱と考えられる柱

材（W73）も1点であるが井籠組みの外側から出土している。以上のことから、本井戸はBⅥ類横板井籠組に分類されるものではなく、隅柱（W48）にほぞ穴が存在することからBⅣ類縦板組隅柱横桟どめに分類される組み方であったものと考えられる。したがって、遺存していた井籠組は、水溜を囲むためのものであったと考えたい。

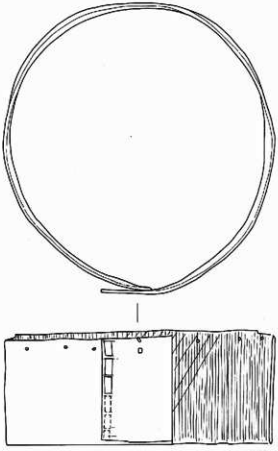
W52は全長100.20cmを測り、その幅は30.85cmである。板材の両端を削り出しによって凸部を造り出している。凸部の長さは、19.5cmと20.2cmである。凸部は端部ほど幅が広くなるよう作られており、その幅は端部で6cm、基部で5～6cmである。板材の厚さは2.5cmである。両面と手斧により削り痕が顕著に残っている。樹種はヒノキである。

W51は全長81.7cmを測り、幅は29.25cmである。厚さは3.50cmである。板材の両端中央部が「コ」の字形に抉られ、ほぞを形成している。ほぞの規模は、一端は深さ11.7cm、幅6cmで、他端は深さ8cm、幅6.5cmである。当材についても、手斧により削り痕が顕著に残っている。樹種はヒノキである。

W48は隅柱材で、先端部は腐敗し遺存していない。また、遺存する部分でも半分以上は腐敗が進行しており、当初の形態が遺存しているのは、下端から約20cmまでである。残存長は50cmで、断面は4.10×6.05cmの長方形である。下端から11.5cmの位置にほぞ穴があり、その規模は2.5×5.0cmである。樹種はモミである。

W50は縦板材である。隅柱同様先端部は腐敗により欠損している。残存長は75cmを測り、最大幅は19.5cm、厚さは3.1cmである。樹種はヒノキである。

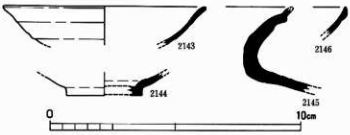
W49は縦板の周囲を取り囲む控えの縦板である。縦板（W50）同様上端部は腐敗により欠損している。本来の縦板よりはるかに小型で、残存長は42.1cmを測り、幅は11.8cm、厚さは1cmである。なお、本材においては下端から5cmの位置に2×4cmの不定形な穴が開けられている。この穴については、SE10の控えの縦板においてもみられるものであるが、本井戸を組むためなのか、転用を示すものなのかは判別がつかない。樹種はモミである。



第675図　SE09水溜

水溜　曲物が転用されていた。側板は2ケ所で綴じ合わされており、その綴じ合わせ方法は、前上内下外6段後

内１段縦じと１列内２段縦じである。また、側板上部には数ケ所にわたって木釘穴が認められ、以前に曲物として使用されていたものを、底板を外し水溜に転用したことが明らかである。また、曲物としての使用時と天地を逆にしている。



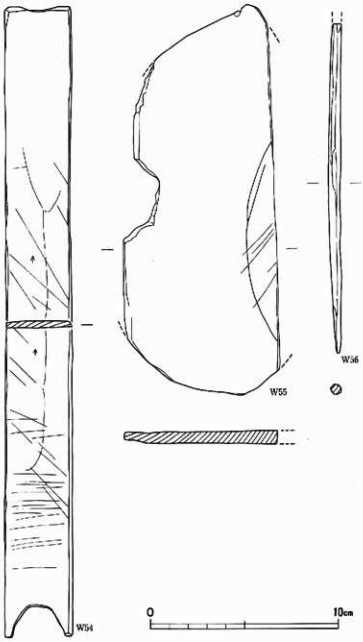
第676図　ＳＥ09出土土器

径は57.4～60.4cmを測り、深さは20.8cmである。樹種はヒノキである。

出土遺物　本遺構にともなう遺物はわずかであるが、土器と木製品が出土している。特に土器については、明確に井戸枠内から出土したものは確認できなかった。

土器　須恵器と白磁が出土している。

須恵器　椀と甕が出土しているが、いずれも小片のため全体の器形の理解できるものはない。椀は口縁部片と底部片の２個体図化できたが、同じタイプのものと考えられる。口縁部は、内湾気味に立ち上がる体部に対して、強い横ナデ調整により外反し、端部は薄くおさめられている。底部は平高台を有するもので、見込み部も段がついている。底部はヘラ起こしにより切り離されており、相野窯跡群



第677図　ＳＥ09出土木製品

産と考えられる。

甕は断面のみしか図化できなかった。口頸部は内外面とも横ナデ調整により仕上げられている。体部外面はタタキ整形により仕上げられ、内面はナデ調整により仕上げられている。外面のタタキ整形については、左上がり方向の後横方向のタタキを施している。

白磁　Ⅳ類に分類される碗の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できたのは断面のみである。

木製品　不明品が3点出土している。井戸材とともに出土したものである。

不明品　W54は、33.75×30.5cmの板材である。厚さは0.35cmである。下端部が逆U字形にえぐられている。この抉りの深さは1.5cmである。両面とも多数の刃物による傷が認められる。また、手斧による削りの痕も認められる。樹種はヒノキである。

W55は、一見曲物の底板の一部と考えられる板状の木製品である。ただし、平面形が大変歪であり、木釘穴などが認められないことから、曲物の底板と断定するにはいたらなかった。規模は8.2×20.4cmを測り、厚さは0.3～0.7cmである。樹種はヒノキである。

時期　遺物量自体がわずかである上に、掘り方内および井戸枠内から確実に出土した遺物がないため、本遺構の掘削・存続時期を特定することは困難である。ただし、図化できた土器の出土位置が、本井戸の埋没に伴う層からの出土であることから、図化した土器をもって埋没時期を判断することができる。これによると、川除11期と考えられる。

第278表　ＳＥ09出土土器観察表

番号	器種	法量（cm）						色調	残存状況	特徴・その他
		口径	器高	底径	胴径	基底径	指数			
2143	須恵器・椀	(16.0)	現4.0	—	—	—	—	灰白	1/12	
2144	須恵器・椀	—	現1.8	(6.0)	—	—	—	灰白	底部・体部とも僅か	底部ヘラ起こし
2145	須恵器・椀	—	現5.6	—	—	—	—	灰	口縁部残か	体部外面：縦方向のタタキの後左上がり方向のタタキ
2146	白磁・碗	—	現2.4	—	—	—	—	灰白	口縁部僅か	内外面とも釉付着

ＳＥ１０（図版142～144・170～172・176・178・179）

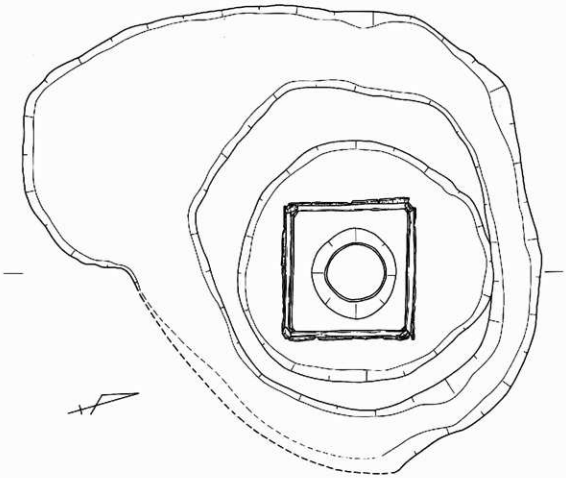
検出状況　Ⅳ区中央部南側、掘立柱建物群Ｂ北東隅に位置する。井戸本体に伴う排水溝が、ＳＢ72に伴うＰ１に切られている以外は、他の遺構との切り合い関係は認められない。

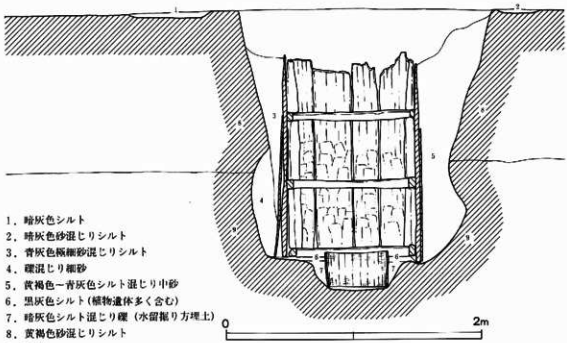
排水溝　井戸を中心に同心円状に取り囲むように、溝状の遺構がめぐっている。ただし、南西部はかなり幅が広くなり、その平面形は不整形となっている。井戸と全く別の遺構とは考え難く、井戸に伴う排水溝的な性格が考えられる。

検出面における幅は、北側と東側で40～50cmを測り、西側は60cm、南側は65cmと広くなっている。横断面は逆台形を呈し、検出面からの深さは３～14cmと大変浅い溝である。また、井戸掘り方との間隔は30～40cmを測るが、北側においては溝の掘り方と井戸の掘り方が隣接している。

掘り方　平面形は、やや不整形な円形を呈する。検出面における規模は、南北方向で1.70m、東西方向で1.85mを測る。

断面　断面は、本遺構が立地する淡黄褐色シルト混じり極細砂層の下層の礫層まで掘り込まれ


149.50m


1．暗灰色シルト
2．暗灰色砂混じりシルト
3．青灰色極細砂混じりシルト
4．礫混じり細砂
5．黄褐色ー青灰色シルト混じり中砂
6．黒灰色シルト（植物遺体多く含む）
7．暗灰色シルト混じり礫（水留掘り方埋土）
8．黄褐色砂混じりシルト
9．礫層
0
2m

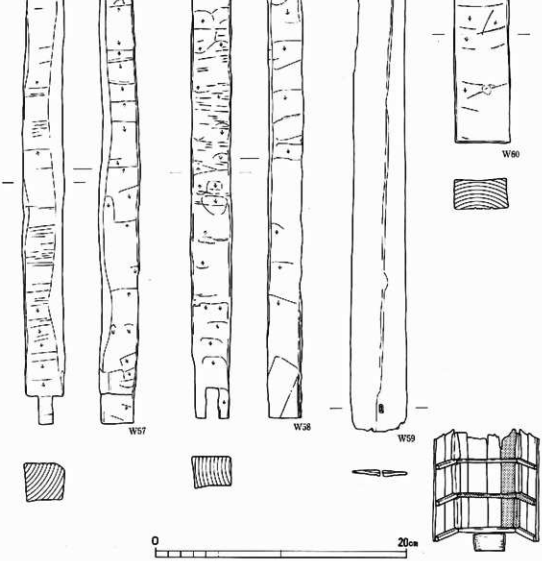
第678図　ＳＥ10

ており、その断面形は逆台形を呈する。ただし、下層の礫層を掘り抜いた部分は、礫層自体がもろく崩れたためか下膨れ気味となっている。検出面からの深さは2mを測り、底部における幅は1.10mである。そして、井戸本体の掘り方の下面からさらに、水溜用に掘り込まれて、2段掘りとなっている。この掘り方の断面も逆台形を呈し、その深さは20cmを測る。掘り方の状面は70cmを測り、底部における幅は45cmである。

埋土　掘り方内は細砂～礫が充填されていた。

井戸側　本井戸は木組みの井戸で、基本的にはBⅣ類（縦板組隅柱横桟どめ）に分類されるものである。平面形は90cm×95cmとほぼ方形に近いものである。

隅柱　本井戸についてBⅣ類に分類されるものであるとしたが、隅柱についてはあまり例を見ないタイプのものである。つまり、一般的にみられる隅柱は、4隅とも一本の柱を用い、



第679図　ＳＥ10井戸材

そこにほぞ穴をあけ横桟を挿入している。ところが本井戸の隅柱は1本からなるものではなく、横桟と横桟の間に、長さ46cm、幅11.60cm、厚さ6.50cmの角材（W60）を立て、横桟を支えている。そして、角材の面が内側に向くように立てられており、側板との角度が135°となっている。ＳＥ10では、これら支柱が3段にわたって確認できた。

横桟　横桟の組み方は、a類に分類されるものである。

W57は、全長106.70cmを測り、断面は8.00×8.60cmと方形に近いものである。各面とも手斧による削痕が顕著に残っている。また、仕口部は長さ7cmにわたって2.5cmずつ削りとられ、その厚みは3cmとなっている。

W58は、全長105.1cmを測り、断面は6.90×8.50cmと長方形を呈している。仕口部は、長さ7cmにわたって中間部が3cm抉り取られている。

側板　各面とも4枚の縦板を用いている。そして、これらの縦板の裏側を、やや小型の縦板（W59）で補強している。各縦板の幅は一定していないが、20～30cmを測る。また井戸上部は腐敗し遺存しておらず、全体の規模は不明であるが、長さは最大で1.55m残存している。また、下部ほど遺存状況が良好で、その厚さは5ないし6cmを測る。また手斧による削痕が顕著に認められる。

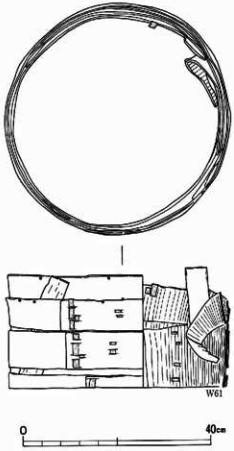
この縦板を補強する板（W59）は、残存長107.60cmを測り、幅は11.70cm、厚さは1.30cmである。また、W59については、端部付近に1.0×0.5cmの方形の小穴が穿たれている。ただこの小穴については、本井戸を組む際に用いられたものなのか、転用材であることを示すものなのかは明らかにしえない。

樹種　本井戸の井戸材のうち、全ての部材ごとに樹種鑑定をおこなった。その結果は別表（第285～289表）の通りである。この結果、同じ部材であっても、異なる樹種の材を用いていることが明らかとなった。

埋土　上から下まで有機質および腐食物を多く含む暗黒灰色シルト層が堆積していたが、細かく分層することはできなかった。

水溜　曲物を転用している。側板の上端部には、木釘穴が数ケ所認められたことから、この曲物は水溜用として転用されたものと考えられる。また、2ケ所で桜皮で綴じられているが、各綴じ合わせとも2列にわたっている。径36cmを測り、深さは23.3cmである。

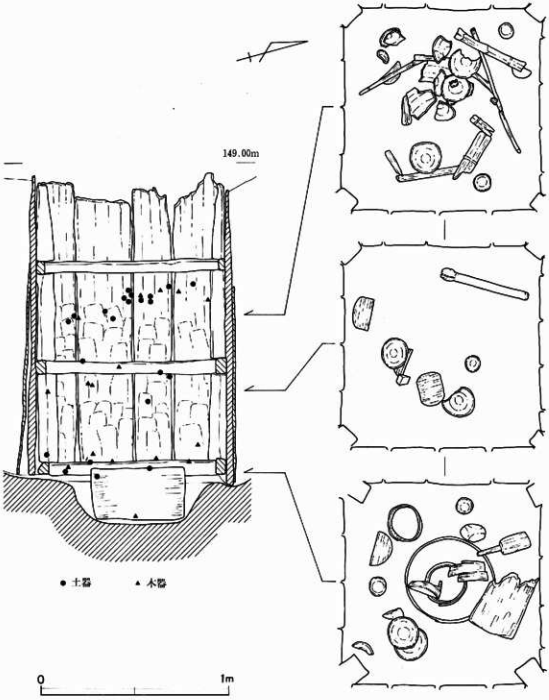
箍　なお側板の周囲に3帯の箍を巻き、箍と側板の間には4ケ所にわたって厚さ5mm程の板（縦板）を挟んで、曲物本体を補強している。上段の箍は2ケ所で桜皮で綴じ合わされており、その綴じ合わせ方は、2列前上外下内3



第680図　ＳＥ10水溜

段後内1段綴じと1列内2段綴じである。中段の籠についても2ケ所で綴じ合わされており、その綴じ合わせ方は、2列前内3段後内1段綴じと1列内2段綴じである。下段の綴じ合わせ方は、1列外1段綴じである。特に上段の籠については、何ケ所かで木釘穴が認められることから、本来曲物の側板として用いられていたものを帯状に分割し、転用したものである。籠の幅は、上段から6.40cm、8.00cm、2.80cmである。

樹種　曲物本体および3帯の箍・4枚の縦板全てヒノキ材である。



第681図　ＳＥ10遺物出土位置

出土遺物　井戸枠内より多量の遺物が出土している。(第681図)

掘り方内からはほとんど遺物は出土せず、排水溝からわずかに土器が出土している程度である。出土した遺物は、土器・木製品・鉄器からなり、その出土位置は井戸枠掘り方下層（水溜上面・下層集中部）・横桟２段目（下から）前後（中層集中部）・横桟３段目のやや下層（上層集中部）の３ヶ所から集中している。ただし、土器の接合関係をみると、上層から出土したものと、水溜上面から出土したものが接合するなど、時期的な差はないようである。

土器　須恵器・土師器・瓦器・白磁が出土している。

須恵器　椀・小皿・捏鉢・甕・壺が出土しているが、甕は小片のため図化できなかった。

椀　基本的に底部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁端部を肥厚させるものである。ただし、見込みがわずかに段をもち、古い傾向を示すものも認められる。特に2150については底部の形態が平高台の痕跡をとどめるもので、古い傾向がより顕著である。なお2147の内面は、捏鉢のような使用により磨滅が顕著であることから、捏鉢のようなものとして使用したのではないかと考えられる。

墨書　この他、2159は底部から体部にかけて「東田中」と、2165は体部下半に「田中」と、それぞれ墨書されている。

小皿　基本的には同じタイプに分類できるものである。ただし、口縁部の立ち上がりの形態において、内湾気味に立ち上がるもの、直線的に立ち上がるものとに分けられる。また、平高台の痕跡をとどめるものも認められる。

また、2178は一般的な小皿に輪高台の付くもので、あまり例をみないものである。高台は比較的内側に付き、断面逆台形を呈し、端面はわずかに内傾している。

捏鉢　図化できたのは１個体のみである。ほぼ直線的に立ち上がる体部に対して、口縁部は外方向につまみ出すような強いナデ調整によりわずかに外反する傾向にある。そして、端面は体部の立上り角に対して直角になっている。

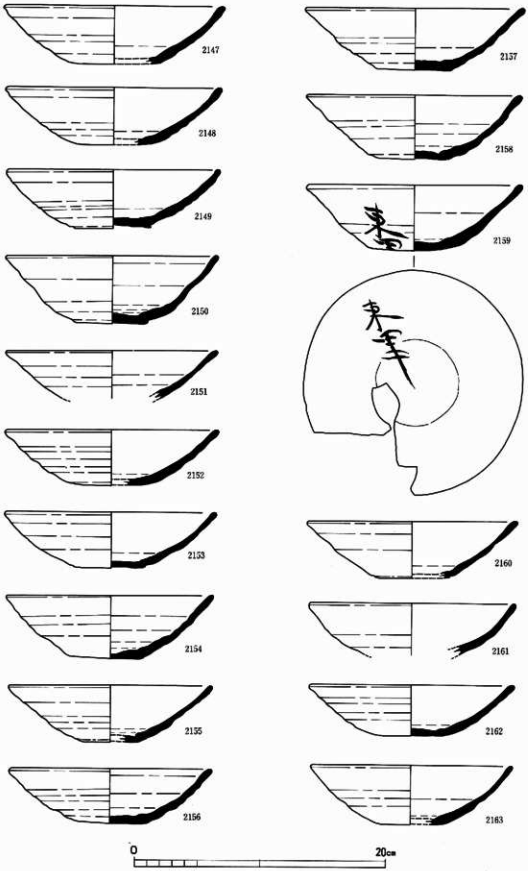
壺　底部から体部下半部が残存するのみである。体部は内外面とも横方向のユビナデ調整により仕上げられているが、内面には粘土紐の痕が顕著に残っている。底部はヘラ起こしによって切り離されている。調整技法から、相野窯跡群産ではないかと考えられる。

土師器　大皿・小皿・坏・甕が出土している。

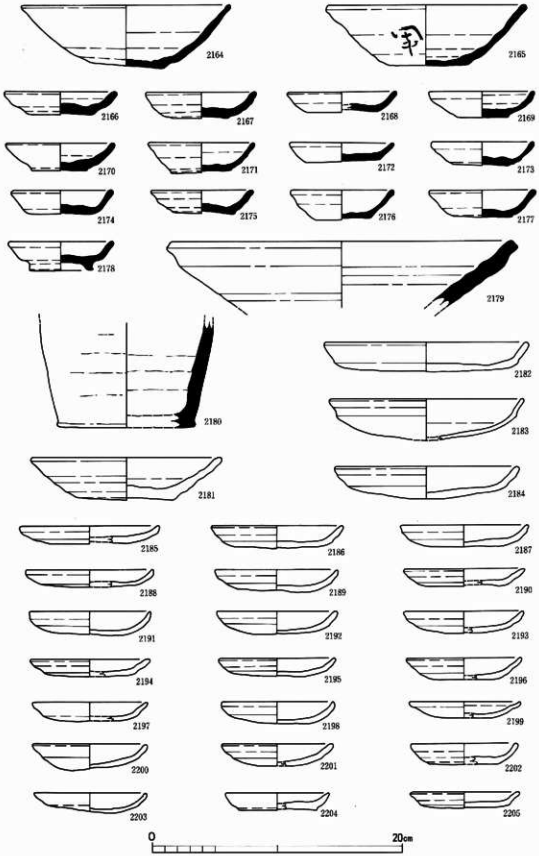
大皿　図化できたのは３個体で、口縁部の調整方法で2182と2183・2184とに分けることができる。2182は、口縁部を１段の横方向の強いナデ調整により仕上げている。このため、口縁部と体部との境は明瞭な段をなしている。一方2183・2184は、口縁部を２段の横方向のナデ調整により仕上げている。底部は、３個体とも手捏ねにより仕上げている。

小皿　底部の形態により、大きく２つに分けることができる。ひとつは、2202・2204のように底部を回転糸切りにより切り離すものである。口縁部は回転ナデ調整により仕上げられている。また、2202は肉眼観察において、胎土上の特徴が他の小皿と異なるものである。

もう一つは、底部を手捏ねにより成形するものである。口縁部を２段の横方向のナデ調整により仕上げている。そしてこのナデ調整が強く施されたものについては、体部との境に明瞭な段が形成されている。また、井戸枠内出土の土師器は、他の遺構に比べて土器の



第682図　SE10出土土器（1）



第683図　ＳＥ10出土土器（２）